



フィールドで出会う

風と人と土 4

田中樹・宮寄英寿・石本雄大 編

















使用写真

- 表紙 タンザニアの大地－緑の中に開かれる街－
[2014 年 3 月 タンザニア 撮影＝田中樹]
- P.1 渡し舟で対岸の村へ
[2017 年 7 月 ラオス 撮影＝田中樹]
- P.2 脱穀作業
[2005 年 1 月 ニジェール 撮影＝石本雄大]
- P.3 田んぼの中のファームハウス
[2015 年 11 月 インドネシア 撮影＝宮寄英寿]
- P.4 野良仕事を終えて
[2015 年 11 月 インドネシア 撮影＝宮寄英寿]
- P.5 砂丘に沈む月
[2016 年 9 月 ナミビア 撮影＝田中樹]
- P.6 トウモロコシを製粉中
[2011 年 4 月 ザンビア 撮影＝石本雄大]
- P.7 人びとの想いが込められたお墓の村
[2017 年 3 月 ベトナム 撮影＝田中樹]
- P.8 ナイル河の街アスワン
[2017 年 10 月 エジプト 撮影＝田中樹]
- 裏表紙 出作り小屋にて
[2017 年 10 月 ラオス 撮影＝田中樹]

「フィールドで出会う風と人と土」の第四巻をお届けします。

第一巻（2017年3月）、第二巻（2018年2月）、第三巻（2018年3月）とつないできました。第四巻を企画する際に、情性やマンネリという言葉が浮かびましたが、それは杞憂でした。今回も、さまざまな専門分野をもち国内外のあちこちに出かけて、そこに暮らす人びととの関わりを大切にしている研究者（執筆者）らの温かいまなざしに満ちた記事が集まりました。

「風と人と土」とは、「環境」のことです。「環境」という言葉には、様々な定義や意味があります。私たちは、この言葉をしばしば「風土」に置き換えます。「風土」とは、長い年月にわたり織なされてきた人々の暮らしとそれを取り巻く自然や森羅万象との関わりやその現われです。そして、この二文字の間には「人」が隠れていることに気が付きます。それが「風と人と土」なのです。また、「フィールド」は、私たちにとって、学びの場と機会に満ちています。訪ねる土地は学校そのものです。そこに住まうお爺さんもお婆さんもおじさんもおばさんも、そして子どもたちも私たちの先生です。これらの記事は、さまざまな土地で出会った人びとと交流する中で形づくられました。

人びとは誰もが研究者であり、誰もが表現者です。その当たり前のことが、いま忘れ去られようとしています。分業や専門化が進み、自意識の肥大した研究者らや専門家らが難解な用語や言い回しの鎧をまとうなか、人びとの心はそのことから静かに離れつつあります。

私たちは、もう一度、人びとの暮らしや心象の風景と出会い、素朴な言葉で語りあうことを意識したいと思います。

その想いをこのエッセイに込めました。

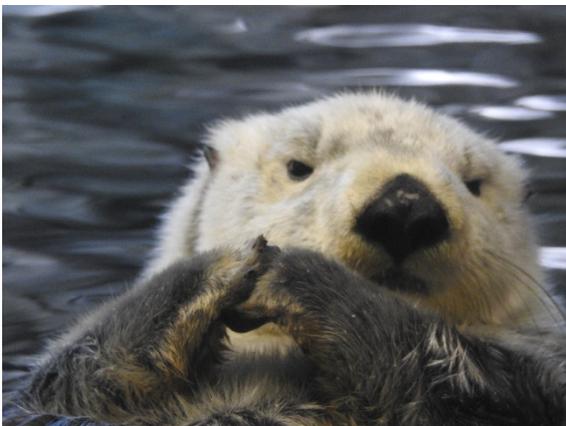
田中樹、宮寄英寿、石本雄大

目次

- 012 ラッコに魅せられた人たち 關野伸之
- 021 唐桑の漁村にて 飯塚明子
- 024 火事場からみえてきたこと - モノに耳を澄ます - 真貝理香
- 032 植巡り(しょくめぐり) 村山修二郎
- 038 自然農と鍛冶屋 渡邊芳倫
- 042 ケアとホスピタリティの男子会 大谷通高
- 049 貧困地区で暮らす女の子の気持ちとお母さんの気持ち～ベトナム・フエ市の水上生活者から学んだこと～ 高木佳子
- 055 思いやりのあるお節介ーベトナムのメンタリティーー 岡本侑樹
- 059 市場は生き物ーコルカタの神保町ー 寺田匡宏
- 064 出会って3回目で結婚した夫婦 砂野唯
- 069 おいしい羊の買い方ーモンゴル国・ウランバートルー 庄子元、関根良平
- 074 モンゴル国ー人口318万人のFacebook大国 風戸真理
- 084 オアシスからの便りーサウジアラビア、ワーディ・ファーティマ 石山俊
- 092 I am comingの裏切り 大門碧
- 098 赤ちゃん連れに優しい都市カンパラ 大平和希子
- 103 歯茎でウシが草を食むーケニア西部ビクトリア湖岸のルオの村でー 山根裕子
- 106 男しかいない街“不夜城”でフィールドワーク 藤本麻里子
- 111 アフリカの果物のお話～マラウイ編～ 福田聖子
- 116 赤土の森で出会った孤高の巨木たち 中尾淳
- 121 ヤロさんとギレさんの仕立店と常連客マルティン 遠藤聡子

ラッコに魅せられた人たち

カンカンとホタテを腹でたたく動物といえば、あの大きな黒い鼻にくりくりとした目をしたラッコを容易に連想することができるだろう(写真①)。



写真①須磨海浜水族園の明日花

北海道や伊勢志摩のお土産売り場に行けば、ラッコのキーホルダーも売られている。30年以上連載を続けている人気漫画『ぼのぼの』の主人公もラッコだ。しかし、ラッコという動物のイメージが世間の共通認識になったのはそんなに古い話ではない。1970年代までラッコは忘れられた動物であったのである。ラッコを鳥羽水族館に導入した当時の企画室長だった中村元氏は著書『ラッコの道標』のなかで「私がラッコに会ったのは、いやラ

ッコという動物の存在を知ったのさえも、鳥羽水族館で働きはじめてからのことだった。それまでの記憶の中にはテレビでも本でも思い浮かべることができない」と述べているように、ラッコという動物は日本人の記憶から完全に抜け落ちた動物であった。

今、この一度は忘れられた動物が少しずつ北海道の海に戻りつつある。まれに記録がある程度であった霧多布岬では、2010年以降頻繁に目撃されるようになり、今年5月にはラッコの赤ちゃんが誕生した。私が観察を続けている根室市昆布盛でも最大5頭が確認され、着実にラッコは勢力を増しつつある。一日に10kgもの海産物を食するラッコ。それは、漁業者との新たなる対立の火種となるのか、あるいは人間と野生動物の共生のシンボルとなりうるのか。

メディアとラッコブーム

ラッコと人とのかかわりは古く、数千年前から毛皮や食料として北米先住民によって、小規模なラッコ漁が営まれていた。この状況が大きく変わったのが17世紀から始まったラッコを主対象とした毛皮貿易である。ラッコの毛皮は他の哺乳類に比べ厚く、また水はけをよくするために常に毛づくろいをする習性があることから脱毛が少ないという利点があった。くわえて、中国でラッコの

毛皮が流行したこともあり、柔らかい金 (soft gold) として、市場価値は10倍近くまで高騰した。ロンドン市場ではラッコの毛皮取引が活況を呈し、最盛期には1万頭近いラッコの毛皮が売買された。日本でもラッコの毛皮は流行し、物理学者であり随筆家・俳人でもある寺田寅彦は随筆『銀座アルプス』のなかで「黒光りのする店先の上がり框がまちに腰を掛けた五十歳の父は、獵虎(らっこ)の毛皮の襟えりのついたマントを着ていたようである」と述べ、島崎藤村の小説『家』や『夜明け前』の中でも当時流行した獵虎帽という描写が見られる。また、宮城県の塩釜では防寒具として珍重され、ラッコ漁が盛んであり、1909年にはラッコ船「海盛丸」がアラスカで違法なラッコ漁を行い、拿捕され強制送還される事件も起こっている。

絶滅の危機に瀕したラッコを保護するため、1911年には膾炙獣(おっとせい)保護条約が締結されたが、その頃には、世界で1000~2000頭が生息するにすぎなかったという。明治時代には富の象徴でもあったラッコは徐々に忘れ去られ、わずかに北方の人びとの間にラッコのマントや帽子が記憶として残されるに過ぎなかった。

この状況が大きく変化するのが、80年代である。この時代、メディアによる一大動物ブームが巻き起こり、次々と動物を主人公にした映画、テレビ番組や漫画作品などがつくられていく。ムツゴロウこと畑正憲が動物を紹介する『ムツゴロウとゆ

かいな仲間たち』が80年に放送開始。83年には南極観測隊の犬たちを描いた『南極物語』が邦画の興行成績を塗り替える空前の大ヒットとなり、世界の動物をクイズ形式で紹介するテレビ番組『わくわく動物ランド』がはじまった。それまで『野生の王国』など動物を紹介する番組はあったがドキュメンタリー要素が強く、子どもたちも楽しめる動物バラエティ番組の登場に子どもたちの目はくぎ付けになった。

こうした動物ブームのなかで、82年に伊豆半島の三津シーパラダイスで、ラッコが日本で初めて飼育展示され注目を集めた。さらには84年に三重県の鳥羽水族館で国内初となるラッコの赤ちゃん「チャチャ」が誕生し、ラッコ旋風が巻き起こることになる。ラッコの赤ちゃんの様子は『わくわく動物ランド』で度々放送され、ラッコの人気は全国的なものへと拡大した。当時、小学生だった私も子ども会の遠足で行った鳥羽水族館のラッコのことはよく覚えている。というよりも、ラッコのことしか覚えていないのだ。鳥羽水族館は世界で初めてスナメリの繁殖に成功し、ジュゴンなどの魅力的な大型海洋ほ乳類にも恵まれていたのだが、入場券もポスターもシンボルマークであるラッコが採用され、鳥羽=ラッコというイメージしかなかった。前述の『ラッコの道標』には、ラッコ列車にラッコバスツアーが企画され、ラッコのエサを体験学習してもらおうとラッコ定食にラッコ

ランチが考案されたと書かれている。スタッフは夜なべしてラッコの着ぐるみをつくり、ラッコの電話台、ごみ箱やポストまであったというから、まさにラッコ一色である。来館者数は急激に伸び、年間 200 万人近くが訪れる施設となった。NHK みんなのうたでは水森亜土の歌う「いたずラッコ」が流れ、ラッコは客を呼べるツールとなった。この鳥羽水族館の成功を皮切りに全国の水族館でラッコが導入され、最盛期の 1994 年には全国で 122 頭のラッコが飼育されることとなった。

なぜラッコは魅力的なのか

ラッコブームの仕掛け人が動物番組と水族館であったことに異論はないだろう。しかし、なぜラッコはこれほど日本人の心をつかんだのだろうか。

ビデオリサーチが 2015 年に東京近郊に住む 622 人の 3-12 歳の男女を対象として行った好きな動物調査では、ラッコはライオンを抜いて 13 位。ニューヨークに本拠を置く Purch が運営する Live Science が発表した「世界で最もかわいい動物ベスト 500」においてラッコは第一位を獲得するなど、ラッコの人気は世界的なものである。たとえば、アメリカ・カリフォルニア州モンレーの沿岸地域はラッコツーリズムの地として知られ、その経済的利益は年間 150 万～820 万ドル、143～750 人の雇用を生み出すと見積もられている。水族館

の立ち入り禁止施設を見学できるラッコ保護ツアーを開催しているモンレーベイ水族館の売店では、ラッコに関するものが全売上の 20% を占めるという。

一般的に動物の人気ランキングではペットや動物園で身近にみられるものが上位を占め、ジャイアントパンダやコアラのように正面から見ると目がくりくりとした狸顔のものが多い傾向がある。ラッコと似た環境に住み、やはりメディアに取り上げられ人気を博した動物にゴマフアザラシがいる。漫画『少年アシベ』で主人公が飼うことになったゴマフアザラシの赤ちゃんゴマちゃんの愛くるしい姿は人気を呼び、2002 年に多摩川に現れ新語・流行語大賞の年間大賞にも選出されたタマちゃんフィーバーの下地を築いた。

しかし、アザラシをはじめとする他の海洋哺乳類とラッコを比べるとラッコの人気は圧倒的である。ラッコの愛くるしい顔、貝をお腹で割る行動、手をつないで眠る姿などがラッコの魅力としてよく挙げられるが、ラッコと直接接する飼育員の見方は異なる。ラッコの飼育を担当してきた須磨海浜水族園の村本ももよ氏によれば、魚類を担当する飼育員が魚をひとまとまりの種として見る傾向がある一方、ラッコを担当する飼育員は種としての特性も十分踏まえたその上で、個体毎の特性も把握しておくが必要になってくるという。野生ではどうなのか、それに比べて飼育下ではどう

か、この個体についてはどうか、ということを考えながら見ているので、個体への注目が魚類に比べると比重が大きくなる。ラッコは個体差が激しく、行動も異なる。ラッコといえばだれもが想像する、お腹に石をのせ貝殻を割る行動も共通したものではない。須磨海浜水族園には水族園生まれの明日花と新潟市水族館からきた飼育下繁殖個体のラッキーがいるが、いずれも貝殻を割るのに石を使わず、水槽のガラスに貝殻をぶつけて割っていたという。ラッコの魅力の一つである手をつないで寝る行動も野生では私は見たことがない。また、村本氏は飼育員としての観点からラッコの魅力を次のように語っている。

ラッコは他の海棲哺乳類に比べると、まだ海に適応しきれていないようにも思えます。潜る時はどこかぎこちない。毛づくろいをしないと死んでしまう。餌を食べないと死んでしまうのに、好き嫌が多い。ほんとに変な生きものなんです。

漫画『ぼのぼの』でも主人公のラッコはどんくさいところを他の動物たちにいじられる。それぞれの個性が強く、きわめて人間臭い動物。それゆえ、多くの人に愛されるのかもしれない。

クーちゃんというスーパースター

水族館ではすべての個体に名前がつけられ、親近感を持たせる工夫がされているが、野生個体にも人は思いをはせる。それが2009年2月に釧路市の釧路川に出現したクーちゃんである。

北海道東部ではラッコの観察されていたものの、幣舞橋（ぬさまいばし）という釧路を象徴する橋のもとに、あまり人をおそれないラッコが現れたことで釧路の人びとは歓喜した。クーちゃんを追っかけて釧路川に落ちる人が現れるなど、街はクーちゃんフィーバーに包まれた。クーちゃん出現場所に近い商業施設M00では月間売り上げが前年比1000万円増、市内のビデオ制作会社が作成したDVDは1か月で600枚売れた。クーちゃんのお父さんを自認する元歯科医でアマチュア写真家の林田定昭氏は当時をこう振り返る（写真②）。



写真②幣舞橋と林田氏

クーちゃんはスーパースターでした。クーちゃんと呼ぶと本当に近づいてくるんですよ。水族館

でアクリル越しにしか見られないかわいい動物が手が届く距離にいるんですから。おそらく世界で一番注目を浴びたラッコではないでしょうか。この小さな都市に全国のテレビ局がかけつけたんですよ。

普段は寝て食べてばかり。姿をくらすこともよくありましたが、「ここいちばん」という時には必ず現れて、期待を裏切りませんでした。釧路市から特別住民票が交付され釧路市民になった記念式典でも式がはじまってから15分ほどは姿を現しませんでした。野生動物だから仕方がないとみんな思っていたのですが、市長のスピーチがはじまったらひょっこり出てきたんですよ。「住民票を受け取りにクーちゃん came だよ」って大歓声でした。

林田氏の自宅は釧路川を望む高台にあり、散歩がてらにクーちゃんを見るうちに、ひとかたならぬ親愛を感じるようになっていく。クーちゃんは数日で消えると思われていたが、3か月近く滞在し続けた。毎日クーちゃんの様子を見ずにはいられなくなり、クーちゃんが釧路を離れた後も納沙布岬や尾岱沼まで追っかける日々が続くことになる。歯科医であった林田氏は、各地で撮影した膨大な写真の中からクーちゃんの口腔内に悪性黒色腫（メラノーマ）を発見し、それがクーちゃんの個体識別の決め手となった。しかし、林田氏は「クーちゃんは自分のことをわかっていましたから」

見誤ることはなかったと話す。

納沙布岬に現れた個体はクーちゃんなのかという疑問はありました。しかし、大勢のカメラマンが訪れたなかで、白い衣装に身を包んだ私だけが彼に近づくことができました。野生の個体がほとんど触れる距離まで逃げなかったんですよ。

翌2010年、釧路郵便局が発行したクーちゃん記念切手（林田氏撮影）が爆発的な売り上げを記録するなど、釧路市民はクーちゃんの再訪を期待したが、その姿を現すことはなかった。

ラッコに魅せられた男

クーちゃんが釧路から姿を消した後、2009年12月頃から、納沙布岬でまとまった数のラッコが姿を見せるようになった。岬には写真愛好家が集まり、「経済効果は推し量れない」と根室市観光協会は大歓迎であったが、予期せぬ問題が起こった。ウニ漁がはじまった2010年3月、食い荒らされたウニの殻がまとまって見つかったのである。歯舞漁協が専門家に殻の分析を依頼したところ、歯の痕跡や割れ方からラッコによる食害とわかった。この年、最大でも頭のラッコが確認され、ウニの食害は約18トン、被害総額は約3000万円と見積もられた。しかし、ラッコは過去の過剰な狩猟の

歴史をもつ経緯から臘虎臘獸獵獲取締法（らっこおっとせいりょうかくとりしまりほう）によって捕獲が制限され、環境省が発行するレッドデータブックにおいても絶滅寸前とされる絶滅危惧ⅠA類に指定されている保護動物である。漁協は道や地元選出の国会議員に陳情を行い、根室市は被害防止対策協議会を立ち上げたが、有効な打開策は見つからなかった。幸いにも、この被害発表以後、納沙布岬のラッコは1頭に減り、ときおり2頭が確認される程度で定着することはなかった。現在はときおり観察される程度である。

逆に目撃例が増えてきたのが、納沙布岬から90km離れた浜中町の湯沸岬である。浜中町で海鳥の保護活動を続けるNPO法人エトピリカ基金の片岡義廣理事長がはじめて、湯沸岬でラッコを確認したのは移住した1985年10月のことであった。浜中町でのラッコの記録は最も古いものが1973年であるが、数年に一度見られる程度のきわめて珍しい動物であった。クーちゃんフィーバーに沸いた2010年に3週間近く滞在した例があるものの、定着することはなかった。状況が大きく変化したのは2014年の夏である。アゼチの岬に1頭が約4か月、同時期に別の個体が1か月半滞在した。その後、断続的ではあるもののラッコたちは定着し、2016年秋からは3頭となった。

片岡氏はもともとラッコ観察を主として行ってきたわけではない。北海道で出会った海鳥エトピ

リカに惹かれ、浜中町に移り住んだ。エトピリカの観察と保護活動を行うために宿を開業し、以来、30年以上ほぼ毎日浜中町での海鳥観察記録を取り続けている。最初はそれほど興味を惹かれたわけではなく、珍しい動物が見られたとフィールドノートの片隅に記録していたにすぎなかった。片岡氏の個人的な活動が任意団体となり、さらにはNPO法人化し活動範囲が広がる中でエトピリカ以外の海鳥や海獣も調査対象となっていった。そこでも、海獣は主としてアザラシであった。しかし、2014年からラッコがほぼ定着するようになった頃から、ラッコは調査対象となっていく（写真③）。



写真③湯沸岬で観察する片岡氏

片岡氏は「アザラシが海上に頭を出すだけに対し、ラッコは動きが多く、見ていて飽きない」という。最初はオスなのかメスなのかもわからなかった。観察を続けていくなかで、少しずつ個体ごとの差がわかるようになった。繁殖期は毎日続けてきたエトピリカの観察に、一年中行うラッコの観察が追加された。ラッコの観察ポイントは主に二つ。ラッコがよく浮かんでいる小島を見渡せるアゼチの岬と、20m 近い崖のある湯沸岬だ。湯沸岬は上から見下ろせるためにペニスや乳首、顔の観察がしやすいが、崖の上での観察は危険が伴う。崖のすぐ下にいることもあるため、特に雪が積もっている冬場は足を踏み外せば海に落下してしまう。それでも、片岡氏は毎日、きついなぁと苦笑いしながら現場に向かう。

首にかみついてじゃれあっている2頭のうちの1頭にペニスを見つけたこと、海鳥を食べるわけでもなくただ捕まえて殺して遊んでしまったこと、片岡氏がラッコについて語る時、それはラッコの行動に関しての発見や驚きが多い。多くの人たちがラッコのかわいさの虜になる一方、片岡氏はその行動の魅力を語る。それは片岡氏が長年追いつけているエトピリカがもつ魅力、美しさとは異なるものだ。愛嬌があり、かわいらしい行動をするのに、ときに残虐性を見せる。それは、ある意味、人間らしい動物だ。

そんなラッコが浜中町で100年以上ぶりに繁殖するかもしれない。2016年から3頭のラッコが定着し、オスとメスがいることが判明してから、片岡氏の夢がひとつ増えた。

そして、今年5月、片岡氏から「ついにラッコに」というタイトルの興奮気味のメールが届いた。

先ほど黒岩近くにいる親子を発見しました。

はるか遠くの豆粒でしたが夢の叶った瞬間でした。

このメールから3日後、片岡氏は子どもを抱く母親を船上から確認。以後、順調に子育ては進んでいる（写真④）。



写真④ラッコの赤ちゃん

無事、子どもが育ったら、次の目標は地元の人たちにラッコに対する理解を深めてもらうことだ。

幸いにして、浜中町に定着しているラッコたちは漁場と重ならない場所を餌場に行っているため、現在までのところ、漁業者からは被害報告はない。しかし、数が増えれば納沙布岬のような軋轢が生まれる可能性は十分にある。ラッコをただの害獣にしないために片岡氏の活動はまだ続く。

ラッコとの共存に向けて

北海道東部のラッコはこれまで個体数が多くなかったこともあり、継続的な調査を続けている研究者はいなかった。生息数調査も2017年8月に一度行われたにすぎない。基礎的データの蓄積がないために、まずは個体数の把握からはじめなければならない。しかし、この地域のラッコは繁殖が確認されているユルリ、モユルリ島と定着地を往復しているらしく、同じ数が確認されていても、個体は入れ替わっている可能性がある。このため、個体識別が重要となるが、これが極めて困難な作業となる。クーちゃんのように距離が近く撮影がしやすい環境である場合は別として、野生個体は一般的に警戒心が強く、かなり距離がある。個体識別のひとつの手法として鼻の傷の違いが挙げられるが、距離が遠くでは観察・撮影できない。そこで、片岡氏が注目したのはラッコが使う石の存在だった。ラッコは脇にポケットをもち、そこにお気に入りの石や貝を入れておく習性がある。同

じ石を使っているのであれば、距離が遠くても判別できるのではないかと石の撮影をはじめた。しかし、光の加減や石の向きで、その識別もまた困難であった。

そこで、私は今、根室市昆布盛漁港でラッコの石の観察・撮影を行っている。ここでは最大5頭のラッコが定着し、横からではあるが、浜中町に比べると距離も比較的近い。とりわけ、漁港のテトラポットをねぐらにしている個体は数メートルの距離まで接近するため、顔の撮影も容易であった。鼻の傷の数と位置から、テトラポットをねぐらにしている個体は少なくとも2頭いることが判明した(写真⑤、⑥)。はじまったばかりの調査で、石の判別までには至っていないが、あわせてラッコの食物の記録を取ることで漁業被害が生じた際にひとつの客観的な資料になるものと考えている。

研究者のポストは年々減り、常勤雇用どころか非常勤ですら厳しい状況が続いている。成果重視の今の風潮では個体数も少なく調査の難しいラッコのような動物は論文につながりにくく、敬遠されがちだ。しかし、地域の人間が望むものは限られた世界の人しか読まない論文ではなく、現実の交渉の場で使える科学の裏付けのある基礎的データではなかるうか。それがなければ、利害の異なる関係者は交渉の場につくことすらできない。

片岡氏は言う。

私たちは所詮、アマチュアですから。研究者が
こういった問題や保護活動に取り組んでくれたら、
私たちは応援団でいいんですよ。

ラッコを通して、研究者はどうあるべきなのか
を問いかけているように思えるのだ。

關野伸之（せきののぶゆき）



写真©2018年6月に撮影した個体



写真©2018年7月に撮影した個体

唐桑の漁村にて

高校を卒業してから欧米に留学し、ベトナム、スリランカ等の海外被災地で国際協力の仕事に従事してきた。海外の被災地でのフィールド調査は、外部から来た研究者、もしくは復興支援を行う支援者の立場なので、紛争や津波、洪水の壮絶な被災体験を聞きながらも、無意識ではあっても常に（外国人であるという）部外者の視点でいたのかもしれない。異なる文化背景を持つ外国人の研究者が的外れな質問をしても大目に見てくれたり、気を利かせた通訳の人がうまく調整してくれたりするだろうという甘えがどこかにあったのかもしれない。

そのような私が1年前から日本の大学で働き始め、初めて日本の被災地で調査を行った。東日本大震災の被災地である気仙沼の唐桑半島の漁村を訪れたのは、震災後6年を経ている。宮城県内だが仙台からバスを乗り継いで4、5時間もかかる漁村で、聞き取り調査の約束時間に遅れないように前日から村に入った。そして前もって村を歩いて雰囲気をつかみビジターセンターに行き情報を収集した。唐桑は宮城県北東の気仙沼市の東方に位置し、リアス式海岸の地形を持つ。漁業の町として栄えたが、漁業の衰退に伴い津波前から過疎化がすすんでいた。唐桑半島の漁業は、半島の東側

の外海と半島の西側と大島に挟まれた内湾とでは方法が大きく異なる。外洋は地理的に外に出やすく遠洋や沿岸漁業によるマグロ漁、カツオ漁、ワカメの養殖が盛んである。内湾は入り江が多く波が比較的穏やかで、プランクトンが豊富なため、定置網による沿岸漁業や牡蠣等の養殖が盛んである。このように外洋と内湾とでは環境が大きく異なり、それぞれの地域的特性を活かした漁業がおこなわれている。

津波はこれまで幾度となく唐桑半島沿岸部の村を襲った。明治29年、唐桑町の神の倉（かんのくら）の集落に30メートル程の津波が来て田畑が被災した。その経験から集落の住民が土を盛って作った堤防の残りが今も残っていた。



写真① 津波で打ち上げられた 100 数十トンの津波石

2011年の東日本大震災では、唐桑半島の沿岸部は津波で壊滅的な被害を受け100人余が亡くなった。神の倉には、2011年に沖合50メートルから流されて打ち上げられた百数十トンの「津波石」があり、津波の威力の大きさを物語っている（写真①）。

さらに半島の最南端まで歩くと、御崎（おさき）神社がある（写真②）。気仙沼港から漁に出る船は全て沖合いから御崎神社に一礼して、大漁と航海の安全を祈り出発する。年に一度の御崎神社の夏季例祭では、御崎神社の神輿が港から船に乗り沖へ出て神酒と塩をあげて大漁を祈る（写真③）。唐桑半島の沿岸部は複雑に入り込んだリアス式の海岸地形のもとに、地域ごとに多様な暮らし、文化や伝統が根付いている。



写真②唐桑半島の岬にある御崎神社

津波前から伝わる集落ごとの郷土芸能は、地域

の文化や産業、生活の中で生まれ伝承されてきた。その郷土芸能の関係者から聞き取り調査やアンケートの調査を行い、災害復興と郷土芸能の相関性について調べるのが調査の目的である。



写真③夏季例祭に御崎神社から港へ運ばれる神輿

日本でのフィールド調査は初めてだったので、前日から緊張して眠れず、調査当日の朝も食欲がなかった。災害後6年を経て今さら何を聞きにきたのかと思われたり、津波で被災した方を傷つけたり、怒られたらどうしようと思ひ、正直とても不安だった。当日は唐桑半島の5つの郷土芸能の関係者から、郷土芸能の由来、保存会の運営活動やメンバー、震災前後の変化等について1日話をうかがった。唐桑の鮫立（しびたち）という集落で数百年の歴史がある大漁唄込（だいらょううたいこみ）という郷土芸能は、当時和船が帰港する際に櫓を漕ぐ拍子に合わせて唄われ、入港の前か

ら唄い始め、留守家族にいち早く水揚げ支度を促す伝達手段の役割を果たしていたと言われている。現在は遠洋漁船が動力船となり權を漕ぐ機会が減り、実際に船の上で大漁唄込が唄われることはなくなってきた。集落によって歌詞や曲調も少しずつ変化してきたが、鮪立の唄込は唐桑の大漁唄込の原点として櫓權の拍子に合わせた、ゆったりとした昔からの曲調を守り継いできた。大漁唄込の郷土芸能は宮城県から岩手県の沿岸集落まで広がっているが、漁業の衰退や少子高齢化がすすんだ集落で、現在も活動している保存会は多くない。

唐桑半島の南端に位置する崎浜（さきはま）という集落にも 300 年以上前から伝わる大漁唄込がある。「海を愛し、海に感謝し、海に捧げる讃歌であり、豊穡の海から港入りする漁師の凱旋歌」と言われている。崎浜大漁唄込保存会のメンバーは、遠洋漁業を引退した漁師や沿岸漁業に従事したりしている 60 代から 80 代の漁師である。聞き取り調査は私の不安を一掃し、終始とてもなごやかにすすんだ。私の緊張を察したのか、女性の研究者の訪問は珍しいのか、「大学の若い女性の先生はいつでも大歓迎」と冗談を言いながら、郷土芸能や震災の話だけでなく、保存会に関わることになったきっかけや、幼少期に家で父親が大漁唄込を唄っていた話、長期間漁に出ていて久々に集落に戻ってきた時の家族の話、漁師の飲み会である直会

（なおらい）の話など、初めて訪問した私に冗談を交えながらいろいろな話をしてくださった。その中でも、「郷土芸能である大漁唄込は、長い歴史を振り返ると、集落では多くの災害や、不漁、遭難などの苦難を経験するなどいろいろとつらいことがあったけど、先祖代々 300 年間唄い続けてきた唄は、そのたびに唄い手を励まし喜びを与えてくれるもの」とおっしゃったことが深く心に響いた。郷土芸能と災害復興の相関性に焦点を当てて、仮説を立証しようと調査をしている私はとても視野が狭くちっぽけに思えた。日本での初めての調査は、調査結果として文章や数字には出てこない多くの貴重なことを学び終わった。

飯塚明子（いづかあきこ）

火事場からみえてきたこと －モノに耳を澄ます－

日本に住んでいると、一生に一度は災害に遭うなどと言われている。昨年秋、和歌山県の母の生家が近隣からの延焼で全焼した。自然災害ではないが、いわゆる「もらい火」である。当時、81歳の母の妹が一人暮らしであったが、幸いに無事であった。

私は、総合地球環境学研究所の外来研究員をしており「災害にレジリエントな（回復力のある）地域とは？」などと、大真面目に議論していたこともある。しかしながら、実際に叔母の体験に関わってみると、知らないことだらけ。さながら火事場のフィールドワークであった。

すべて燃え、それから

さて、話はここからである。叔母は子どもがおらず、高齢で「要支援」の介護サポートを受けている身で、一人ではとても対応ができない。とりあえず朝、一報を聞いて、まず私が京都から消火後の火事場にかげつけた。6軒が燃え、まだくすぶっている中、消防と警察が現場検証中であった。築90年の懐かしの母の実家は、黒焦げの柱を残してあとはすべて燃えたあとだった。何が驚いたという、その見事な燃え尽きっぷりである。古い

木造家屋といえども2階建、冷蔵庫も各種家電もテレビも家具もピアノもあった家が、跡形もない。あまりにびっくりすると、人は妙なことを考えるらしい。私がその場で思ったのは、「あれ？ 冷蔵庫とかテレビって、『燃えるゴミ』なんだっけ？」ということである。



写真①火災の跡

叔母は、近所の方の計らいで、近隣の高齢者介護施設に緊急避難的に身を寄せていた。場所を教えてもらってそこに行くと、ちょうど消防署員さんが状況の聞きとりをしていた。叔母も無事だし、しっかり答えていたので、ホッとした。

消防署員さんは、帰りがけに、「り災証明書を発行するので、り災申請書を出してほしい」と、ペラりと1枚の紙をくれた。しかし、そもそも火事に遭うことなど初めての経験で、叔母も（そして

私も)何をすべきなのかわかっていない。り災申請書は、焼失家屋の詳細や家財をリストアップするもので、叔母から話を聞きながら書き始めたものの、叔母は何を失ったかを思い出すたびに、悲しくなり始める。とりあえず書けるところまで書いて、翌日続きを書くことにする。

そして、一番の懸案事項は住居のことであった。叔母はこのあと、いったいどこに住むことになるのだろうか？ ありがたいことに、ひとまずこの介護施設と同じ経営系列の、別施設にしばらく居させてもらえることになった。しかし、そこは本来「要介護」認定されている人の施設である。叔母は「要支援2」のカテゴリーのため、あくまでご厚意による仮住まいで、長くは住めないという。

ああ、長い1日だった。とりあえずその日は、私は焼けた家から車で30分ほどの、三重県の自分の実家に帰宅して、親戚のあちこちに電話報告。なにせ洋服一式、歯ブラシから靴から何もかもが見事に灰になったのである。下着や洗面道具など、すべてが必要だ。その日の夜は、一昨年前に亡くなった私の母の服類がまだ処分していなかったので、叔母に似合いそうなのをみつろって、翌日持っていくことにした。

火事のがれきの撤去は自腹？

翌日。叔母は介護サポートを受けていたことで、

担当のケアマネージャー（ケアマネ）さんと市の職員さんが訪問してくださり、公営の老人介護施設への入居希望など、丁寧な聞き取りをしてくれた。ケアマネさんは「要介護への介護認定の見直し申請をしてみますか？」という。施設により、要介護の認定がないと入れない施設とか、要支援でも入れる施設等々、いろいろなタイプがあることを初めて知った。なるほど、介護認定レベルがあがれば、入居可能な施設は増える。叔母本人の意向も確認してほしいことにする。

そして「あのう、ところで、市は『がれき』の撤去などは、いつ行ってくださるのでしょうか？」と私が聞くと、「がれきは、ご自身で業者さんに電話をして、撤去してもらうことになります」と言われる。「へ？ウチは火元じゃないんですけど？」
「ええ。以前、広域で火事があった際は、市が撤去に加わったこともあるのですが」と、申し訳なさそうに言う。ああ、火事は自然災害でもないし仕方ないのか。「でも、がれき撤去の業者さんは、いったいどうやって探すんです？」と聞くと、ケアマネさんもさすがにわからない。

実に当たり前のことだが、同じ市役所の中でも、介護の担当さんと、災害関連の窓口は違う。災害関連の窓口に問い合わせ、地域の業者の組合の電話番号をようやく教えてもらった。組合加盟の業者から、探してほしいという（どの業者が安いのか、複数の業者に、相見積もりをとってもらおう。やれやれ）。ただ、がれきを「クリーンセンター」

に持ち込んだときの持ち込み手数料のみ、申請書類を出すと免除されるという。「その書類はどこへ行けばもらえるんです？ 市役所ですか？ 消防署ですか？」「市役所の××の窓口です」。

| | |
|------|---|
| り災日時 | 平成29年10月26日 04時46分頃 |
| り災場所 | 青森県青森市青森区4丁目 |
| り災原因 | 同上 |
| り災原因 | 火災 |
| り災物件 | <input checked="" type="checkbox"/> 建物 <input checked="" type="checkbox"/> 家財物 <input type="checkbox"/> 床 <input type="checkbox"/> 壁 <input type="checkbox"/> 瓦 <input type="checkbox"/> 給・排水 <input type="checkbox"/> 航空機 <input type="checkbox"/> その他() |
| り災内容 | 木造一階建 間壁でトタン張り瓦葺。延べ面積約 236 ㎡のうち 236 ㎡及び同建物に収容の家具等を焼失。 |

新調書類第7号の3

上記のとおり火災によってり災したことを証明する。

なお、この証明は火災の原因、過失の有無とその程度を明らかにするものではない。

平成29年10月27日

青森市消防署長 〆

図①り災証明書

水害や地震、火事など、災害にあった時に、何から手をつけたらいいのか、わかったものではない。災害別に「手続きすべきことや、担当窓口の連絡先リスト」があればいいのに。

そしてとにかく、り災申請書を書いて、タクシ

ーを走らせて消防署に持参した。証明書は、少し待てばその場で出してくれるという。もっと時間がかかると思っていたのでホッとする。今回は、警察の検証も終わっていたので、消防署ですぐに証明書がでたが、これが水害などだと、市役所が管轄になるので、市の職員が被害状況の確認をせねばならず、証明が出るまでに日数がかかったりするようだ。

「叔母さん、火災保険って入っていた？」と聞くと、「某社の火災共済に入っていた」という。契約書類は焼けてしまって手元にはないが、とにかく電話をしたら、翌日、担当者が私と一緒に現地を確認してくれることになった。

その日は雨が降っていた。雨に濡れた火事場というのは、なおさら焼け跡が黒々と光って痛々しい。火災共済の担当者に加えて、第三者である損害保険鑑定人という人が現場に立ち会って、焼失場所の検証や、部屋の間取りの聞き取りとなった。私が「がれき撤去って、どのくらいかかるものなんですか」と聞くと、「業者さんの言い値になりますねえ。まあ、相場はだいたい、1平米1万円ですね」と言われる。「へ？ ということは？」おもわず、り災証明書を取り出す。「焼失面積236平米、っていうことは200万円越え？」「200万はかかるでしょうねえ」「えええ！？ 火元じゃないのに、撤去費用だけで200万？ これ、火災保険に入っていなかったら大変なことに」「そうなんですよ。火災保険は大事なんです」と、担当者は胸

をはる。

それはそうだろう。それにしても、だ。叔母の場合は高齢で独り身なので、新たな家は再建せず、高齢者向け施設を探す。しかし、火災保険や共済にはいっていないければ、家屋も家財も泣き寝入り。保険に入っていたとしても、家を建て直すのか、賃貸を探すにも、生活再建は大変なことだ。ここで、もちろん改めて考えるのは、様々な自然災害に遭った方のことである。自然災害は地域の広い範囲が被害となるし、個人宅の火災とは被害規模は比べるべくもないのだが……。

自然災害と人災と

実はこの叔母の家は、2011年夏に紀伊半島を襲った台風による記録的水害時には、床上浸水となったことがあり、その時も私は手伝いにきていた。水を掻き出したり濡れた家財や畳、布団を捨てたり、あの時は真夏で、あっという間に濡れた畳にはカビが生えた。水をたっぷり吸った畳というのが、とても重くて一人ではとても持ち上げられないというのを知ったのはこの時である。災害直後というのは、とにかく人手が要るのだ。

水害時は、モノを捨てたり片付けるのがとても大変だった上に、叔母は濡れて痛んだ家・床のリフォームもせざるを得なかった。しかし、近所の家々から運び出され累々とあちこちに積み上げられた濡れた家財の撤去には市が動いたし、叔母の

場合、家は残っていた。一方、全焼の火事というのは、拍子抜けするくらい、個人のレベルで片付けるものは何もない。が、家自体もなく、がれき撤去費用も個人持ち。火事は自然災害ではないが、個人の被害というレベルでは、甚大だ。

さらに週末は、京都から私の夫も手伝いにやってきた。叔母は火事の直後、最終的な燃え跡を見ないままになっていた。がれきと化した家跡を見たらショックを受けるのでは？と、私も、見せに連れていくのを躊躇していたのだが、しきりに、「〇〇は残っているの？××はどうなった？」と聞くので、実際に自分の目で見ないと納得しないだろうと、結局、夫の車で連れていくことにした。

現場を見て叔母は「ああ、こんなにみんな焼けちゃって」と言って、手を合わせた。そうだ。仏壇も先祖代々の位牌も写真も、皆、焼けたのだ。

そこから先は細々した手続きが続く。焼けた携帯電話の保証申請のため携帯ショップへ、がれき撤去の依頼、見積もり、水道・電気・ガス、新聞、あちこちに電話で事情を説明……。

仮ながら衣食住が確保されたので、私はいったん京都に戻り、数日後。ケアマネさんから「叔母さんは、ちゃんと歩けていますし、元気に食事も自分でできます。介護レベルの見直し申請をしても、『要介護』は、まず無理でしょう。むしろ要支援1にレベルが下がってしまうかもしれません」という連絡がはいる。元気なのは喜ばしいことだ

が、申請が無理ならば仕方ない、「要支援」のまま入居できる施設を探すことにする。

そして車で1時間ほどのところに、広域の自治体が管轄する新しい養護老人ホームがあるという。広くてきれいだ。ここなら大丈夫と、申請することにする。申請書に加えて、医師の健康診断書、身元引受人としての誓約書や、親戚の名前や年齢の書類などなど、あれやこれやの手続きをする。叔母には甥が4人いるが姪は私ひとり。実家も近いし、私が身元引受人になるのは、当然の流れであった。

養護老人ホームに入居するも

そして火事から1ヶ月強、叔母はその施設に正式入居となった。やれやれ良かった。新しい施設はきれいで海も見える。

がれき撤去の見積もりも届く。焼失した家の隣が建設業者さんで、叔母の顔見知りということもあり、見積もりを頼んでいたのだ。保険業者の話より安めの100万円代半ばの見積もりが来たので、他社の相見積もりはせずに、この方に依頼することにする。

一方、火災共済は、申請書書いて審査を受けねばならないらしく、叔母と面談をしたいという。待ち合わせの時間に行くと、火災共済の人に加えて、同系列の銀行の人まで同席している。「??」と思っていると、「保険金がおりました場合は、こちら

の銀行の口座に入れさせていただいてよろしいでしょうか」、とのこと。なるほど、そういうことか。そして審査はあるが、全焼は明らかなので、満額が支払われることになるだろうという。

がれき撤去にかかる費用は、火災保険で最終的には相殺されることがわかった。しかし、撤去業者には先に料金を支払わねばならない。叔母から通帳と印鑑を預かって、銀行へ。事情を説明すると、案の定「怪訝な顔」をされる。高齢者詐欺の多いご時世だから、これは仕方なく、叔母が火事に遭いまして……と、言っても、不審がられるのは、もうあちこちの事務手続きで、さんざんわかっている。そのたびに水戸黄門の印籠よろしく「り災証明」を見せて、納得してもらっていた。今回も、り災証明を見せ、銀行から叔母に電話確認してもらい、ようやくお金をおろすことができた。

そして手持ちの銀行の通帳や貴重品について、叔母は手元に置いておくのが不安だからと、施設の事務所の金庫に預かってもらうことにした。ああ、これで住むところも決まったし本当に一段落である。今後は、テレビや小箆笥を買って部屋に入れましょう、と購入手続きをして、私は京都に戻った。

しかし次の日、私の携帯電話に市の職員から、予想外の電話がかかって来た。

「施設の人から聞きましたが、叔母様が預けた銀行の通帳によると、預貯金がおありのようで…。

あそこは、公営の施設でして、ある一定以上の預金のある方は、ダメなんです。家が焼けてお困りだと聞いて入居を許可したのですが、すみませんが、どこか個人・私経営の有料施設に移ってください」という。「へ？ そうなんですか。審査で通って大丈夫かと。すぐに他を見つけるのはそれはちょっと」「もちろん、すぐにでなくても結構ですが……」

あまりに予想外の電話で、話を聞いた直後は、「せっかく落ち着いたと思ったのに、また、振り出しに戻ってしまった」とへなへなと力が抜けていくような気分であった。火事直後から私は何回「へ？」と驚いたことか。でも仕方がない、探すしかないのである。

叔母の元担当であったケアマネさんは、本当に良い方で、あちこちの施設を調べてくださった。そして私もインターネットで、施設を探して資料請求もした。が、結論から言うと、その地域には「無い」のであった。良いと思うところはどこも満室で、入居待ち。そもそも田舎なので、施設の数自体も多くはない。どうしようかと思っていたところ、神奈川に住む甥（私の従兄）から電話がかかってきた。自宅から徒歩圏内の高齢者ケア付きマンションが、入居者を募集しているという。こっちに呼び寄せてもいいよという。私の父も高齢なのだから、そのうち2人の高齢者を抱えることになるし、大変でしょう、と。そうなのだ。実際その通り。私が叔母のケアを放棄するようで、

若干の胸の痛みはあるが、従兄の家から近ければ、頻繁に見に行ってもらえるし、万が一の時も安心だ。あとは叔母本人の意向次第。

火事場のフィールドワークを終えて

そこからのこの従兄の行動は、実際にはやかかった。内覧会で良い部屋を押さえ、パンフレットを叔母と私に送り、叔母を説得。またイチから書類を書き、無事に審査が通り、叔母は住み慣れた和歌山を離れ、神奈川に行くことになった。従兄とその息子が車で迎えに来て、事前に連絡しておいた銀行等々、2日かかりで諸般の移転手続きをした。

すっかり更地となった自宅跡に立ち寄り、叔母は「あら本当に何も無いのねえ」と言ったが、今度は手を合わせて拝むことはなかった。近所の人に菓子折を持って転居の挨拶をしている叔母の顔は意外に晴れやかで、「甥が迎えに来てくれましてねえ」と繰り返していた。

更地になると、そこはただの「地面」にしか見えず、90年間そこに「家」があり、母や叔母たち6人の娘たちが、戦前戦後を通して生活していたことなど、地面はまったく何の記憶に留めていないようであった。

モノが語る記憶

水害・火災と御難が続いたが、かつてこの家は、

南海大震災時（1946年）も、戦時中の空襲で市街が焼けた時も被害はなく、当時、焼け出された何人かの人を居候させていた時期もあったらしい。家には高校の歴史地理の教師をして、郷土史家でもあった祖父の膨大な本があり、私は「孫の中で一番おじいちゃんの血をひいている」と言われ、祖父の蔵書の一番の理解者ではないかと自負していた。火事直後に「祖父の本の一部を、もらっておけばよかったなあ」と思いながら、焼け跡を見ていると、本棚のあったあたりに本の紙の燃え残りがあった。雨に濡れたページの、ところどころに赤鉛筆で線がひかれてあった。「ふうん、おじいちゃんは、本に赤鉛筆で線をひきながら読む習慣があったのか」と、初めて知った。

そういえば、7年前の水害の時も、濡れた物品を処分していたら、祖父が戦前戦後に丸善に本を注文購入していた領収書が、紙の「こより」で丁寧に綴じられて何束も出てきた。祖父の本棚には、田舎の本屋では売っていないはずの専門書がたくさん並んでいて、どこで買ったのかと前から不思議だったのだが、その理由が、その時ようやくわかった。大戦前後の大変な時期に、よくもまあ本ばかり注文していたものだ。娘がゾロゾロ6人もいて、祖母は日々のご飯の支度や子育てだけでも大変だったはずなのに。しかし、災害があったことで、ひょっこり出てきた「モノ」から、祖父の新たな一面を知り、家族の記憶を聞くのは悪い気はしなかった。

祖父は私が小学校2年生の時に亡くなったので、学問的な話をしたことは一度もない。ただDNAが何かを記憶していたらしく、私はインターネットで本をしょっちゅう注文しては夫に呆れられ、歴史の一環である考古学を学んでいる。考古学は、土中から発掘された遺物（モノ）から、歴史を復元する学問だ。焼けた本のページの祖父の赤鉛筆のあと、また水害時は、川の水に濡れた本の領収書の束から発せられる声に、確かに私は耳を澄ませ、新たな家族の記憶を作り上げていた。



写真②家族写真（（祖父母と6人姉妹のうち4人。まだ母と叔母は生まれていない）

火災から半年弱、神奈川の生活に慣れた叔母からは、写真が焼けてしまったので、両親（私の祖父母）の写真が欲しいという連絡がきた。記憶をつなぐ一番のモノは、やはり写真だったのか。私は、自分の実家にあった戦前の家族写真、夏に庭で夕涼みをする祖父、家の玄関前に立つ亡き私の母と祖母の写真を送った。

真貝理香（しんかいりか）

植巡り（しょくめぐり）

自然からはなれることで

365日、土の上を歩いていないことに気づかされた瞬間があった。一步家を出て、舗装されたアスファルトの上を靴で歩き、家に帰る間に土面を一切踏んでいない。ぞくぞくと怖さを覚えた。こんなにも自然と離れ、自然を意識していなかった自身に。幼い頃、土を踏みしめたあの感触、葉の上を歩いた音、そして湿気をおびた土の香り。懐かしくも切ない思い。



写真①「本所」東京都墨田区、2009年8月

この気付きの瞬間をきっかけに、意図して周りを見渡してみると、植物がない、緑、自然色がな。人工的な色彩と、コンクリートに囲まれた世界に生きているという現実。このことは、今から

20年位前に感じたこと。1999年から数年間、東京23区にある墨田区に住んだことで、強く意識下されたのだ。住まいは墨田区本所の隅田川に近くで、戦災や震災で焼け野原になったエリア、台東区雷門までも歩いて10分位の町工場がある下町だ。自転車で東京駅周辺の千代田区や中央区にもすぐ行ける都市部でもある。そして、墨田区は、樹木地や屋上緑地などの面積が少なく、緑被率は東京23区でワースト2位が常連である。

自身の幼少期からこれまでは、東京都でもまだ自然が多く残る郊外、秋川（現在のあきる野市）や福生などの多摩地域に長く生活していた。人が自然に触れられる距離感で生きてきた経験が、墨田区の都心で一度自然と分断されたことにより、自然との記憶が蘇ってきたのだ。そして、この小さな驚きから、地球を俯瞰して見た時、決して見過ごしてはいけないという使命感をも得たのだ。



写真②「多摩川」東京都福生市、2008年8月

「植巡り」とは

「植巡り(しょくめぐり)」は、植物巡りの略で、美術家である私が考えた造語である。特出すべき植生スポットをリサーチし、地域にある植生そのものを読み解き、アートに見立て選定する。そして、この特別な場所としての植物に出会うべく巡り歩く。身近な植物を介して、元来地域にある文化や風土、景観などの地域資源の価値と気づきを誘発させる。これらは、地球環境の様々な諸問題も、身近な自然への理解と気づきから、どのように自然と関係して地域、地球上で生きて行くことが可能なのかを検証と実践を行うものである。



写真③「植巡り札」2007年

このような植物を巡る企画から、一つのきっかけを頼りに街を改めて歩くことは、旅行や冒険に行くような感覚にもなり、日常を見直し人の初歩的な感性や学びを受け取ることが出来るため、近年街歩き需要は増えている。例えば「寺巡り」

や「湯巡り」など、情緒ある日本的なものや場所を巡ることは、ものや場だけでなくその境界の環境も重視され、老若男女と海外の方にも現代では人気がある。また、植物ともつながる食べ物の「食巡り」と言うものもある。こちらは日本全国各地で、特質的な飲食店などを大々的に雑誌やテレビなどで紹介する形式で、近年「食巡り」はよく認知されている。企業と雑誌などがタイアップしたり、行政が委託して観光に食を合わせる傾向がある。



写真④「リサーチ・土面のない風景」東京都墨田区本所、2008年5月

人にとって食べることの感心は、生きることに直接的に興味をいづくツールであると言える。また、食から育みを得る「食育」は、2005年に食育基本法として成立してから、教育機関でも、日本や世界と各地域の食文化含めた学びを深め養う試みが行われている。この「食育」は、明治の医師・薬剤師の石塚左玄(1851年-1909年)が、栄

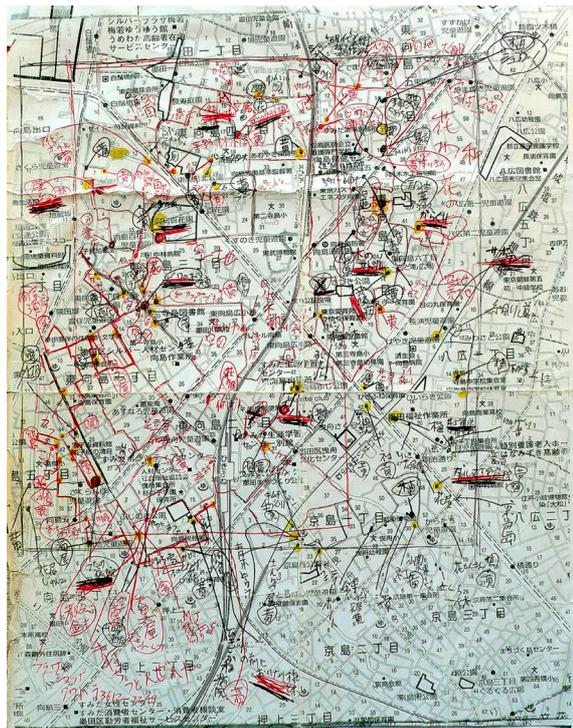
養学がまだ学問として確立していない時代に「体育智育才育は即ち食育なり」とした食育の祖と言われている。その他、「保育」はもちろんであるが「木育」、「植育」、「共育」、など独自の学びのあり方を提唱して、より多くの人と共有する地域活動や、教育の現場などでも広がりを見せている。

さて、「食育」、「保育」等にも深く関係し、現代社会の自然環境の危機からの植物の理解と学びの提唱も含めた「植巡り」は、環境学、芸術学、地域学を合わせたサステイナブルな生き方を創造し、推進する役割を担う一つとして必然と現代に生まれた。

「植巡り」の手法

ある一定のエリア（町、区画＝歩きや自転車で行ける範囲）を決めて、フィールドワークしながらその中の植物をすべてリサーチ、確認する。自然に自生している草花と、人が育てている路地の園芸や街路樹なども含めた中から、他にはない魅力、これは凄いという価値ある所をアートに見立て、人と共有したい場所を探す。リサーチ時には、植物を育てている方などに取材をして、植物にまつわる話を記録し、聞いた話しや調べた植物に関する資料などを元に文章化する。そして、選んだポイントをマップに落とし込み、「植巡り」チラシ兼マップシートを作成する。各ポイントには、植物の植を取って「植」の字が書かれた「植巡り」

木札が掲げてあり、取材した植物に関わる言葉や種の説明を文章で読めるようにしている。「植巡り」期間は、マップシート片手に、時に解きやスタンプラリー形式で、だれもが自由に街の中に潜む特質する植物を、散策しながら巡ることが出来る仕組みである。その他、地元小学校などで植物とアートを介したワークショップを行い、作品を街中で展示したり、「植巡り」ポイントの方や地域の植物園の園長さん、地元の協力者や行政の方などを招いて座談会なども行っている。



写真⑤「フィールドワークした道」東京都墨田区向島・京島界限、2008年6月

「植巡り」の実施は、2007年の夏に富山県氷見市ではじめたのをきっかけに、東京（墨田区で6回、杉並区1回）、秋田（2回）、福島（2回）などの各地で形式を進化、変容しつつ行ってきた。近年は、自然環境の荒廃による都市化が進む中、エコツーリズムやハイキングなど自然に触れられるイベントも多くなり、また日本でも富士山、白神山地の自然世界遺産が増えて来ていることで、特質的自然の感心が高まって来ている。このような、近年のエコや環境に関するものとひと味違う視点を持ち企画したのが、「植巡り」であり、身近で限られた植生の中にも、植物の根源的な価値と芸術とも言える魅力、そして各地域性と現代の時代性をリアルに映し出す「植巡り」は、様々な可能性を有している。



写真⑥「植物のフィールドワーク」富山県氷見市、2007年6月

植物を介した人とのつながり

「植巡り」は地域の街中の植物を介して行うプロジェクトなので、多くの人の協力や理解がないと成立しない。フィールドワークからリサーチを丁寧に行い、交渉を重ねて協力を得て行く。植物を探索する毎日の中、山の自然の深部以外は、植物は人と何らかの関わりを持って生きていることが理解出来る。植物を育てている人は誰か、何故ここに自生しているのかをリサーチして行くと、市内地の植物は良い意味でも悪い意味でもほとんど人が介在してしまっているのである。



写真⑦「街中で協力者と」東京都墨田区向島、2010年10月

街中では、時に町会長さんや商店街会長さんにご挨拶に行くことはもちろん、場所によっては市などの行政に働きかけて場所の占用許可を取ることもある。子どもが自然に触れる機会をつくるた

め、小学校や児童館と連携した企画も行い、地元
に特化したプロジェクトであることを様々な年
代にも意識を促し、地域参加型で進めて行く。そ
して、地元のプロジェクトとして地域の方に愛さ
れ、最終的に自主的に運営して行くことを理想と
して展開している。



写真⑧「街中で植物リサーチ」東京都墨田区向島、
2010年10月

植物をメインとしたプロジェクトであるが、人と
関わるが多いため、より人と自然との関係を
深く捉え、学ぶことが出来るのも、この「植巡り」

プロジェクトの意義あるところだ。



写真⑨「植巡りポイント」福島県いわき市、2014
年3月

今回は、「植巡り」の唯一無二の概要や仕組みに
ついて述べてきたが、次編は「植巡りの実践」と
して、約10年前の氷見市からはじまり様々なエ
リアで実際に「植巡り」を行って来た軌跡をたど
り紹介する。地域によりその植生の変容は、如実
に現れるため、丁寧に読み解いていくと、植物か
らその地域のあり方や、環境的な問題も見えてく
る。新たな植物と芸術と地域を通じたプロジェク
トを提案しつつ、「植巡り」はさらに続いていく。

村山修二郎（むらやましゅうじろう）

引用・参考文献

「緑被率」

緑被率、23区との比較：

http://www.city.sumida.lg.jp/kurashi/kankyo_u_hozen/midori/seibutu_midori_zittai/yousu/hikaku.html 2018年6月28日アクセス

「食育」

食育推進マニュアル：

企画・編集/株式会社ヘルスケア総合政策研究所
発行所/株式会社日本医療企画 発行年/2006年2月20日

自然農と鍛冶屋

私は農学部出身である。せっかく農学に進んだのだから実際に農業をやってみたい。できれば環境に興味があるので、環境保全型の農業をやってみたい。でも、環境保全型農業ってなんだ？と思いながら、今までいろいろな農業の実施やお手伝いをし、自分でも田畑で農作業をしてきた。

この過程で、慣行農業（肥料や農薬などを使う一般によく行われている農業）、有機農業、自然農（その意味や内容は後で触れます）、それに水耕栽培も経験できたことは幸運だったし、現場の方々から多くの事を学ぶことができた。

ここでは、これら経験した農業の中でも大変興味深かった自然農の特徴と、自然農を実施して私が感じた鍛冶屋の必要性について書きたいと思う。

はじめに、自然農の特徴について説明し、私が感じた自然農の活用について示そう。

自然農は、全国にいろいろなやり方があるのだけれど、私が経験したのは、農薬や化学肥料を使わず（無農薬・無化学肥料）、田や畑の土を耕さず（不耕起）、雑草を基本的に引き抜かず芝のように刈り込むようなやり方であった（写真①）。

自然農の農地管理方法は面白く、初めて見る現象と多くの謎があり、これが今日の私の研究テーマの一つになっている。この自然農の特徴の一つ

として、必要とする農機具や資材の少なさがあげられる。



写真①自然農の畑

通常、専業ではなくて兼業やもっと小規模な家庭菜園のような程度でも作物や野菜を育てようと思うと、農具としては土を耕すクワ、除草用のカマ、定植用のスコップはもちろん、小型の耕うん機、草刈り機、薬剤散布機は欲しいところである。

農業資材にしても、肥料（化学肥料や有機質肥料）や病虫害防除のための農薬、土壌を覆うマルチや小型のビニルハウスなどそれなりに資材を準備しないと慣行農業をすることは難しい。

しかし、私が経験した自然農で使われる農具は「カマ」と「クワ」と「シャベル」のたった3点である。この農法は無農薬・無化学肥料・不耕起を基本とし、なるべく有機質資材も入れない方針なので、上記の3つの農具と植え付ける「種や苗」

くらいあれば、収穫まで実施可能という訳である。

さらに、自然農は、慣行農業で一般的に用いられる単一の農作物を作付けするのではなく、小規模で多品目の農作物が常に採取できるような作付けしている場合が多く、一般家庭の消費によく合った形である。

よって、ちょっと畑でもはじめてみたいけれど、いろいろ準備するのも大変そうだなと迷っている方や家庭菜園程度を想定している方にはとてもオススメの農法だと私は思っている。

実際、私がお世話になった自然農をしている組織では、近郊の都市や遠方の都市から多くの市民の方々がこの自然農を学び、実践するために通っていた（写真②）。



写真②自然農を行う市民

この組織では彼らの自然農を「農的暮らし」と呼んでいた。この「農的暮らし」は、営利を目的と

した仕事としての農業ではなく、農作物の栽培を生活に組み入れることを志向する考え方であると私は感じた。

この考えは、いままで農学があまり注目してこなかった家庭菜園や市民農園のための農法であり、都市住民が増えている昨今では農作物生産にとって重要な方法であると思い、私は大変興味を持っている。

つぎに、私が自然農を実施して感じた、鍛冶屋の必要性について書きたいと思う。

前述で説明したとおり、自然農で使う道具は、「カマ」と「クワ」と「シャベル」の3点であるので、使用頻度がどれも高く、長く使っていると道具が劣化したり、壊れたりする。

こうなった場合に、例えばクワの刃先に鋼を打ってくれたり、カマを磨いてくれたり、金属部分が折れたら溶接して直してくれる鍛冶屋がほしいと私は感じた。

調べると、日本には遠方で良ければ壊れた農機具を直して送り返してくれる鍛冶屋も存在するので、通信でやり取りすれば修理は可能である。しかし、私はできれば直接持って行って修理を依頼したいのだ。

鍛冶屋に直接行って、そこの大将と相談しているうちに、深く掘るのでシャベルの先をもっと重くした方がいいとか、重粘土の畑だからクワの刃先をもっと伸ばそうとか、農地環境に合わせてカ

スタマイズしてもらうこともできるかもしれない。

田舎の人に聞くと、昔は各地域に鍛冶屋があり、農具の修理を行っていたし、そのカスタマイズもしてもらえたらいい。

日本の鍛冶屋については専門に調べられている研究者がおられると思うので、専門外の私がしゃべるのもどうかと思うが、昔は馬の蹄鉄や刃物の修理等、いろいろ仕事があり、村や町には鍛冶屋がいたのだろう。

しかし、大量消費の現在、鍛冶屋の復活を願ってもどこにでもあるくらいの頻度で存在させることは難しいと思う。

せめて、ホームセンターなどで簡単な溶接による修理や、刃物とぎくらいやってくれれば、私としては大変助かるが、なかなか難しいのだろう。

仕方がないので、今、大学で鍛冶屋のような作業小屋を作ろうと考えている。大学圃場で用いる農機具の修理や、フィールドの実験や調査で使うちょっとした特注の道具の制作をこの大学の鍛冶屋でできないだろうか。

それは、鉄の加工はもちろん、農業機械のちょっとした改造もできるような小屋の形態がいい。木工ができていいかもしれない。

このような考えに至ったのは、私が滞在したナミビアの大学にあった、ワークショップ（日本語で訳すと作業場）という部署の存在である（写真③）。



写真③ナミビアの大学にあったワークショップ（作業所）（撮影：廣岡義博博士）

ここでは、用務員的な職員が数名いて機械の修理や溶接、木工もやっていた。圃場に使う耕うん機の改造や特注の器具の依頼など、我々研究者の無理難題に概ね答えてくれる、すばらしい働きぶりです。私は大変たすかった。

ワークショップでなくても、外国で活躍するフィールドワーカーであれば、現場の鍛冶屋に調査機材の修理や改造を依頼した経験もあるのではないかと思います。

さて、あったらいいなと思っているだけで前に進まないのが私の悪い癖なので、自分を奮い立たせるために、最近、金属の溶接と切断の資格を取得した。また、大学へ鍛冶もできる作業小屋の設立を打診し、仲間で具体的な内容を模索中である。

さてさて、うまくいくのだろうか？小屋だけ立

てて、そのうち使わなくなって、草に覆われるかもしれない。

あまりに鉄の修理や加工が面白くて、日が一
日小屋にこもり、さっぱり研究や勉強をしないダ
メ研究者の住家になるかもしれない。

しかし、うまくいき、何人かのフィールドワー
カーでこの小屋を使用できたら、素敵な場所にな
ると思う。鉄の農機具を前に、皮手袋を付けなが
ら何人かの研究者と議論をしている、そのような
小屋になったらいいなと想像しながら、この話を
終わりたい。

渡邊芳倫（わたなべよしのり）

ケアとホスピタリティの男子会

アラフォー男子会

孤独を生きるアラフォー男子の集まる会がある。

それは月に1度ほど、大学院時代の研究仲間の男たち 2~3 人を私の借家に呼んで開催される。とくに目的は定めずに、夕方6時ごろから、長いときは朝までと、集まったみんなで酒と食事を嗜みながら、映画やドラマやアニメを鑑賞したり、テレビゲームを供したりと、普段みんなが独りで堪能している遊びを、みんなでワイワイと共有する。

ここでは2018年2月某日に開催されたこの奇妙な男子会を回想する。

メンバーはみな独身で、互いの面識は4~8年と長い。しかしながら、普段から頻繁に会うこともなく、こうした機会でなければ互いに連絡を取り合うこともない。この会を開いている私自身も、積極的に彼らと連絡を取り合うことはない。

では、なぜそんな会を開いているか。

私はみんなで一所に集まって遊ぶのが好きなのである。そして、そこには私の密やかな修練と企みもある。それは、人を招き歓待するケア

的な所作とホスピタリティを修練すること。私はある時から、人へのケア心とホスピタリティを圧倒的に欠いていることに気づき、そんな徳の低い自分に幻滅した。これを修練し、ともすれば孤独にのまれがちな男子に隙あらば教示し、みんなで優しく労わりあえる楽しき有徳な生き方を果たすこと、その遠大な計画が私にはあった。この活動を始めてかれこれ3年ほどになるが、そんな企みがあることは彼らは露ほども知らない(と思う)。

この会は、大抵私の呼びかけではじまり、私の家で、私が食事と飲み物を用意し(まれに仲間が料理をすることもある)、家に来る側は、お酒やつまみを手土産としてもってくるのが通例となっている。私がホストのような位置にあるが、参加や準備にかかる表立った取り決めはない。

しかし、私には、日々ケアとホスピタリティの修練を積む者としての、かくも厳しい教条があり、これによる検閲の眼差しが会のそこかしこに潜んでいる。この回想はその私の眼差しを凝らして書かれている。ケア心とホスピタリティの薄い者は、心して読んでほしい。徳の高い人は、生あたたかい目で読んでほしい。

今回の会は、男性 A (大学院時代の仲間、年齢は私と同年) の佇まいが、私のケア心とホスピタリティの戸を叩いたことが発端としてある。

A を会に誘ったとき、A は体調が慢性的に悪く、何を食べても飲んでも身体に負荷のかかる状態で、A と久しぶりに会ったときに、一人寂しそうに佇んでいるのが印象的であった。A を家に呼んでみんなで一緒に楽しいことをしよう、そう奮起したことが事の始まりとしてある。

ちなみに A は今回で 2 回目の参加となる。A に加え、残り二人と私合わせての計 4 人で開催している。A 以外のメンバーは、大学院時代の後輩で大食いの B と、もうひとりと同じ大学院卒で、過去に同じ職場で働いていた同年の元同僚 C である。B は活動当初からの常連メンバーで、C は 1 年ほど前からこの会に参加してくれている。定期的集まるわりには、みなそれぞれに関係は浅く、それぞれが敬語で話し合う場面も見受けられる。

事前準備

まず、私は A の体調に配慮し、身体に負荷の少ない食べ物を用意しようと考えた。ただ私は凝った料理ができない。なので、繊細な技術を要しない(と思われる)、具材を切って入れるだけの鍋に決めた。問題は鍋の味と具材である。身体に負荷の少なそうなものを考えないといけない。

そこで思いついたのが、味付けのシンプルな

白身魚のはりはり鍋(くじら肉は入れない)だ。薄く黄色く透んだ熱々のだし汁に、白身魚と水菜をくぐらせ、醤油につけてハフッと食べるイメージは、私の胃をキッと刺激し、喉をゴクリと鳴らせしめた。寒冬で堪えた身に、あっさりした鍋の温か味が染み渡ってほぐれていく中年男子たち、良いイメージだ。一人、にんまり、これを決めた。

作るからには、適当な味付けをせずに、美味しくありたい。まずダシ昆布を 30 分ほど水に浸して取り出し、弱火で少し温め対流を起こしたあとに(沸騰させてはいけない)、少し値のはるアゴの粉末の入った出汁パックをいれ 2~3 度くぐらせて 15 分ほど持した。調味料はあえて入れず、消化器系の内臓に優しくシンプルな味付けに。

鍋に入れる具材は、肉に偏り野菜の不足しがちな中年独身男子の食生活を推察し、魚介で統一。メインに白身魚のタラを購入。しかし、これでは大食いの B を満足させるには心許ない。エビのすり身のツミレも追加購入した。また野菜も水菜だけでは栄養的にも物量もさびしいため、鍋に合う白ねぎ、白菜、シメジに加え、このほかに、豆腐、マロニーも買うことにした。

さて、用意したダシをひと煮立ちさせ、購入した具材を入れる。ただ入れるのではない。出汁が出そうなものを早くいれ、食感や野菜の風

味が残った方が良いものを後に入れていく。もちろん白米も用意して、炊き立てが食べられるように集合時間付近に炊飯器でタイマー予約。

事前準備から、私のホスピタリティとケア心が散りばめられている。自慢のいたずらを仕掛けて悦に入る少年のように、私は、わくわくと昂揚しながら、男子たちを待ち侘びた。

「お弁当、買ってきた」

すると、「ういっす」といつものようにひょこひょここと頭を下げて、Bが来場。すぐにAが仕事を終えて参加する。Aの体調が気になったが、思いのほか疲れた様子はなく、笑顔で「お世話になります」と頭を下げて家に入った。BもAも手土産のビールとお菓子を用意してくれた。

持ってきてくれたお酒を冷蔵庫に入れていると、Aが「食べ物があるか分からなかったから、弁当買ってきた」と、にこやかにスーパーで購入したと思われる一人分のお弁当を見せてくれた。するとBも示し合わせたように「おれも」と、これまたスーパーで買った一人分のサンドウィッチを見せてくれた。

それを聞いた私は余計な出費をさせたかと思い、「そうか、それは連絡すべきだったね・・・」と何の気もなく答え、鍋を用意したことを二人に伝えた。すると「じゃあ、明日食べようかな」

とおずおずとAとBは持参したお弁当／サンドウィッチを引っ込めた。

Cが、やや遅れて家に到着。そそくさと挨拶をすませて、私の左隣に座る。Cからは、家に来る前に「食べ物ある？」と連絡があり、鍋があると返事をする、「では飲み物もっていきます」、と飲み物（ジュースとお酒）を持ってきてくれた。

全員が集まったので、鍋をテーブルに置き、皆で食べ始めると、私の隣に座っていたCが「うまいね」と私の膝を手でゆすり感想を伝えてくれる。残りのメンバーも「うまい、うまい」とひたむきに食べてくれていたが、Cは「なに鍋？」と鍋の内実を聞いてくる。予期せぬ質問で私はとまどい、気恥しく口ごもりながら「薄味鍋」と答えてしまった。あんなに心を尽くした鍋にもかからず、だ・・・不覚。

「うまいじゃん、薄味鍋」。笑って、私の顔を見てCが感想を伝えてくれる。私も鍋を食べてみたところ、煮込んだ具材からでた出汁のせいか、薄味のだし汁に甘さが加わり、コクのある味わいに変わっていて、自分でも美味しくできたことに驚いた。

鍋を食べ終わると、Cが立ち上がり「洗い物するね」とさっと台所に食器を運び、つられて私も食器を運ぶ。それを見たBは立ち上がり「すみません」とCに頭を下げ、Aは座ったままで

「ありがとうございます」とCに伝えていた。私といえば、「ありがとう」とCに伝え、一人きりで洗わせるのは侘しいと思い、洗い物をするCの側に立ち、一緒に世間話をしたりしていた。

ちなみに、洗い物は誰がやるかはとくに決まっていない。たいていの料理を作る私としては、参加者の主体的な積極的配慮を虎視眈々と期待したりする。

今回はAのバイトが終わってからの開始となり、夜22時にはみなが集まり、日本のやくざもののドラマを視聴し、夜は更け、深夜1時過ぎの解散となった。

修羅

数日たったある日、AとBの「お弁当、買ってきた」の言葉が心のなかに反芻し、はっと息を呑んだ。

なぜ、一人分の弁当なのだ……！

唇がぶるぶる震え、わたしは心の中で「どういうことだ!？」と自分に激しく問い詰めた。そして、食事がなければ一緒に作ってみんなに振舞えばいいではないかっ!などと、なんとも勝手な願望が、ここぞとばかりに口をついた。

そうなのだ。このときの私には、AとBの振る舞いが、心を尽くした相手を蔑ろにするようなものに思えたのだ。この繊細な感覚は、3年

前の私なら気づかなかったことであろう。いや、存分に呆けたことだろう。体調を気遣い、量や味にも心を尽くして食事を用意している人に、自分の分だけの弁当を買ったと伝えることの何がいけないのだろうか?と。

そこに気づけたのは、日ごろの修練のたまものである。私は修練の甲斐にすっかり気を良くし、鼻を高くした。がしかし、翻ってこれが良くない。返す刀で、すぐにAとBの振る舞いが失敬なこととして鋭く意識が剥いたのだ。

そこからは、修羅である。理不尽にも心の中で彼らを責め立てた。

やれ、(別に食べたいわけでもないのに)弁当とサンドウィッチをみんなに振舞うべきだの、やれ、美味しい鍋に対するコメントが貧弱だの、洗い物を率先して洗おうとしない消極的な姿勢だの、挙句の果てには、なぜ私を持成さないのだ、などと私の心は千々に乱れた。まさに修羅である。

しかし、冷静に思い返せば、彼らはみんなで飲食するお酒とつまみを購入してくれたのだ。それに、ごく稀に(ほとんど無いが)、わたしも食事を用意していないことがあり、そのことに備えての二人の振る舞いとも考えられる。また、夜遅めの開始だったため、もしかしたら、ご飯を作っていない私に対して、ご飯を作らなくても良いとした、彼らなりの私への配慮と考

えられないこともない。

数限りない理由が浮かんで消え、そのたびに私の心は消耗し、途方にくれた。

結局、私は、すべてを弁当とサンドウィッチのせいにした。その弁当が、サンドウィッチが、あまりにも美味しそうだったのだ、と。なんでもいいから納得できる理由を調達しようと、末期的な状況に追い込まれたのだ。

「自分だけ」か「みんなのこと」か

しかし、やはり、ここで納得してはいけない。心を尽くしたことの一言を報いたい。

一方で、AとBは主食がないことに備えて自分の食べる主食だけを用意する、他方で、私はみんなと食べる主食を考え用意する。この形容しがたい奇妙な配慮とも独善的にもみえる彼ら／私の非対称な状況や振る舞いに、私は不公平を覚えたのだと、こうして私は自分の違和を突き詰めた。

後日、この不公平を、研究会の仲間である女性の研究者たちに打ち明けてみた。彼女たちはひとしきり話を聞いてくれたあと、「みんなで分け合える餃子や唐揚げを買うこともできるのに」「料理がなければ、みんなで何を食べるかを一緒に考えたり、一緒に買い物に行くこともできるのに」、と別の道を言い添えてくれた。

唐竹を割ったように、スコンと腑に落ちた。

私の不公平の在り処が、一緒に考え、一緒にする、という私を含めそこに参加するみんなへと気持ちが向いていたかどうかにあった、と気づいたのだ。それは、月1回のこの（奇妙な）会を続けていく気持ちが皆にないとか、ホストの私への配慮がない、といった不満とはちょっと違う。自身をふくめそこにいる人たちに気持ちが向いていたかどうかには、私は不公平を感じたのだ。

もちろん、あの時のAとBはみんなに気持ちが向いていなかった、なんてことはないのだ。私が独り勝手に意地悪く思い悩んだことであり、それは自らの修練の足らなさ、徳の低さの限りなのだ。

しかしながら、それでも、やるせないと思う自分がしつこくいる。そもそも、参加した3人はホストのような立ち位置にいないために、もしかしたら、AとBの振る舞いは当然で、私のように不公平を感じることは、逆に、奇妙なことなのだろうか？と、私は、どうにも問うてしまふ。

気遣いと、無遠慮のはざま

そんななか、あのときのCの振る舞いは、みんなに気持ちを向けていたように感じた。作っ

た料理の内実を聞いたうえで、美味しいと作り手に伝えてくれ、これが図らずも、私が準備に心をつくしたことを拾ってくれたように感じ、嬉しく思った。また、食器を先んじて洗うその姿勢には、その場をみんなで楽しもうと思いつく意識を垣間見たように思う。

さて、私に向き返れば、気持ちを、その場にいたみんなに向けていただけるか？

ねちねちとこんなことを書いていることから、独り善がりも甚だしい、と自分でも呆れてしまう。また、過去に自分が、人の思いを台無しにしてきた場面がたくさん思い浮かぶ。事実、男子会に限れば、Bは別のときに、みんなで遊ぶものや、視聴するものを持ってきてくれたことがある。そうしたとき私は、なんとなくそれを眺めていたし、ケチをついたりして、Bを含めそこにいるみんなに気持ちを向けていなかったことが、苦く思い出される(Bよ、ごめんよ)。やはり、人のことは言えないものだ。

こうして私のすこし高くなった鼻は、ポキンと折れた。

一緒にいる人たちに思いを向けて、一緒にいることに何かをしようとするのは、本当は、人に求めたり期待することではないだろうし、また求められたり期待されたからすることでもないだろう。しかし、人が、(独り善がりにならずに)人に思いを向けたことが気づかれなかつ

たり、すげなくされたりすることには、悲しみや怒りや不公平を感じてしまう私がいる。だから、私は、自分が無下にしてきた/していることは、許されない/あってはならないことだと思ってしまう。

そんな私が生きている世界は、それがお互いに感得され共有されれば、そのときの人たちと安心した楽しい幸せな瞬間をいっしょに過ごせたりするが、そうでなければ、ときとして非常に窮屈なものになる。

なぜなら、人の思いの束に気づけないことが、人から傷つけられたり、人を傷つけたりするのではないかと、日々おびえて生きることになるからだ。人のためになされる行為は、本来優しい思いからなされるものなのに、いつしかそれで人を評価し、貶め、攻撃し、排斥し、手段化し、そうして関係が紡がれ、現実の世界が動いていってしまう。現実がそういうものと受け入れられるには、私にはもう少しだけ、こんなねちねちを続けていかないといけないのかもしれない。どうにも弱った。

そんななか、「お弁当、持ってきた」とあっけらかんとしたAとBの振る舞いを思いなおす。それは、みんなのことを考えないし、みんなの食事を用意しない、とした態度で、人への配慮の束で編み込まれることから切り離すかと気楽さを持っているようにも感じる。それは、軽や

かに、そんな自分で、相手に良いのだと、基底的なところから他人との関係を紡ごうとする、なんとも開放的な関わり方のようにも見えるからだ。

優しく、それができるように、と、そういう心持ちが必要な気がし始めている。

A と B から学んだのである。それがこの会のもうひとつの魅力であったことを私は再認識したのだ。

私にとって、ホスピタリティとケアの修練は、かくも険しい道のりなのである。

大谷通高（おおたにみちたか）

貧困地区で暮らす女の子の気持ち とお母さんの気持ち～ベトナム・フエ 市の水上生活者から学んだこと～

ベトナム中部の世界遺産の町・フエ市との関 わりについて

はじめに、簡単に自己紹介します。私は研究者ではなく、途上国のフィールドで研究者の方々と一緒にお仕事をさせて頂く機会がある人間です。そのため、フィールドで出会う人々やその暮らしは私の研究対象ではありません。私が、開発途上国のフィールドに出たはじめての経験は、青年海外協力隊員（以下、隊員）としてベトナム中部の世界遺産の町・フエ市で活動した2007年3月からの延長期間3か月を含む2年3か月間です。その後は、国際協力分野の実務者として日本やベトナムで仕事をしています。50年以上という歴史を持つこの協力隊事業では、派遣された時期や年度、国や職種によって隊員が経験することは様々です。私は任期中に、途上国とされていた頃のベトナムの一般的な市民と同じ生活をしながら活動することができ、その町の市民感覚を体得する機会を得られたと思っています。そのため、現地で人々と関わることで感情が動く度が高く、彼らと泥臭い関係性を結ぶことが「一般的な」研究者の方々

より多いように思っています（「一般的」としましたのは、そうでない方々にも出会ってきたためです）。また、そのようである理由のもう一つの理由は、隊員としての任期が終わった後も、仕事や大学院での学習のために数度に渡って長期間滞在する機会に恵まれたためだと思います。通算するとフエ市の人びととの関わりも11年目です。長く関わってきたと言っても、そこは外国です。何年経っても、知らないことを現地の人から教えられることの連続です。人々との関わりの中には貧困層の人々との関わりがあり、特に同じ女性として少女たちやその母親たちの様子から学んだことはたくさんあります。彼女たちとの関わりは、泥臭く、時には騙され、時には怒鳴り、感情を出さなければ乗り越えられない時もありました。しかし、彼女らの「今の状況をなんとかしたい」という気持ち、「仕方ないことだ」というあきらめの気持ちに触れる時、一緒に何かを出来ないものだろうかと思わされます。ここでは、私が関わってきたフエ市内に暮らす貧困層の人たち、特にお母さんと女の子から学んだことのほんの一部を記したいと思います。

ベトナム社会を表すキーワード：縁故社会・ 学歴社会・男尊女卑

ベトナム社会全般を表すキーワードとして、縁故

社会、学歴社会、男尊女卑をあげることができます。はじめてフエ市に赴任した2007年当時、フエ市はまだ大変に保守的なところでした。女性は適齢期になれば家同士が釣り合う相手と暦や占いでいいとされる日に結納式と結婚式を挙げ、第一子として男子を産むこと、お金を稼ぐことを含む一族のために働くことが期待されていました。結婚までは清く正しくいることが社会の暗黙の了解事項。実際に、結婚前に妊娠した若い女性が自分の将来を悲観して橋から身を投げたり、農村で望まれない妊娠で生まれた子が生き埋めにされたりということが新聞に載っていたりしました。「あの家の娘は結婚前に妊娠したけど相手の家から認めてもらえないんだよ」という話で悪者なのはいつも女性側。基本的に勤勉な人が多いのですが、男性の方がコネクションを保つためや情報入手の名目で、カフェに集ってタバコやコーヒーを楽しむ時間、お仲間たちとビールを飲んでいる時間が長く、なんとも男性の方が甘やかされている印象がありました。コネクションは血縁に限らず、学歴でも左右されるため、どの大学を卒業するかも重要です。大学入試の日には、関係者以外の方が試験会場に入れないように公安（日本でいう警察）が大学の警備にあたります。先生によい成績を付けてもらうことを期待した付け届けをすることは習慣化しています。日本のように大学の新卒生が一気に企業に採用されるシステムではないので、在

学中に就職活動は行なわれません。卒業証明証を手にしてから仕事を探すことになります。2007年からの11年間の間にベトナムの経済は大きく発展したこともあり、女性の社会や一族から受けるプレッシャーは緩んで来ているとは言え、未だに暗黙の縛りとして存在しています。一族の成功者を親族が取り囲んでいるような血縁重視の縁故主義の重要性は弱まっておらず、学歴はより重要視されるようになってきました。貧困地区に暮らす人たちが「左官屋になるにも、高校を出ていないとダメだ」と言うようになりました。縁故や学歴がない場合、閉塞感を感じる社会になっているのです。

フエ市に存在した水上生活者

1枚の写真を示します。



写真①集合写真

これらの写真は2009年の冬に、水上生活者の子どもたちの生活に関する簡単なインタビュー調査をした後に撮影したもので、当時「水上生活者」と呼ばれた少女たち14名と私、私の協力者たちが写っています。少女たちの年齢は、8歳から16歳。当時のフエ市内には、ベトナム語で「Dân vịn đò」（以下、日本語発音の「ヤンヴァンドー」と表記）と呼ばれる水上生活者たちが存在していました。「ヤンヴァンドー」を日本語にすると「舟で暮らす人、水に関わる仕事をする人」という意味ですが、フエの人たちが「ヤンヴァンドー」と言う時、差別的に「学がない」、「貧しい」といった意味が込められます。

当時、彼らは確かにフエ市を流れるフォン河やその支流に停泊させた小舟で暮らしていましたが、職業は魚獲りやアサリ採取、砂利の採取や運搬などの水に関わる仕事をしている人たちは一握りで、多くはシクロと呼ばれる自転車タクシーの運転手や市場の荷役、宝くじや茹でピーナッツ売りといったインフォーマルセクターで働いていました。また、読み書きが出来ない人や小学校しか卒業していない大人も少なくはありませんでした。加えて、フエ市はベトナム国内でも台風や大雨が多い自然災害の常襲地であり、水上に浮かべた小舟で暮らす彼らの子どもの中には水害時に命を落とすものもいました。



写真②舟は住居でもあった

この写真を撮影した半年後、水上生活者の姿はフエ市内から消えました。フエ市は、安全、景観、衛生面などの理由から水上生活者を陸地に定住させる政策を実行したのです。この定住政策は、行政側も水上生活者側も長年望んでいたものであり、「これでヤンヴァンドーとは呼ばれない」という言葉を何人もの水上生活者から聞き、彼らが如何に陸にあがることを望んでいるかを知りました。定住政策には、住宅用地もしくは集合住宅の一室を貸与すること、低利の住宅建築費の貸付や一定期間の室料の免除制度も含まれていました。しかし、仕事に対する配慮はなく、仕事をしていた場所から離れることから不利益を被る人たちもいました。そのため、この定住政策実施を機会に、フエ市から離れる世帯もありました。

水上生活者の女の子の気持ち

写真の少女たちに話を戻します。経済的に困窮し、読み書きが不自由だったり、小学校しか卒業していなかったりする親であったとしても、子どもたちの教育への関心はゼロではありません。11年経った少女たちの最終学歴は、小学校中退者が3名、中学中退者が1名、中学卒業者が6名、高校卒業者が4名です。なんとか上の学校に行かせたいと願っている親は多いのです。しかし、親が文字を読めなかった場合、子どもたちに教育を受

けさせることに影響が出るのも事実です。14名の少女たちの内5組の親たちは読み書きが出来ず、そのうち3組の親たちの子どもは小学校中退です。またこの小学校中退者のうち2名は読み書きが出来ません。この5組の親たちに共通していたのが、子どもの出生届を出していなかったことでした。出生届の重要性に気づいたのは、小学校入学手続きの時。届けが出されていない場合、遡って出生の事実を証明することを求められました。証明する書類をなんとか準備した頃には小学校への入学手続きの期日は過ぎ去っていました。煩雑な手続きを読み書きのできない親がするとなると大変な労力を強いられます。日銭仕事をしているので仕事を休むわけにもいかず、時間の工面も大変なものでした。そうして、やっと入った小学校。ベトナムの小学校では落第があります。入学年が遅れて学習意欲が落ちているところに、親たちが家計を助けて欲しいと茹でピーナッツ売りを手伝わせたりしていました。家で予習や復習をする時間がないと、落第して中退に繋がってしまうのです。とても簡単に、子どもの「学校に行く」、「勉強を続ける」という選択肢は奪われるのです。では、少女たちは「読み書きが出来ない」ことをどう感じているのでしょうか。写真の調査の際に、何人かの読み書きできる少女が私の耳元で、「●●ちゃんは、字が読めないから。読んだり書いたりしなくてもいいようにしてあげて。恥ずかしくないよ

うにしてあげて」と、必死で訴えました。読み書き出来ない少女たちは、そういったことを訴え出ることはありませんでした。調査自体は、読んだり書いたりする必要は一切ないものでした。「読んだり書いたり出来ない」と思っていることを学びました。そして、読み書き出来ない少女たちは、内心ではどう感じていたのだろうか。今でも考えさせられることがあります。「読んだり書いたりして、って言われたらどうしよう」と不安だったかもしれません。フィールドでは、こういった気持ちにも配慮が必要であると学びました。

元水上生活者のお母さんの気持ち

11年の歳月の間に、写真の中の少女たちの多くも母親になりました。また生活のために一家でフエ市を離れた家もありますし、学校を出た後にベトナム南部で仕事をしているものもあります。母親になったうちの何人かは、妊娠が先でした。ある時、元水上生活者の定住区を訪ねた時、私のことを見知っているという人から声をかけられ、少女のうちの一人がもうすぐ母親になると聞かされました。これはおめでたいことだと、その少女の家を訪問した時のことです。この少女は高校を卒業して、フエ市内の仕立屋で見習いをしていました。少女は家におらず、母親が出迎えてくれました。母親としばらくぶりにあった挨拶の会話をしていると、家の奥から父親がフラフラと出てきて、私

に握手のための手を差し出しました。私は差し出された手に手を差し出すことをためらいました。彼の顔は紙のように白く、こんなにも人の顔は浮腫むものなのかというほどに腫れあがっていたからです。言葉は聞き取れないほどにか細いものでした。彼はすぐに家の奥に消えていきました。母親は、淡々と家の奥に消えていった自分の配偶者のことから話始めました。2年ほど前にサッカー賭博で負けて、仕事道具のシクロ（自転車タクシー用の自転車）を借金の形に取られ、ビールを飲む量が増えたこと。酔っばらって喧嘩をして足にケガをしてから寝ていることが多くなり、飲んでいたビールがウォッカになりしている間に体が浮腫むようになってきたので病院に連れて行ったら肝臓の重い病気で、もうそんなに長くはないと言われていること。母親が持っている市場の売り場の権利を形に高利貸しから借金をして薬代を工面してきたが、もうその売り場の権利を取り上げられそうであること。私が訪ねた少女は確かに妊娠しているが、相手の家から「ヤンヴァンドーとは結婚できない」と言われていること。母親は身を粉にして働き配偶者の尻拭いをしてきたのに、彼には死が迫ってきていました。必死の思いで高校まで卒業させた娘にも困難が訪れていました。私は、母親の肩に手をおいて、結婚を認めてもらえることと借金の返済が出来ることを祈っていると伝えるのが精一杯でした。彼女は、笑いながら「ベ

トナムの女だからね」と言いました。ベトナムの女だから苦労も背負っていくという意味なのか、ベトナムの女だから仕方ないという意味のあきらめなのか、はわかりません。しかし、母親たちは、強くたくましく一家を支えているのだと学ばされました。そして、このようなケースは、この地区ではごく一般的な現実なのです。ただ、彼女たちにもう少し違う選択肢があった場合、例えば、配偶者を選べる状況にあったなら、ちゃんとしたところでお金を借りられたなら、状況が違ってくるように感じてならないのです。

では、私たちができることはないのでしょうか。子どもたちが「文字が読めないことは恥ずかしい」と思わなくてもいいように学習できる環境を準備すること、どんなに貧しくても自分の子どもに教育を授けたいと思っている親を勇気づけながら、子どもたちがより高等教育に進めるように教科を教えることが出来るように考えます。現在、日本人研究者の先生、フエ市に暮らす志ある大学生や一般市民のパートナーたちと私が、小さな学習支援活動をフエ市の水上生活者の定住地区で実施しています。そのお話については、別の機会に紹介出来れば幸いです。

高木佳子（たかぎよしこ）

思いやりのあるお節介ーベトナムのメンタリティー

2007年1月の朝。私はいつも通り、6時過ぎにホースティ先の家の前を行き交うバイクのクラクションと近所のカフェから流れる大音量の音楽で目を覚ます。漁師町の朝は早く、網の引き揚げは朝3時ごろ、魚を網から外す作業が4時過ぎ、そして、魚が最初の仲買人の手に渡るのが5時過ぎである。6時過ぎは、ちょうど漁を終えた漁師さんが、朝ご飯と仕事終わりのコーヒーを楽しんでいる時間である。



写真①朝食のブンボーフェ

この日の朝食は、ブンボーフェ。この料理は調査地であるベトナムの古都・フエにおいて一番大衆的な朝食で、ブンと呼ばれる温かいお米の麺に、豚骨などからとったスープ、牛肉、バナナの花、香草、レタスといった野菜を加えたもの(写真①)。おいしくいただいて調査に赴く。

穏やかなラグーンに広がる漁の営み

当時、私は、養殖や刺し網漁、魚介類の生態、漁場の環境について長期のフィールド調査を始めたばかりで、片言のベトナム語をしゃべる程度のみ可通/未熟な学生だった (or 初学の若者だった)。

エビ養殖とマングローブ林の減少に興味があり、現場を見たいとの思いでここにやってきた。百聞

は一見に如かず。来てみて驚いた。私がたまたま入った場所は、もともとマングローブはあまり見られず、広大な浅瀬、水草や海藻が茂る藻場と干潟(水深1.5m程度)が広がっていた。その浅瀬では、古くからエリ網(網を張った集魚道を設置し、魚が一度入ると出られない仕掛けカゴへ誘導する漁法)など

を用いた漁労が盛んにおこなわれ、多種多様な魚介類が捕獲される豊かな汽水潟であった。

面積にして数百ヘクタールに及ぶこの浅瀬が、竹と網により整然と区画化され、それらで覆いつくされているのである（写真②）。「よくもまあ、これだけ広い水域に、竹と網を張り巡らしたものだ」と感服せずにはいられなかった。そこでは、エビやカニ、海藻（オゴノリの一種）、魚数種（アイゴやボラなど）が、乾季の間のみ区画化されたところの一部で粗放的に混合養殖されていた。



写真②浅瀬を覆う漁場の景観

熱が出た

この日の午前中も、いつもと同じように調査を開始したが、頭痛と発熱を感じて早めに切り上げ

帰宅。お腹を下す。昼食・昼寝後も体調が改善せず、横になり休んでいると、ホームスティ先の家族がそれぞれ帰宅。体温は39度にも上がり、家族が気を使って村のお医者さんと呼んでくれた。薬などを処方され服用するも、今度は嘔吐もしてしまい、皆が心配してくれる。「どこに行った？」、「何を食べた？」、「トレイは何回行った？」、「便は何色だ？状態は？」、「昨日はどうだ？」、「どこが痛い？」などなど、お医者さんと同じ質問を家

族の皆がしてくれる。いつの間にか親戚までもが集まり、類似の質問を繰り返す。当然だが、全員ベトナム語で質問を投げる。39度を超える熱で、私の頭はもうろうとしている。しかし、曖昧な回答をしようものなら、今度は心配を通り過ぎて、若干怒り気味に質問が降ってくる。回答するのに疲れたので「大丈夫だから、休ませ

て」と言おうものなら、「この様で大丈夫な訳ないだろう！」と怒られる。当然だが、私を思いやってくることなのだ。そして、ホームスティ先の娘さんまでもが、カオザウ（民間療法のマッサージで、人の首や顔にアザが残る）をやると言ってきた。私自身は、このマッサージについて、頭の

痛みを表皮の痛みに一時的に転移させるものとして考えていたので、もうろうとしながらも頑なに拒否したが、これもまた好意でやってくれていることなので、結局お願いした。そんなこんなもあり、寝付けぬまま夕食になり、家族がわざわざ私のためにお粥を作ってくれた。配膳されるのを待っていると、ホームステイ先の主人が、私のお粥に胡椒をザザッと振ってしまった。「この方が、体があったまってい」 という主人に対し、奥さんは、「駄目だ！」といったものの、鍋に入ってしまった胡椒はなすすべなく…。弱っている胃、腸、体に、刺激物は負担だとの思いもあったが、どちらでも同じことだという境地に達していた。やはりあまり食べられず、薬の効果もなく、熱も39.5度になり、街の病院に行くことを決意。その旨を家族の方に伝え、一気に話が進んだ。

病院にて

夜10時。病院に到着すると、何十人もの人が診察を待っていた。申し訳ないと思いながらも、特別扱いを受けて一気に診察室へ。熱は40度を超えていた。移動式ベッドの上で少し待った後、緊急病棟のVIP専用室へと運び込まれ入院することになった。部屋はきれいでちょっとしたホテル並だ。しばらくすると、病院の先生、十数名が部屋に入ってきて私を囲み、経緯や症状、食事に関するこ

れまでと同様の質問に加え、「昨日食べた牡蠣じゃない。ブンポーが食あたりの原因だ」などなど様々な私見をそれぞれ述べてくれる。これも、それぞれが気遣いしてくれていることの現れなのだが、当の本人にとっては、結局何が原因なのか、わからないままである。採血、点滴の準備が終わったところ、真夜中にも関わらず、現地の大学の先生などたくさんお見舞いに駆けつけてくれた。ありがたい、申し訳ない気持ちでいっぱいだったが、休みたい気持ちもある。面会の先生らが帰った後、いろいろな検査と治療が始まった。夜12時を回っていたが、30分間隔で、いろいろ点滴が変えられ、注射を打たれ、解熱剤を服用したが、熱は下がらず。少ししてようやく汗が少しだけ出るようになったが、熱で汗をかく私の姿を見て「暑いだろう」と察した一人の医師が、冷房を効かせてくれたらしい。その後また、寒気を感じ、毛布を看護師に持ってきてもらい、室温をあげてもらった。さまざまなことが起こりながらも回復に向かい、2日後に退院することとなった。結果は「腸炎」であった。

思いやりの感度

「親身になる」、「困ったときは、お互い様」のメンタリティーがあるからこそ、これまでに述べたような体験が得られる。人の繋がりもできる。笑

い話も増える。各々の思いや考えを、とても親身になって伝えてくれるおかげで、良いことも、想定外のことも当然起こる。それでも、人と人との関わりが強く、想いが見え、伝えることのできる関係性は、初めてフィールドに入った私自身にとって、とてもありがたく、地域の方々の普段の生活やお節介が学びの一部だった。あるときは、「お前、潜ってエビ捕まえたことないだろう？」と素潜り×素手でエビの獲り方を体得させられたり、「昔のこのあたりの状況について知りたいんだけど」と相談すれば、「〇〇さんなら知ってるはずだ、後ろに乗れ（バイクの）」とその人の家まで送ってくれたり。「そこまでしなくてもいいよ！」というところまで何の気なしにやってくれる。本当にありがたいことである。

今の日本は、「自主独立」、「適度な距離」や「他人に迷惑をかけない」という個人尊重が、「無関心」、「見て見ぬふり」、「引きこもり」、「孤独死」といったものに繋がりがつつあるような気がする。おそらく、ベトナムにおける他者への態度は、私たち日本人の対局に位置しているもので、今の日本に足りない部分のように感じられた。もちろん、皆が「お節介さん」になればいいというものでもない。それでも、昔の日本にもあった「温かみのあるお節介」を知らない若い世代が、日本の田舎やベトナムなどに行って触れることで、少しでも「思いやりの感度」を上げることができるだろう。こういった体験や機会を創出していくことは、これからの日本社会における人と人との関わりを改善していく過程において、大切なことのように思われた。

岡本侑樹（おかもとゆうき）



写真③魚の様子



写真④潟上の小屋での団欒

市場は生き物 ー コルカタの神保町 ー

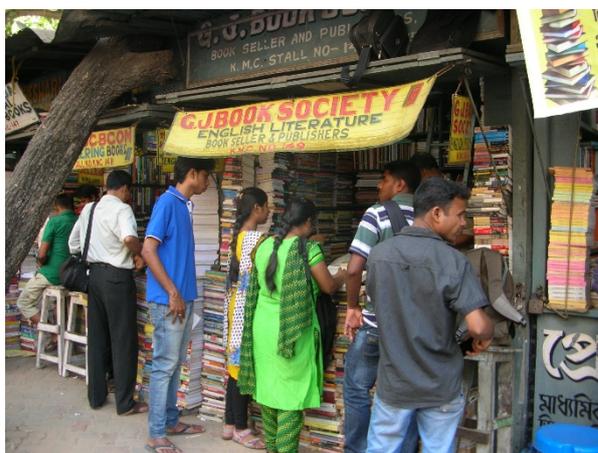
市場というものは、まるで生きていたかのように動く。市場は、売り手と買い手、仲買いと卸、輸送を担う人々など、様々なアクターが様々に絡み合い、あたかも、一つの有機体のように働く。それは、ある長い進化の過程を経て実現した生き物のようでもある。市場は生き物だから、時として、それはある固有名詞で人格があるように語られるときもある。東京にある水産品の卸売市場である「築地」はそのような代表格だ。築地の場合は、新しい市場への移転の問題によって、その複雑で精妙な市場のあり方に脚光が浴びることになったのは皮肉なことでもある。

さて「コルカタの神保町」というサブタイトルを付けたが、この言葉でピンと来た人は古本好きに違いない。神保町とは東京の千代田区にある町名だが、その中の御茶ノ水通りと交差するあたりから西に向かう靖国通りが古本屋街として有名だ。このエリアには、明治大学や日本大学などもある。約 200 軒の古本屋が店を構えるといわれ、世界最大の古本街と呼ばれることもある。

世界には、このような古本屋ストリートがいくつかあって、ロンドンのチャリング・クロス街も

そう呼ばれることもあるが、コルカタのカレッジ・ストリートに広がる風景を見たら、ここにも世界最大の古本ストリートがあったか、という思いになることだろう。

ここ、コルカタの神保町は、古本屋は南北に通るカレッジ・ストリートをメインストリートとし、そこから枝分かれしたいくつかの通りに及んでいる。ここには、大学出版会や有名な出版社や老舗の書店などある程度大きな店もあるが、多くが間口2~3メートルほどの小さな店で、それらがぎっしりと道の両側に並ぶ(写真①)。



写真①キオスクのような小さな本屋が通りにびっしりと並ぶ

大半は、歩道に設けられた簡単な小屋掛けの店であるため、奥行きはそれほどない。駅にあるキオスクのような建物を想像してもらえればそれほど

イメージは異なっていないと思う。店の数は百を超えていることは間違いないだろう。二百以上あるかもしれない。ストリートは常にごった返している(写真②)。



写真②教科書を買求める大学生の姿も多い

カレッジ・ストリートは、文字通り、大学の前のストリートである。このエリアには、1817年に開学したプレジデンシー・カレッジや、1857年開学のコルカタ大学、1824年開学のサンスクリット・カレッジなど、インドあるいは南アジアで最も長い歴史を持つ大学が存在している。教科書を買求める学生や、本を買いに来た家族づれなどで、それほど広くない通りは常ににぎわっている。

古本屋で本を買う楽しみは、一つにはぶらぶら

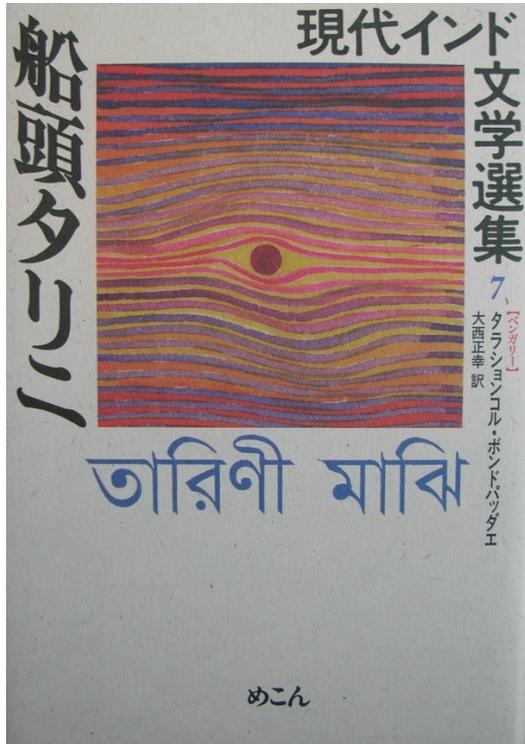
と店先を流して見て歩くことである。古本屋は新刊書店とは違って、思わぬ発見があることがあり、それが古本屋巡りの楽しみでもある。けれど、いっぽう、それは、デメリットでもあって、何か特

定の本を探したいとき、古本屋でそれをさがそうと思うと、そうたやすくもない。もちろん、今はインターネットで検索すれば、目当ての本がすぐに見つかるが、それがいないときは、一軒一軒、ストリートの本屋を訪ね歩かなくてはならない。

では、インドの人たちは、どうしているのだろうか。この広大なストリートを一軒一軒訪ね歩いているのだろうか。よく見ているとそうで

もないようである。ここには独特のシステムがあり、そのシステムに乗っかれば、探す本は比較的簡単に見つかる。

たとえば、あなたが、ベンガル語の大家のひとりであるタラションコル・ボンドパッダエ (Tarasankar Bandyopadhyay) のベンガル語の原書が何冊かほしいとしよう (ちなみにタラションコルの代表作『船頭タリニ』は大西正幸訳で、めこんという出版社から発行されている)(写真③)。



写真③ 『船頭タリニ』

あなたは、とりあえず、ストリートにある任意の一軒の本屋に入るだけでよい（このとき、コンピューター関係の本が並んでいる古本屋に入ってもいいが、文学の本を探したいときは、できるだけ、文学関係の本を扱っている古本屋に入る方が望ましいのは言うまでもない）。本屋の主人はあなたに、あなたが何を探しているのかを聞く。あなたは「タラションコル・ボンダパッタエのベンガル語の原書をさがしている」と答える。もし、その本屋に、タラションコルの本があれば、主人は、それを出

してあなたに見せてくれるだろう。では、それが、その本屋になれば、どうするのか。あなたは、この広いストリートを、どこにあるかもわからない本を探してさ迷い歩かなければならないのだろうか。

いや、そうではない。主人は、あなたに「ちょっと待て」という。そうして、傍らにいる小僧さんに何やらメモを渡し、あなたにしばらく待つように言う。小僧さんは出ていく。しばらく待つと、小僧さんは、タラションコルの本を幾冊か抱えて息せき切って帰ってくる。主人は、「これでどうだ」とあなたに見せる。あなたが、その中に買いたいものを見つけたら、主人は、それを売ってくれる。もし、その中に希望の本がなければ、主人は、また、傍らの小僧さんにメモを渡す。小僧さんが出ていく。そして、また本を幾冊か抱えて帰ってくる。

これは、どういうことかと言うと、小僧さんは、他の店に行き、その店にあるタラションコルの本を持ってきているのである。あなたが、その中に気に入った本を見つければ、あなたは、その代金をあなたが今いる店頭店の主人に払う。しかし、それは、本来は、別の店の本である。このシステムを通じて、あなたはある店の店頭に居ながらにして、この広いストリートの中から目当ての本を見つけることができるのだ。

本屋は、おたがいにそのようにして商品を融通

している。その後ろには、決裁システムがあり、Aの店で売れたBの店の商品の代金と、Bの店で売れたAの店の商品の代金が、ある時点で相殺されているのだろう。カレッジ・ストリーートの店は、どれも、キオスクのような小さな店ばかりである（写真④）。そのような店は、倉庫を持つことはできない。その代わり、おたがいがおたがいに在庫を融通し合えば、ストリート全体が巨大な本の倉庫になる。



写真④一見すると角地の店だが右と左の店は別

ぼくも、ために、そのシステムを使ってみた。

タラシオンコルと並んで、ベンガルの大作家に、モハシェッタ・デビ (Mahasweta Devi) という作家がいる。この人は女流作家だが、かなり強烈な現実への批判を込めた作品をいくつも書いている。日本語では大西正幸訳で『ジャグモーハンの死』（めこん）のほかいくつかが出版されているし、

英語には、ガヤトリ・スピヴァックがいくつかを訳している。スピヴァックはベンガル出身で、ニューヨーク・コロンビア大学で英文学を教えている学者だが、ポスト・コロニアル批評という社会批判の方法を確立したことで有名である。彼女のもつ批判精神と、モハシェッタ・デビの激辛といういい作品のテイストは実にぴったりの組み合わせだ。

そんなこともあって、モハシェッタ・デビに興味を持っていたので、ストリーートの一角の手近な本屋に入り、モハシェッタ・デビの本はないか聞いてみた。

すると・・・

「ちょっと待て」

とくだんのシステムがさっそく始動。店主は小僧さんに忙しく指示を飛ばし、小僧さんはストリーートを駆け回る。

数分後には、ぼくの前には、デヴィの本が数冊積み重ねられていた。

日本では、リアル書店が風前のともしびで、今や、本はネットで買う時代だ。けれども、ここコルカタでは、ネットよりも、リアルならではの本の探し方が息づいている。

カレッジ・ストリートはまるで一つの有機体のようなだ。そこを今日も忙しく本が行きかっている。売り手も買い手も、その生き物の一部だ。

とすれば、そこにまぎれ込んだあなたも、もうすでに、その一部になっているのかもしれない。

寺田匡宏（てらだまさひろ）

出会って3回目で結婚した夫婦

スピード結婚

恋とは突然落ちるものと言うけれど、出会って3回目で結婚するとは驚きだ。私にとって、ネパールの人びとの恋愛及び結婚事情は漫画のように非現実的だ。聞き取りの合間の空いた時間に親しくなった人びとに結婚したきっかけを聞いてみたところ、地方都市や農村では数回会っただけ、あるいは1回会っただけの相手と結婚した人が多くいる。30歳を過ぎてても独身である自分との違いにひどく驚いた。

私がネパールの人びとの結婚事情を考えるきっかけをくれた人物は、ネパール中央部のチトワン郡で2日間限定という約束でアシスタントをしてくれた男性だった(写真①)。



写真①調査地近くの川で

2013年1月に初めて私はネパールを訪れた。右も左も分からず、同じ研究室のネパール人学生に彼の知人をはじめに紹介してもらって調査を実施した。その後は、そこでの調査が終わると一緒に調査をした人から自分の研究を手伝ってくれる人を紹介してもらおうという方法で人脉を広げ、調査を進めていった。今回話題にする、出会って3回目で結婚した男性もそうして知り合ったアシスタントの一人である。彼は、その地域の有力者だった調査協力者が連れてきた、日本に留学中でお祭りを親族と共に過ごすために一時帰国していた日本語も話せる20代前半の男性だった。最初はありがたく感じたが、よくよく話を聞くと、なんと彼は数日前に結婚したばかりの新婚だった。申し訳ないとは思いつつ他に頼れる人も居なかったので、彼に助けてもらいながら聞き取り調査をしていた。空いた時間に彼と話しているうちに、自然と彼の身の上話を聞くことになった。彼は日本の私立大学に留学し、学位の取得を目指しているという。今では、学業よりもその合間に生活費を稼ぐために始めたラーメン屋のバイトに夢中で、大学を卒業したら日本でラーメン屋を経営したいと考えるようになったと将来の夢を語っていた。思わず、「勉強をしに行っていると思っている親御さんが悲しむよ。しかもネパールに帰らないのを知ったら、親御さんは寂しがらるよ。」と突っ込みを入れてしまった。しかし、彼が言うには、日本にはネパ

ール人が多く暮らしており、同じように大学に入学したものの別の仕事を見つける者も多くいるので、自分が特別ではないという。ご両親にも帰国の意思がないことを既に伝えているとのことだった。日本に住むことを彼の両親は反対しなかったが、せめてネパール人の女性と結婚してほしいと考えたようである。彼が春期休暇に入ったので、久しぶりに実家に帰ったところ、家族からお見合いをするように勧められたという。今の奥さんが2人目のお見合い相手で、3回目に会った時にプロポーズしたようだ。さらに言えば、実際に会ったのは初回のみで、残りはスカイプを利用した会話であり、プロポーズもスカイプを通して行っていたらしい。プロポーズを人生に一回の大切な行事と考える多くの日本人女性が聞いたら、怒り狂うような方法である。私がされたとしても怒り、やり直しを求めるだろう。彼の奥さんと会う機会があったので、スカイプでプロポーズをされた時にどう思ったかを尋ねたところ、ニコニコと微笑みながら、「彼はハンサムで好みのタイプだったから、嬉しかった。」と片言の英語で答えた。英語がうまく話せないから細かいことを伝えられなかったのかもしれないが、スカイプでプロポーズされたことによる不満はないようであった。何より、深く知らない相手と結婚することに対する不満や不安は全くと言って良いほど見受けられなかった。結婚するまで彼女は地方の農村にある実家で暮ら

しており、高校を卒業した後は家事手伝いをしてきたそうだ。はっきりとは言葉にしなかったが、学校に行っていたころに恋愛はしていたようであった。アシスタントの男性も、今まで何人かの女性と付き合っていたとのことだった。奥さんは20代前半で、親が結婚適齢期となった娘に見合い話を持ってきて、私のアシスタントをしてくれた今の旦那さんと結婚したとのことだった。なんと出会ってから結婚するまでの期間は1週間ほどしかなく、正にスピード結婚だったそうだ(写真②)。ちなみに、一人目のお見合い相手は、1回会った時に好みの外見ではなく、話してみても合わないと思っただけ。



写真②象の上でデート

出会って3か月で結婚したという先輩の話聞いてスピード婚だと思ったが、それよりもはるか

に短い期間で結婚を決断したわけだ。私には、物事の優先順位の第一位が恋愛で仕事よりも趣味よりも恋愛が大切、むしろ趣味や生活の最上位に恋愛があり、常に彼氏が居ないと精神が不安定な状態となり生きていけないと自称する女友達がいる。そのような彼女でさえ結婚の話になると現実的になり、一緒に暮らしたら合わないことがあるから同棲した方が良いとか、1年くらいは付き合わないとDVを隠しているかもしれないので不安だなどと話していた。日本では結婚するまでに良く相手を見定めるのが一般的だと思う。昭和までは親の一存で結婚相手が決められることもあったが、今ではよほどの良家でもない限り、自由恋愛が主流だろう。

お婆さんの恋愛観・結婚観

しかし、ネパールではお見合いで紹介された相手と数度会って、あるいは数日で結婚するのが、決して珍しくないことがわかった。話を聞いたのはほとんどが女性たちで、それは10代後半であっても50代であっても変わらない(写真③)。

孫がいる穏やかな気性のお婆さんにお爺さんとの出会いを尋ねると、やはりお見合い結婚で会ったその日に結婚が決まったと教えてくれた(写真④)。



写真③ 恋愛の話を良くした村



写真④ 恋多きおばあちゃん

私が「初恋の人が旦那様なの？」とたずねると、お婆さんは「それは豊かな人生ではないね。ちゃんと恋愛をしないと魅力的な女にならないよ。旦那が浮気をしてしまう。」と答えた。私が、「じゃあ、旦那さんの前に付き合った人がいたの？その人とは結婚しないの？」とたずねると、「村に恋人

はいたけれど、彼とは血が近いから結婚できなかった。でも恋愛は自由。内緒だよ。」と教えてくれた。どうやら、お婆さんにとって恋愛と結婚はまったく別物らしかった。

少女のカーストを超えた恋愛事情

広域調査で出会った 10 代半ばの少女の恋愛話は興味深かった。彼女は同級生と熱愛中らしく、暇があれば彼氏と LINE でメッセージを送りあっていた。また、その子の部屋に泊めてもらっていたので寝る前に良く話したのだが、彼女の話題は、大抵彼氏についてだった(写真⑤)。



写真⑤十代のネパール人

どうやら初めて出来た彼氏らしく熱をあげているようで、「彼から〇〇と言われたけど、どうした

ら良いかな？」と恋愛経験がそうあるわけではない私に年長者というだけでアドバイスを求めてくる姿は可愛らしかった。ある日、お世話になっていた家のお母さんと娘たち、近所のおばさんたちで畑のトマトを収穫していた。女性ばかりで男性の目がないので、自然と旦那の愚痴や恋愛話になった。そんな中、少女の携帯にラインメッセージが入った通知音が聞こえた。私は、「彼氏から連絡きたんじゃない？返してあげたら？」とたずねると、彼女は自分の母親の方をちらりと見て、「駄目よ。お母さんがいるもの。付き合っているってばれたら殺されるわ。」と答え、携帯をマナーモードに設定した。その時、彼女は英語で私と話していたので、母親に会話を理解される恐れはなかった。その日の夜、少女に、「お母さんには彼氏がいることを内緒にしているの？婚前に彼氏がいるのは良くないことなの？」とたずねてみた。彼女が言うには、彼氏が居るのもあまりよくないことだが、母の怒りに触れる決定的な理由は彼のカーストが自分より下であることらしかった。彼女は、「私に下位カーストの彼氏が居るなんて、お父さんとお母さんに知れたら殺されるわ。絶対に二人には言わないでね。お姉ちゃんや妹しか知らないんだから。」と頼んできた。そこで、私は、「いいよ。でも、もし結婚しようと思うんだったら、いつか言わなければならないよ。」と言ってみた。この地域の結婚する年齢は 10 代後半で彼女も大学に行く

気はないとのことだったので、あと2年ほどすれば嫁ぐことになる。彼女は、「結婚は出来ないわ。でも、結婚はまだ先だもの。それまでは彼と一緒に居たい。」と答えた。私は今だけでも彼氏と一緒に居たいと訴える彼女の健気さに感動するとともに、結婚できないと考えていることを切なく感じた。しかし、その村での調査を終えて、他の民族が暮らす村に移り、その時の話を40代の3人の子供をもつ女性にしたところ、彼女は困ったように笑いながら、「それは普通のことよ。男も女も若いうちは、親に隠れてこっそりと恋愛するのよ。でも結婚適齢期に入ったら、親が勧める人と結婚して家族になるの。あなたの友達は普通の経験をしているだけよ。」と教えてくれた。彼女も若いころは親の目を盗んで市場に野菜を売りに行く度に彼氏と会っていたらしい。

ネパールの恋愛と結婚

ネパールは多民族国家で様々な民族が暮らしている。民族によって、ヒンドゥー教を信仰する民族と仏教を信仰する民族に分かれる。双方の宗教ともにネパール独自の特性を帯びている。また、ネパールにはカーストが存在しており、現在でも異なったカーストとの結婚は困難なことが多く、民族や宗教によっては結婚できないこともある。そのため、恋愛は自由であるが、親族が勧める相

手と結婚する方針あるいは文化が出来たと思われる。もちろん純粋に恋愛結婚をした人も多く、中には3年間の恋愛関係を経て結婚した夫婦もいる。都市ではより自由恋愛で結ばれる夫婦が多く、恋愛と結婚が直結しているようであった。民族や居住地、個人によって、恋愛と結婚は別と考えるか、恋愛を結婚にいたるまでの道のりと考えるかは異なるようであった。しかし、いずれの夫婦も家族という集団を守る同志として信頼しあっているように見えた。

砂野唯（すなのゆい）

おいしい羊の買い方

ー モンゴル国・ウランバートル ー

草原の大都市・ウランバートル

みなさんはモンゴルにどのようなイメージをお持ちだろうか。多くの方は、青々とした草原で、馬に乗り、羊を育てているといった牧歌的なイメージをお持ちかと思う。こうしたイメージは必ずしも間違いではない。地方に赴けば、その道中に草原で羊と暮らす遊牧民の姿を見ることができるだろう。しかし、それは必ずしもモンゴルを代表する風景ではない。



写真① ザイサンの丘からウランバートル都心を望む

2016年のモンゴルの人口は312万人であり、そのうちの67.8%は都市住民である。とくに首都であるウランバートルに人口が集中しており、140万人以上がそこで暮らしている。従来、ウランバートルはチベット仏教の寺院を中心とする宗教都市であったが、社会主義時代に集合住宅が整備され、市場経済化が進む現在では、都心に近代的な高層ビルが林立している。高層ビルには世界的な高級ブランド店やレストラン、バーなどが入居し、クリスマスなどの時期には着飾った人々がパーティーを楽しんでいる。今なおウランバートルの建設ラッシュは続いており、雨後の筍のようにマンションや商業施設が建てられている（写真①）。

さて、そんなモンゴルにおいて、人々に「主食は何か？」と問えば、大多数の人が「羊である」と答えるだろう。モンゴルの人々は、羊に対して並々ならぬこだわりを持っている。モンゴルには多種多様な羊料理があるだけでなく、羊の部位によって食べる人が分かれているほどである。羊万能説を唱える私の友人は、鼻がつまれば羊の脂をたらし、耳鳴りがすればホーショール（モンゴルの揚げ餃

子）を拵えて耳に当てる（もちろん、医学的な根拠は定かではない）。

これほどまでに羊愛あふれるモンゴルで、最もおいしい羊は草原で屠られたばかりの羊であろう。モンゴルの人々は新鮮な羊ほどおいしいと考えている。彼らはこのおいしい羊を楽しむために、長期休暇の際に親戚や友人である遊牧民のゲルや、草原の観光用ゲルを訪れ、宴を催す。宴の代表的な料理がホルホグだ。ホルホグは、羊肉の塊と野菜を熱した石とともに缶に入れ、じっくり火を通した伝統料理である（写真②）。モンゴルの人々はナイフを使って骨から肉を削ぎ取り、実にきれいに食べていく。



写真②ナラントールザハ屋外の販売ブース

草原で食べる新鮮な羊は別格のおいしさであるが、羊を飼育していない都市住民は、普段どのようにして羊を調達しているのだろうか。ここでは読者のみなさんに、私がウランバートルに住むモ

ンゴルの友人から伝授されたおいしい羊の買い方をお教えしたい。みなさんがウランバートルを訪れ、おいしい羊を欲した際、きっと役に立つだろう。

羊の旬

日本のスーパーマーケットでは、年中同じように肉が包装され、陳列されている。魚や野菜と比べ、肉の旬を意識する方は少ないのではないだろうか。しかし、日本と違い、モンゴルには羊の旬がはっきりと存在する。

ヒツジは季節繁殖動物である。低緯度地域を除く北半球では秋に発情期をおかえ、春に出産する。モンゴルの羊もこのサイクルは同じであり、モンゴルでは出産した後、8月頃まで授乳が行われる。そして、秋には厳しい冬を乗り切るためにたくさん草を食べ、その身に脂を蓄える。

こうした羊の繁殖周期から、モンゴルにおける羊の旬は11月である。そのため、モンゴルの人々は11月に羊肉をまとめ買いし、旧正月のお祝いに備える。その際の購入量は、夫婦と子ども2人の家庭で、羊肉が3~4頭分にもなり、これに加えて牛のモモを2本分ほど購入する。この11月に購入した肉は3月中に食べきってしまうのだ。

11月に羊を買うことがベストであるが、財布の中身が心もとない方は、3月に購入することをお

すすめしたい。3月は旧正月も終わり、羊の価格が安くなっているからだ。市場やスーパーマーケットによって価格は異なるが、3月であれば、羊を1頭あたり5,000円程度で買うことができる。これは11月の価格と比べて約1,000円、旧正月の価格と比べると2,000円程度安い。

ウランバートルの平均最高気温は11月から0度を下回る。天然の冷凍庫状態であるため、保存は容易であり、3月であっても11月に屠殺した羊は多く出回っている。羊を買うときには屠った時期を必ず確認し、おいしい羊を見つけてほしい。

ザハで羊を買う

「ザハ」とはモンゴルの市場である。ザハはもともと「端」という意味であり、その名の通り、大規模な老舗のザハはウランバートルの郊外に立地している。そのなかで、観光客にも人気があるザハは、「ナラントールザハ」である。ナラントールザハはモンゴル最大のザハであり、服やカバン、電化製品、ゲルまで買うことができる（写真③）。もちろん羊も買うことができるが、羊を購入する際は、ウランバートルの北部に位置する「フCHEDUSHIONHOROZHA」に行こう。モンゴルのザハは、雑貨系と食料品系に分かれている。ナラントールザハが雑貨系なのに対し、フCHEDUSHIONHOROZHAはモンゴル最大級の食料品ザハ

なのだ。



写真③フCHEDUSHIONHOROZHAの食肉加工所



写真④トラックの荷台で売られる牛の内臓

フCHEDUSHIONHOROZHAには各地から遊牧民が直接羊を売りにやってくる。そして、この新鮮な羊を求めて市民が買い物に訪れるだけでなく、小規模なザハやスーパーマーケット、レストランの経営者も肉を仕入れにやってくる。フCHEDUSHIONHOROZHA

ドゥションホーローザハは小売と卸売を兼ねているザハなので、他のザハやスーパーマーケットと比べて、半値から8割ほどの価格で肉を購入することができる。

フチェドゥションホーローザハに売られた家畜は、半地下の食肉加工所に運ばれ、各畜種の部位ごとに切り分けられる(写真④)。そして、切り分けられた肉類は1階の販売ブースに並べられる。この販売ブースは、牛や馬、ラクダといった大型畜種、羊とヤギの小型畜種、各種内臓に分かれており、客は各販売ブースを回り、お目当ての肉を購入する。

また、フチェドゥションホーローザハの敷地内には、牧民が羊を1頭売りしているコンテナもある。1頭売りのため販売ブースより安く買えるが、牧民によって値段がまちまちなので、複数のコンテナを回ることをおすすめする。また、フチェドゥションホーローザハの駐車場では、トラックの荷台で牧民が羊や牛などを販売している。ホルモンに目がない方は、そのなかで大きなヤシの実状の物体を探し出してはいかがだろうか(写真⑤)。これは牛の内臓を丸ごと胃袋で包んだものであり、1頭分の内臓が約800円と格安で購入することができる。多少癖はあるが、よく煮込めば、モンゴルウォッカを飲む際の最高の肴となる。



写真⑤ マクシビザハのミンチ加工

都心で羊を探す

フチェドゥションホーローザハは都心から離れているため、移動に時間がかかる。「時間に余裕がないからスーパーマーケットで買うしかない」と思う読者の方もいるだろう。しかし、そんな方もおいしい羊を諦めるにはまた早い。ウランバートルの都心には、小規模なザハがたくさん立地しているのだ。

都心に立地する小規模なザハの多くは、フチェドゥションホーローザハなどの大規模なザハから肉を仕入れ、販売している。そのため、都心のザハの価格は、大規模なザハと比べて高い。しかし、最近では都心に従来の仕入れ形態とは異なる、新しいザハが増えている。今回は、このなかからお

すすめのザハを二つ紹介しよう。

一つ目は「バインズルフザハ」だ。このザハはフチェドゥションホーローザハの支店である。フチェドゥションホーローザハより流通経費がかかっているため、羊肉は1kgあたり22円ほど高くなるが、スーパーマーケットやショッピングモールと比べて安く買うことができる。ちなみに、バインズルフザハのそばにある私立高校の食堂も、このザハから食材を仕入れており、食欲旺盛な生徒のお腹を満たしている。

もう一つのおすすめザハが、2017年5月にオープンした「マクシビザハ」である。「肉の市場」という名前のこのザハは、小規模なザハであるが、牧民から肉を直接仕入れている。新鮮な肉を安く

買えるということもあり、大人気のザハである。

このザハの駐車場は狭く、5台ほどしか駐車できないので、行く際には注意してほしい。また、ザハではミンチ加工も行っている(写真⑥)。客はお気に入りの肉を選んだ後、加工賃を払い、ミンチ肉にしてもらう。このミンチ肉に脂を混ぜ、ホーショールやポーズ(モンゴルの肉まん)を作るのだ。

このようにモンゴルの人々は、こだわりを持って羊を吟味し、購入している。みなさんもモンゴルを訪れた際は、彼らに倣って目利きし、草原が育んだおいしい羊を堪能してはいかがだろうか。

庄子元(しょうじげん)

関根良平(せきねりょうへい)

モンゴル国—人口 318 万人の Facebook 大国

モンゴル人は遊牧民？

2018 年春、モンゴルについて自由にエッセイを書く機会をいただいた。そこで、モンゴル国（以下、モンゴルとする）^{*1} に行ったことのない友人に何を知りたいかたずねると「モンゴルでイメージが強いのは食べ物か動物。だから実際の食事^{*2}や動物との関わりがわかったら楽しい」との答え。よく聞くと「動物」は家畜を指していた。実はこの友人は私の論文をいつも読んでくれている。そして、私をはじめとするモンゴル研究のフィールドワーカーはこれまでに遊牧民の生活、とくに畜産物や家畜について多く論じてきた。

にもかかわらず、まだ足りない？あるいは、私たちの論文がモンゴルのイメージを畜産物と家畜に固定してきてしまった？そういえば、東京育ちの従妹もモンゴルへの憧れを「動物と距離が近

*1 モンゴル人はモンゴル国・中国・ロシアをはじめとする世界各国に住んでいるが、本稿ではモンゴル人がマジョリティとして暮らす独立国である「モンゴル国」に焦点をあてる。

*2 モンゴル牧畜地域の日常的な食事については風戸真理 (2018) 「いっどこで何を飲食するのか？—モンゴル国における日常的な食事行動とジェンダー—」『生態人類学会ニュースレター』23:101-107 を参照。

い」つまり「羊や馬が家の近くにいるのは日本では考えられないことだから、行ってみたい」と表現していた。



写真① 家畜が覗きこむ、モンゴル牧民のゲル
(2017 年、モンゴル国ボルガン県)

私の感じているモンゴルはそれだけではない。遊牧とともに都市生活があり、情報化やグローバル化においては時に日本よりも進んだ多面性が魅力の社会である。これまで草原の牧民の視点からモンゴル社会を描いてきたが、本稿ではモンゴルの現代的な暮らしの一面として彼らの SNS 利用を紹介したい。2018 年 8 月のモンゴルを舞台として、SNS の中でも一番よく使われている Facebook

(以下、FB)を通して浮かびあがる、草原と都市をまたぐ多様な人間関係や、経済動物である家畜に加えて娯楽のための鑑賞動物との関係を描いていく。

ケータイとスマホの使用

モンゴルの人びとは広大な草原で家畜に語りかけるようなアナログな生活を送っていると想像している読者もいるだろう。確かに牧民は草原でゲル(移動式住居)に住み、家畜と畜産物を生産し、それを食べたり売ったりしている。同時に、大人も子どもも携帯電話(以下、ケータイ)を持ち、近隣や遠方の知人と頻繁に通話している。

モンゴルの携帯電話加入者数は2017年6月現在、約357万人^{*3}で人口の112%に達している。モンゴルには携帯電話事業者が4つあり、地域ごとにサービス開始時期や電波の強さが異なり、同じ事業者内での無料通話サービス等があるため、複数のSIMカードを所持している人が多く、電話番号も複数、端末も複数台になる。

広大な草原を飛ぶ弱い電波を強くキャッチしてくれる端末は折りたたみ式以前のストレート

(棒形)ガラケーである。一方、首都ウランバートルなどの都市、県や郡の中心地といった定住地では「オハラク・オタス」(uhaalag utas、賢い電話)と呼ばれるスマートフォン(以下、スマホ)を持ち、FBを代表とするソーシャルメディアを使う人が多い。草原ではインターネット電波が届きにくい、若者たちは定住地で学校に通う間にスマホを入手し、草原の実家に帰ってもアルバム・カメラ・ゲームなどを楽しんでいる。大人たちは、幼い子どもをスマホゲームに子守りしてもらって繁忙期のりきったり、時間のある時には微弱な電波をひろえる場所に立ってFBを楽しんだりしている。

電力はソーラーパネルで自家発電し、ケータイ・スマホの他にゲルの照明・テレビ・パソコン・DVDプレイヤー・ラジオなどの電化製品が使われている。



写真②学生に人気、ユニテル社のSIMカード(2017年、ウランバートル)

*3 総務省(2018)「世界情報通信事情 モンゴル(最終更新:平成29年度)」(<http://www.soumu.go.jp/g-ict/country/mongolia/detail.html>)(2018年7月31日閲覧)。



写真③草原のソーラーパネル発電（2017年、モンゴル国ボルガン県）

移動とFB

草原のケータイ利用について書いてきたが、実は2017年の国家統計によると、「草原の遊牧民」は人口の3割ほどにとどまり、モンゴル人の7割近くが都市に住み、その半数近くが首都ウランバートルに集中している。とはいえモンゴルの人びとは、草原、都市、そして国境を越えて頻繁に移動する。牧民は、家畜の採草地を求めて一年に数回ずつ引っ越すが、その子どもたちは就学のために都市と実家を行き来している。加えて、都市や外国で暮らす親戚を訪ねたり、中国やロシアに親

光がてら自家消費材と商材を買い出しに行ったりする。

草原では隣の世帯と離れてキャンプし、移動もよくするモンゴル人は、ケータイでの通話やSMS（メッセージ）機能をフル活用している。GMobile社が提供する、年額2700円で時間制限のない誰でもカケホーダイプランはとくに牧民に人気である。

他方で、一対一のコミュニケーションを越えたグループでの情報共有、外国に住む親戚や友人との連絡、そして新しい人間関係を拓く場などとしてインターネット上のSNSが用いられる^{*4}。モンゴル人がスマホに入れているSNSアプリには、世界的ネットワークのFB・Twitter・Instagram、地域型のWeChat（中国）・LINE（日本）・Kakao Talk（韓国）などがある。世界的SNSの使いわけは、30代男性（大学教員・政治学）によればモンゴルでは「FBに悪人はいない。Twitterにアホはいない」と言われており、「FBには人生を書く。Twitterでは政治を語る。そして、Instagramでは就職・転職したい人が輝かしい経歴を並べる」のだという。40代女性（大

*4 総務省（2018、同上）によれば、モンゴルのモバイルインターネットの加入者は2016年6月現在251万人である。

学教員・英語)は「Instagramでは容姿のいい人が自己宣伝する」と女性の視点で補足してくれた。

モンゴルのソーシャル・メディア・マーケティング会社 NATHOUSE によると、2018年2月現在モンゴルでは人口の66%にあたる210万人がFBを使っている。そのうちわけは男女ともに子どもから年金生活者までと幅広い。端末はアンドロイド・スマホをはじめとするモバイル端末が9割と圧倒的多数である^{*5}。



写真④会食中も手元にスマホとiPad。都市で学び草原出身の女性たち(2017年、ウランバートル)

モンゴルの人びとは自身の近況をFBのタイムラインで紹介し、特定の相手との連絡手段として

メッセージ機能を用い、国際電話としてFBのビデオ電話を使う。このようにFBは今、モンゴル人の生活に深く浸透していて、「*feis*」(フェイス)と親しみを込めて呼ばれる。FBにはモンゴル語版がなく英語版を使っているので英語のFB用語が取り入れられ、キリル文字やローマ字で「*laiki*」(いいね!)、「*sheir*」(シェア)と書かれたり、英語の「PM」(メッセージください)という略語がそのまま使われたりしている。

さらにモンゴル人は、何かの役に立ちそうだと
思った相手には面識がなくても臆せずに「*ナイツ
イン・フセルト*」(*naizyn huse/lt*、友達申請)を
送り、日々、社会的ネットワークの拡大に努めて
いる。私にもまったく知らないモンゴル人たちか
ら次々と友達申請が届く。

^{*5} NATHOUSE (2018)「Facebook хэрэглээ Монголд 2018 – Инфографик」(<http://www.nathouse.mn>) (2018年7月31日閲覧)。

グループでつながる

FBの諸機能の中でもモンゴルでは「グループ」利用が盛んである。グループとは、投稿された記事がグループメンバー全員に届くしくみであり、メンバーだけが記事を見られる非公開グループとメンバー以外も見られる公開グループとに分けられる。2018年8月現在、モンゴル最大グループの一つである「*Mongol uls Media*」(モンゴル国メディア)はモンゴルの人口(318万人)の15%にあたる49万人のメンバーを擁する(私のような外国人も含まれるが)。

彼らは自身が参加しているグループに自身の「ナイツ」(*naiz*、友達)を勝手に登録するので、グループメンバーは増え、私も多くの「モンゴルのグループ」に参加している。たとえば2018年6月、私が画質のよくない写真を自分のタイムラインで紹介したとたん、ナイツが私を「*iPhone hereglegchid sonirhogchid*」(iPhoneユーザーと興味のある人)グループに登録した。これは主に中古iPhoneを個人間で売買する情報交換の場で、本人から説明はないが「写真はiPhone画質で撮りなさい」というオススメだろうと推測している。モンゴル人は、私が調査を始めた1990年代から写真を撮られるのも見るのも大好きで、今は自身のスマホカメラでの撮影やセルフィーを存分に

楽しんでいる。

ところでインターネットは世界的なネットワークであるが、「モンゴルのグループ」という限定は使用言語がモンゴル語であることによる^{*6}。文字は、キリル文字やそのローマ字転写が用いられる。

以下ではモンゴルのグループの中でも、2018年8月4日時点でメンバーが多いもの、モンゴルらしいもの、それらのトップ記事、を公開グループに限定して紹介していきたい。内容としては、①販売、②全国情報、③地域情報、④動物、に分けられる。「販売」はFBの定めるグループカテゴリ名称であるが、実際には「売ります・買います」というフリマ機能を果たしている。また、それ以外のカテゴリーのグループでも商取引がおこなわれている。

1. 販売

スマホ・生活用品・不動産などの新品や中古品を、主に個人間で取引するマーケットである。私もメンバーになった「*iPhone hereglegchid sonirhogchid*」(iPhoneユーザーと興味のある人)

*6 モンゴル語系の言語は中国やロシアでも話されているが、方言に分かれている上に、中国ではFBへの接続が制限され、ロシアの話者は多くないため、FBグループのメンバーはモンゴル国民が主である。

グループのメンバーは 32 万人で、これは総人口の 10%にもものぼる。

2. 全国情報

話題は雑談・ゴシップ・宣伝などである。モンゴル最大グループの一つとして先に挙げた「Mongol uls Media」(モンゴル国メディア)のトップ記事は、芸能人の三角関係についてのネットニュースの紹介であった。もう一つの大人気グループはメンバー42 万人(人口の 13%)の「Medehgui zuilee asuu」(わからないことを聞いて)である。最新投稿の一つは夏の牧畜風物をテーマとしたもので、仔ヒツジ・仔ヤギを去勢した多数の糞丸に米を足して炊いたリゾットの写真に「好きな人どのくらいいるかな？」とのキャプションが添えてある。「何これ」「やだ」と書き込む若い町っ子と「おいしいよ」「糞丸」「去勢した玉」と草原暮らしの経験を伝える人びとが、30 時間で 250 件のコメントを投じていた。

3. 地域情報

スケールの異なる地域ごとに地域情報グループがある。大きくわけて、国内グループ・外国のグループ・国際グループの 3 つがある。



写真⑤スマホ画面スクショの写真/タイを旅するエレンチェンハンドさん。「世界旅行者」グループへの投稿(2018年)

国内グループは、県や郡といった行政単位ごとに組織されているリアルな「郷人会」のオンライン連絡網として機能していることが多い。モンゴルには 21 の県、その下位組織である平均 15 の郡があり、それぞれに郷人会がある。そして各郷会には目的や社会関係ごとに、交通情報・親睦・販売などの複数の FB グループがある。たとえば「Chuluut sum / Chuluut Arkhangai /」(アルハンガイ県チョロト郡)グループには 2500 人が参

加して、最新投稿は「今日の昼間に県の中心地からチョロート郡に自動車が行きます。電話番号」であった。郡のグループでは、地元と都市を行き来する自動車やガソリンをシェアするための交通情報の投稿が多いが、他にも年長の国家級横綱牧民を訪ねた記念写真、地元で咲いた花の写真、保育園に空きがあるかの質問、住み込みで働いてくれる牧民家族の求人、などがある。他県でフィールドワークしている仲間によると、パーソナルな近況報告が交わされる親睦グループもある。

外国のグループは、大きく国や都市ごとに、さらに目的や社会関係によって分かれる。たとえば韓国に関するモンゴル人のグループは複数あり、そのメンバー総数は33万人以上にのぼる。韓国よりもメンバーは少ないものの、ヨーロッパ、日本、アメリカ関連でも大きなグループがある。

とはいえモンゴル最大の地域情報グループは、メンバー54万人（人口の17%）を擁する「*Delhiigeer Ayalagchid, World Wanderers*」（世界旅行者）である。モンゴル人が世界各地を旅した経験や世界各地に住むモンゴル人からの近況が写真メインで紹介される。万里の長城にゲルの模型を置いて撮った写真や、ケルン大聖堂の前で家族4人が民族服を着て撮った記念写真など、全世界の風景にモンゴルを象徴するモノが写し込

まれている。

4. 動物

動物グループは多数あるが、家畜や畜産物に直接関係するものは、草原ではインターネットへのアクセスが限定されることもあって小規模である。しかし、一部の牧民はFBグループを通して、集約的な畜産経営について議論したり、新しい家畜品種や家畜医療についての知識を共有したり、農産物の売買をおこなったりしている。

農産物の販売グループに「*Mal Mah Suu Tsagaan idee Ovliin idesh Hunsanii Nogoo*」（家畜・肉・乳・乳製品・冬用の家畜飼料・野菜、2.3万人）がある。そこでは、「馬乳酒売ります」「羊肉買います」「ザブハン県トソンツェンゲル郡産のブルーベリー売ります。10リットル2300円。配送します。電話番号」「旬の純国産野菜、予約受付中。ご希望の場所に配送します。ジャガイモ1キロ45円、ニンジンとキャベツ68円、タマネギ90円…」などの情報が盛んに交換されていた。

このグループでは家畜生体（ウシ・ウマ・ヒツジ・ヤギ・ラクダ）の売買やバターを希望する投稿も多い。「（馬群の写真付きで）こちらを向いている3歳オスウマ、売ります」「（畜舎とウシの写真付きで）畜舎を牛群とセットで売ります」「首

都近郊の10Kのマンション売ります。仔ヒツジを含むヒツジの群れ(と交換)で」などの投稿に、値段や詳細をたずねるコメントが多くつく。これらのやりとりから、現金が必要で家畜を売りたい、離農あるいは新規就農したい、家畜の種・性・年齢バランスを調整するために家畜どうしをバーターしたいという牧民たちの思いがうかがえる。このような情報交換はかつては口コミ、社会主義以降にはラジオやテレビへの投稿広告としてもなされ、今ではインターネットを通して全世界公開でおこなわれている。

モンゴル人と動物のユニークな関係が浮かび上がるグループとして、家畜に加えて、モンゴル在来品種犬「*Mongol bankhar*」(バンカル犬、3.4万人)グループと「*Hamster buyu orog zusag sonirhogchdyn grupp*」(ハムスター、千人)グループを紹介したい。バンカル犬は家畜を守ってオオカミと闘う番犬であるが、国際的な保護活動もあり人気上昇して高値で取引されている。バンカル犬は民家の屋外で一頭から数頭で飼育されることが多いが、ブリーダーが経営するバンカル牧場もある。グループメンバーには男性が多く、話題は愛犬自慢、売買とバーター、迷い犬、品評会や競技会の情報などである。たとえば、「(犬の写真付きで)アタル(名前)、1歳メス」という投稿があると、「電話番号」「値段」「交換できるオ

スがいるよ」「売るつもり？」などのコメントがつく。愛犬自慢では家畜と異なり動物の「名前」があげられるが、ディスカッションは鑑賞にとどまらず、売買・交換の交渉や繁殖のためのペアリングにつながっていく。



写真⑥大きくて強いバンカル犬(1998年、モンゴル国アルハンガイ県)

一方、ハムスターのグループには子ども、とくに女の子が多い。ハムスターはキヌゲネズミ亜科の5属をもとに近年100年間に品種改良が進んだ鑑賞動物であり、毛の色や長さによって20以上の品種に分けられている。モンゴルにはジャンガリアンやロポロフスキーという種類が多い。モンゴル人は愛ハムスターのためにハムスター専用の飼育グッズを揃えている。カラフルなプラスチック

ック製のケージ、回し車、哺乳瓶、エサ容器に加えて、床材（土の代わり）や浴び砂も輸入品を揃える。ジャンガリアン・ハムスターの原産地はカザフ草原周辺なので、浴び砂はウランバートルの砂でよいと思うが、グローバル・スタンダードな道具を求める傾向はモンゴル人らしさである。

一方で、鑑賞動物であっても繁殖などのために交換・売買しようとするのも、家畜やバンカル犬に共通するモンゴル人らしさである。「(写真付きで)うちのハムスターは少し寂しげな様子なのでお友だちをみつけてあげたいな」と投稿があれば「うちに同い年くらいのお友だちがいますよ」、逆に「売りますか？」などのコメントが並ぶ。

ところが2018年7月、それまでハムスターの名づけ方や慣らし方について楽しく話し合っていたメンバーたちから「ハムスターを道具一式と共に2000円で。配送します」「よい家族にあげます」といった投稿が続投された。“愛ハムスター”を売りに出した中学生くらいの女の子に話をたずねてみた。すると、学校が夏休みになって例年のように家族で草原の祖父母宅などに数カ月滞在することになったが、長距離の自動車移動やバンカル犬が放し飼いされているような環境にハムスターは連れて行けないと判断したらしい事情を教えてくれた。バカンス前のペット放棄はフ

ランス等でも多発して社会問題となっているが、モンゴルでは意外にも悲惨さはない。ハムスターセール投稿には「オス？メス？」「いくら」「配送は」などのコメントが次々かついた。人間によく馴れた「中古のハムスター」は人気なのである。日本では哺乳類の鑑賞動物やペットといえれば幼獣に人気が集まるが、モンゴルのハムスター・グループでは一年中「手のりの (*gart dassan*、手に馴れた) ハムスター買います」という投稿が出る。これらのことから、モンゴル人は動物を飼い馴らす技術や知識の価値を尊重しているように思われる。

おわりに —モンゴル人のバーチャルノリアル生活

このように2018年夏のモンゴルではケータイとスマホが使われ、スマホではFBが重要なコミュニケーションツールとなっていた。FBというバーチャル空間では、親戚や旧知の人びとと交流を深めると共に、面識のない人とも「ナイツ」になったり、さまざまな規模や目的のグループメンバーどうしとして出会ったりしていた。このようにモンゴル国の318万人はリアルとバーチャルの二つのレイヤーでネットワーク的につながっているのである。

FB グループでは、①販売、②全国情報、③地域情報、④動物、に関するものを取りあげた。ここでは、中古の家具や iPhone が転売されて必要とする人の手に渡り、家畜やペットも現金取引やバーターで譲渡されて飼い主が変わっていた。地域のコミュニティでは個人どうしの交渉によってカーシェアが実現していた。

このように、モンゴルでは情報化が進むと同時に、それによって資源を再利用ないしはシェアする循環型社会が実現されているといえる。その取引の様子からは、貨幣経済のみに依存するのではなく物々交換という経済様式が生きていることもわかる。人間と動物の関係では、ペットであっても消費するだけでなく繁殖させて仔を売ったり、その育成技術が付加価値に転換される点が、家畜生産の歴史をもつモンゴル人ならではの態度といえるかもしれない。

私は 1994 年からモンゴルの牧畜地域各地に通い、最初は通信がしごく不便であったが、彼らのリアルで豊かな社会的ネットワークに助けられながら調査をおこなってきた。それが、たとえばザブハン県テルメン郡では 2010 年代にケータイとスマホが普及し、都市で就学・就労する人を中心に FB ユーザーが増えた。2018 年現在、モンゴル人は「フェイス」をモンゴル語で楽しむ 210 万人の仲間たちと「ナイツ」あるいは同じグループ

のメンバーとして画期的な速度でつながりつつある。モンゴル人はリアルとバーチャルの両面でソーシャルな人たちであるようだが、彼らのバーチャル／リアル生活の絡み合いや、他言語・地域での FB 利用とも比べつつ、日々変化するモンゴル人の FB 利用の「参与観察=フィールドワーク」を続けていきたい。

風戸真理（かざとまり）

オアシスからの便りーサウジアラビア、ワーディ・ファーティマ

オアシスの変貌

半年ぶりにサウジアラビアのオアシスを訪れています。その目的は、オアシスの最近50年の変貌を調べるためです。

わたしは、アルジェリアのサハラ・オアシスで暮らしの変化、オアシス灌漑農業の変化、社会の変化などをこれまで研究してきました。その結果、多くの若者が孤立した小さなオアシスから、サハラのオアシス大都市や地中海沿岸の大都市に流出していることを知りました。

サハラのオアシス農業も、この50年で大きな変化をおかえています。水の供給源として1000年以上も使われてきた、横穴式地下水路(アルジェリアではフォッガーラ、イランではカナートなどと呼ばれる)が廃れ、今では地中深くから水をくみ上げる揚水井戸が主流となっています。アルジェリア政府のオアシス振興政策によって、多くの揚水深井戸が掘られてきたのです。

サハラ・オアシスには必ずといっていいほどナツメヤシ(*Phoenix dactylifera*)が植えられています。ナツメヤシは、ヤシ科の植物で、その分布域はペルシア湾を中心に、砂漠に点在するオアシ

スに広く分布しています。高温・乾燥に強いナツメヤシは、オアシスの暮らしにとって欠かせないものでした。ナツメヤシの木陰は、地表面の温度を下げ、湿気を保ち、穀物や野菜の栽培を可能にするのです。その実であるデーツは、乾燥させて長期保存が可能なおうえに、糖質が高いため、オアシスの人々に貴重な甘味を供してきました(参考:「デーツの名産地ーサハラのオアシス都市ビスクラ」田中ほか編『フィールドで出会う風と人と土』2018, 29-33頁)。

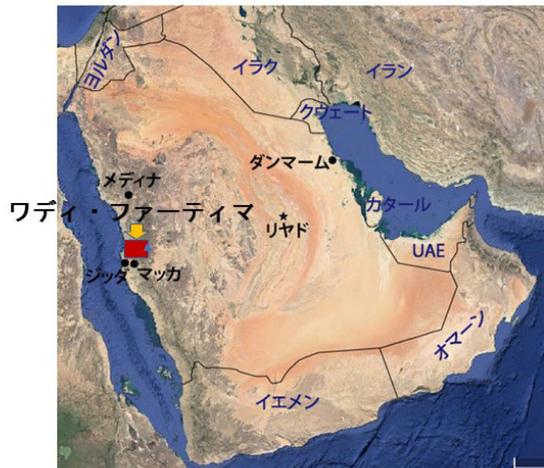
ナツメヤシが列状に植えられた間には、主に自給用のオオムギ、コムギ、トウジンビエなどが栽培されてきましたが、近年では換金用野菜の栽培が増えています。

また、物流の便が良いオアシスでは、収量が多い特定のナツメヤシ品種栽培が盛んになり、それまでおこなわれてきた多品種の栽培が減る傾向にあります。

ワーディ・ファーティマ

このようなオアシスの変化が、他所では起きているのか、起きているとすればどのように起きているのかを知りたくて、サウジアラビアのワーディ・ファーティマ・オアシスまで来たのです(図1)。ワーディ・ファーティマは、サウジアラビア第2の都市ジッダ(ジェッダ)から、東北東に直線距離で

およそ 50km のところに位置します。ワーディとはアラビア語で季節河川を意味します。ファーティマとは女性の名前です。



図① ワーディ・ファーティマの位置

調査チームは 9 人から成り、人類学、地理学、考古学、建築学を専門とする研究者と、砂漠の文化に関心をもつ実務者も参加しています。留学生でもあり、日本の企業で働くサウジアラビア人青年も、コーディネータとして重要な役割を担っています。私自身は 2 回目の調査となります。

この 50 年間のオアシスの暮らし、農業、社会の変化を知ろうとした場合、いくつかの方法論が考えられます。今回わたしたちは 3 つの方法によって調査を進めていくことにしました。その 3 つとは、地域の人々からの聞き取り、衛星画像の比較、

過去の記録との比較です。

これにくわえて今回の調査では、様々な専門をもつ研究者と、豊かな感性を持つ実務者が協力して、現ワーディ・ファーティマ・オアシスの現状と、将来のオアシス生活のあり方を考えるためのヒントを得ることも、私たちが共有する目的でもあるのです。そこには、ワーディ・ファーティマの人々の考えを、存分に取り入れることが不可欠です。

日本人研究者による、海外調査が盛んになりはじめたのは 1960 年代以降です。多くの研究者がカメラなどの記録機器持参し、世界中で広くフィールドワークをはじめました。今回の調査では、故片倉もとこ国立民族学博物館名誉教授が、1968 年以降に撮影した調査地の写真と現在の状況を比較しながら研究を進めていく予定です。

片倉もとこ氏の研究によれば、1960 年代末期には、すでに大きな社会変化が起きていました。ワーディ・ファーティマの人々のそれまでの主たる生業は、遊牧でしたが、当時すでに定住化が始まり、多くの人々が農業や商業などに携わるようになっていました。また、農場主が、マネージャーや労働者を雇用して、作物を生産する企業的農業もすでに現れていました(『アラビア・ノート アラブの現像を求めて』片倉もとこ 1979)。

乾季と雨季

首都のリヤドで関係諸機関にあいさつをしたのち、調査地、ワーディ・ファーティマでの調査がようやく始まりました。

まず訪れたのが、オアシス灌漑農業の命ともいえる水源です。ワーディ・ファーティマ地域の季節は、10月から1月までの雨季と、2月から9月までの乾季に分けることができます。年間の雨量はおよそ100mm程度。もっとも暑い6月の平均最高気温は44度にまで達します。

その一方で、もっとも涼しい1月の平均最高気温はおよそ30度です。雨がなく気温も高い、乾季真っ盛りの5月に見た、ワーディ・ファーティマの風景は、灌木こそ生えているものの、まさに乾いた大地そのものでした(写真①)。



写真①乾季の農地

水路も渴ききっていました(写真②)。



写真②乾季の水路

ところが、今回(12月)に訪れてみると、大地には、ところどころ草が生え、干上がっていた水路には水が流れています(写真③)。畑では、作物栽培の準備が進められています(写真④)。

とはいえ、ワーディ、湧水など自然の水源地の利用は減りつつあります。その要因は、多くの住民が指摘する、湧水の減少です。近年では水がまったく湧かない年もあるそうです。1960年代末に、大都市ジェッダへの水の供給のため、水利公社がワーディ・ファーティマにおいて、多くの湧水の水利権を買い取ったことも、自然供給水への依存度が大きく低下した要因です。



写真③雨季の水路



写真④雨季の農地

なりわいとしての農業？

ワーディ・ファーティマではどのような農業がおこなわれているのか。こうした関心から、ミシャルさんとアリさんが共同経営する農場を訪ねてみました。



写真⑤ミシャルさんの農場

2人が経営する農場の広さはおよそ60ヘクタールです。畑ではナツメヤシ、野菜を栽培し(写真⑤)、2頭のウシ、200頭のヤギ、300頭のヒツジなどの家畜も飼っています。現在、作業を担っているのはバングラデシュから来た8人の労働者ですが、中学生の頃まで、2人はイエメン人の労働者にま

ざって、農場で働くこともあったそうです。

収穫した農作物の用途は、親族内での消費がほとんどで、余剰があった場合にかぎって、販売するとのことでした。飼っているヤギは自分たちで消費するためのミルク用、ヒツジも息子さんの結婚式で饗するためだそうです。

実は、2人が農場を本格的に経営しはじめたのは、それまでの仕事を定年退職した3年前のことです。それぞれ警察官、電話会社社員として働いていたそうです。

片倉氏がフィールドワークを始めたころ、ワーディ・ファーティマで農業に携わる人々の目的は、生きていくために必要な食べ物や収入を得るためでした。それは、個人の農家だけではなく、当時すでに芽生えていた企業的農場経営においても同じことです。地主、マネージャー、労働者、すべての人々が生活の糧のために働いていたのです。

しかし、私の目に映った現代の農場経営は、主たる収入源となるものではないというものでした。

とはいえ、収穫物は、家族や労働者たちが自分たちで消費し、世帯の経済にとってまったく無益というわけではありません。また、余剰があると販売するとのことでしたが、その量によってはローカル経済にも少なからず貢献している可能性もあります。それにくわえて2人は、「先祖から受け継いだ農地を守るためでもある」と農業を守るための文化的価値を大切にしているように見受けられました。

ただし、農場で雇われている外国人にとっての農場労働による収入は、祖国の家族を養う重要な金銭であり、彼らにとっての農場労働は、なりわいの要素が大きいといえるでしょう。

2人の話のなかで、興味深かったことは、農業に対する熱意の世代間ギャップです。2人の子息は、農業には関心がなく、たとえ定年後であっても、2人のように農場経営をおこなう意思はないようです。ミシャルさん、アリさんは、子供の頃、農業に触れた経験があったからこそ、定年後に農業という選択肢があったのでしょうか。このことは、日本の農村における跡継ぎ問題、Uターン帰農に通じるものであると感じました。

ワーディ・ファーティマのナツメヤシ

片倉もとこ氏が撮影した昔の写真をみると、耕地の中にナツメヤシが生えていることが確認で

きます(写真⑥)。



写真⑥耕地に植えられたナツメヤシ (©国立民族学博物館、撮影：片倉もとこ)



写真⑦焼かれたナツメヤシ (©国立民族学博物館、撮影：片倉もとこ)

ワーディ・ファーティマのデザートは、地域の人々の貴重な「甘さ」であったことでしょう。しかし、「このごろの子どもたちは、なつめやしとらくだの乳の朝ごはんでは、いやだという。マーマレー

ドやジャムがいいらしい」(原文ママ)、というその当時の農民の愚痴も片倉氏の著書によって紹介されています(前掲書)。「近代化」に飲み込まれようとしている、ワーディ・ファーティマでの象徴的な出来事です。

また、枯渇した泉周辺のナツメヤシが、農民によって焼かれてしまった写真も、印象に残ります(写真⑦)。その理由は、ナツメヤシが貴重な地下水を吸い上げないようにするためでした(『アラビア・ノート アラブの現像を求めて』片倉もとこ 1979)

ナツメヤシのゆくえ

今回の調査で気づいたことは、ナツメヤシがまったく植えられていない農地が多かったことです(写真①、②)。

ワーディ・ファーティマの人々にとって、ナツメヤシの重要性は低下してしまったのでしょうか。

前述の、ミシャルさんとアリさんの農場の一角にはナツメヤシが植わっています。

しかし、「昔は、ナツメヤシが富の象徴であったけど、手間がかかってしょうがない」と、ナツメヤシの栽培に消極的な姿勢が垣間見えていました。

そのいっぽうで、多くのナツメヤシが、積極的に栽培されている農場もあります(写真⑧)。



写真⑧ アリーさんが管理するナツメヤシ農場

そのひとつである、アリーさん(前出の「アリ」さんとは別人物)が管理する農場を訪ねてみました。

この農場を管理するのはアリーさんですが、農場主はワーディ・ファーティマ出身の企業家だそうです。アリーさんの立場は、いわゆるマネージャーです。アリーさんの下には2名の技術者(スーダン人、エジプト人)、そして10名程度の労働者(パキスタン人など)が働いています。

ナツメヤシが植えられている一画を調べてみると、19ものナツメヤシ品種を確認することができました。とはいえ、この農場の生産物も、積極的に市場で売るものではないそうです。アリーさんいわく、収穫したデーツの大半は「ザカート(喜捨)」として、人に施すのだそうです。

ワーディ・ファーティマでは、ナツメヤシと、人々の生活との距離は時代を経るにつれ、少しずつ遠くなりつつある印象をうけます。ところが、ワーディ・ファーティマの人々が日常的にデーツを食べていることは、家を訪ねると必ずデーツを出してくれることから容易に想像できます。そのデーツはどこから来るのでしょうか。話を聞いてみると、ナツメヤシ栽培が盛んな、メディーナ州やカシム州産が多いようです。この2地域への訪問は今後の重要な課題となりそうです。

世代を超えたフィールドワーク

ワーディ・ファーティマでのフィールドワークは、途に就いたばかりです。これまでの短い経験からでさえも、このフィールドワークは、世代を超えたものであることを感じます。片倉もとこ氏が交流を続けてきた人々の、子、孫世代とわたしたちとの交流が、このフィールドワークの起点となっているからです。日本人研究者による海外フィールドワークが活発化してから、早50年あまりが経ちました。当時の研究成果と人間関係(フィールドワーカーと地域の人々)を継承し、現代の視点からとらえなおす作業は、単に過去の研究をみつめなおす学術的成果を生み出すものにとどまらず、さらに50年後を見据えた研究資源、地域資源、異文化交流を生み出す行為でもあると実感しているのです。

石山俊(いしやましゅん)

I am coming の裏切り

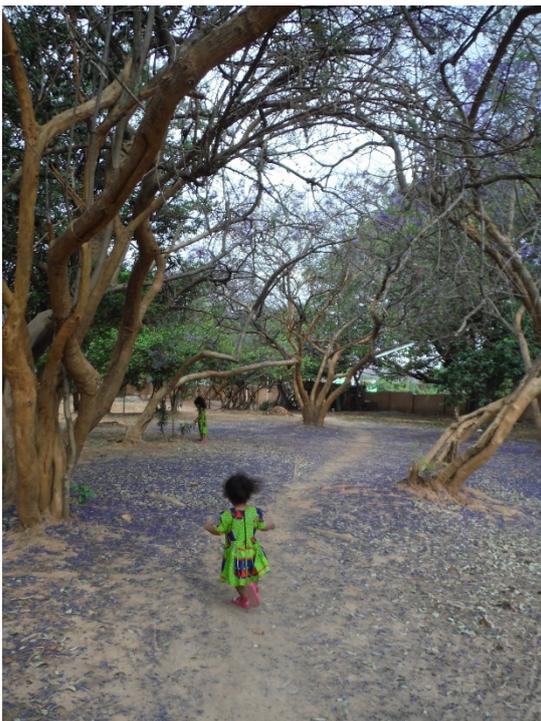
待つ身の不安

夜中、ザンビア共和国の首都ルサカのメインストリート沿いに建つ集合住宅は、意外にも物音が少ない。時折聞こえてくる人の声や階段を上り下りする足音は、彼の帰宅を期待させ、その直後に自宅の扉のノブがまわされる音が続かなければさらに不安が増す。「I am coming」と言ったきり、なんの連絡もなしにこんなに遅くなるなんて。もしや物盗りに抵抗して突き飛ばされてしまったのか。そのときの頭の打ち所が悪くて起き上がれなくなっているのか。いや、物盗りに遭うまでもなく、酒を飲んで酩酊して眠り込んでしまったか。はたまた、悪意を持った知人たちに取り囲まれてしまったか。もしくは単純にタクシーに乗って帰るときに事故にあったのか、いや、タクシーごと強盗にあったとか。いや、タクシーの運転手も強盗のグルだったとか……。想像力をたくましくする私に、この街に限らずアフリカ一帯で起きていると耳にしたことのある事件のイメージが一気に襲いかかる。その次に思うのは、この眠れずに不安でいる私に思いがはせられない相手の思いやりのなさに対する寂しさと悲しさ。そして、夜が明けて彼が帰宅しなかったときに、なにをすればい

いのかについて考え始める。明日は日曜日だから、メイドはやって来ない。子ども2人と一緒にうろうろ探し回るわけにもいかない。それに私も妊娠中だから、無理に動けない。それにしても、幼い子ども2人と身重の自分を家に放っておいて、連絡もなしに奴は一体なにをやっているのか！やはりなにかあったとしか思えない。物盗りに抵抗して突き飛ばされてしまったのか。そのときの頭の打ち所が悪くて……。この繰り返しの思考のなかでまどろんでいるうちに空が白みかけた頃、ようやくトントンと扉が叩かれる。

ルサカに住み始めて2年が経過した。私の仕事のため、ウガンダ人の夫は子ども2人の面倒をみるためにルサカにやって来た。それまで日本とウガンダと離れて暮らし、毎日の1分足らずの電話で安否確認をしていた私たちは、はじめて一緒に暮らす機会を得た。その場所は、ザンビアというお互いにとっての外国であった。しかしザンビアの首都ルサカには英語を話せる人が多く、簡単な会話ならば英語を使える夫は、たとえルサカの人々が日常的に使用している現地語を完璧に理解できなくても、次々に友達をつくっていった。特に、子どもの面倒や家事一般をメイドに依頼し、彼自身が自分でなにかビジネスができないかと、平日の昼間も外に出るようになってからは、友達のできる範囲が広がった。いつの間にかあるコン

パウンド(低所得者居住地域)では、「バッドマン」というあだ名で知られるようになった。外国人である彼が、からかいややかみをぶつけられたとき、臆することなく言い返していたとかで、「恐れ知らず」という意味でその名がついた、と夫は説明する。単に「怖いもの知らずの悪がき」って意味なんじゃないの、と思っではみても、私自身のルサカにおける狭い交友範囲を考えると、彼のそのルサカでの溶け込みようは、うらやましくてたまらない。



写真①滞在する集合住宅の庭：ジャカラングの花盛りに子どもたちにチテンゲ(女性用の腰布)で仕立てたドレスを着せて(2017年9月撮影)

さて、私が不安に襲われるのは、夫が「I am coming」と言ったとき、連絡をよこさず帰宅しないときである。ほかのアフリカの国と同様、ルサカでも一般市民に普及している携帯電話を持ち歩いている彼には基本的に連絡がつく、はずである。私が仕事を終えて帰宅後、夫がいない場合は彼に電話する。そのとき彼は帰宅までの時間を「30分から1時間」など具体的に言うときもあるが、基本的には「I am coming」とだけ言う。アフリカでは時間がゆったり進む、もとい、アフリカ人は時間が守れないというのは、よく聞く話である。待ち合わせの時間が来ても現れない相手に電話してみると、「I am coming」とか「I am on my way」などと言われるが、実際にはその相手は自宅で靴紐を結んでいる最中だったり、外出する前に水浴びしようとしているところだったりするのだ。現地語に注目してみると、かれらは時間を先取りして話す感覚を持っているように思う。たとえば電話した相手から、「今(そちらに)行きます」を意図して、ルサカでよく話されているニャンジャ語で「Nabwera」(英語の直訳：I have come)という言葉が発せられる。また、ウガンダの首都カンパラでよく話されているガンダ語では、今いる場所から離れるとき、そこに残る相手に対して「もう行くね」という意味で、「Ngenze」(英語の直訳：I have gone)と言う。もう気持ち自体は、すでにそちらに行っている、すでにどこかに向かっている

という感覚。それでいえば、「I am coming」という現在進行形の英語は、かれらの感覚でいえばその前の状況、たとえ自宅はまだ出かける準備をしていたとしても充分成り立つ表現なのかもしれない。よって私も、夫から「あと20分」とか「1時間くらい」という時間をあらわす言葉が出れば、その2~3倍の時間を待つことを覚悟するし、「I am coming」という言葉も、日本語で解釈するならば「そっちに行く意志がある」程度にしかとらないようにしている。しかし、だ。「I am coming」と言ったきり、なかなか帰宅せず、電話しても相手が電話に出なかったり、「おかけになった電話番号は現在電源が入っておりません」という音声の繰り返しを聞くことになったりすると、アフリカ人の妻としての余裕は一気に消え去る。

遅れる理由

帰宅が遅れる理由はさまざま。たとえば急に友達にパーティに誘われたから行ってみただが、夜遅くになりタクシーがつかまらずすぐに帰宅できなかった、という場合。この「誘われる」というのが曲者である。実際に、「パーティがあるから来て」という招待も存在するが、ザンビアに限らず、ウガンダでも「〇〇に行くから、エスコートして」という依頼もよくある。その場合、本当にその場所まで行って、すぐに別れてもいいのだが、そこ

から離れるのに交通手段が必要になる場合やもしもその集まりに興味がある場合などは、そのままエスコートした相手が帰るまで待ち続けるということも多い。私が働くルサカの事務所でも、一度に複数の来客があった場合、それぞれの話を聞くとうすると「彼/彼女をエスコートしにきただけです」と返答されることもある。

そんなわけで、遅くなった夫の帰宅時、私がむっとしながら扉を開けると、夫の横に夫にエスコートを依頼した男性が申し訳なさそうに立ちすくみ、「すぐに（帰宅のための）交通手段が手に入りませんでした。ごめんなさい」と謝ってきたこともある。この日、夫に「今もう（自宅近くの）〇〇通りを歩いているところ。すぐ帰るから」と言われた私は30分で戻るとふんだため、その後4時間ほど連絡が取れず悶々としていた。実際は、私との電話の直後に、夫は私たちと同じ集合住宅に住む友人に会い、親戚が集まるパーティがその友人の実家で開催されているからエスコートしてくれと、頼まれたとのこと。そしてそこへ向かったあと、夫の携帯電話のバッテリーがなくなってしまったとのこと。夫は「ほんと妻が心配するから早く帰ろうって言っていたんだけど」と言い放ち、その友人は縮こまる。とりあえずその友人を家に帰らせ、私は叫ぶ。連絡をよこせばそれで問題ないのだと。まず私の携帯の電話番号を覚えろ、そして友人の携帯電話を借りてかけろ！充電が早々

に切れるスマホなんて持つな！

急に知り合いが亡くなりザンビアの葬式がどういものか気になって葬式に行ってみたところ、意外と場所が遠くてすぐに帰れなくなったということもあった。ウガンダの有名なコメディアンがザンビアに遠征公演に来ていたから、知り合いのウガンダ人に誘われてそれを見に行ってしまったこともあった。こうした急な予定変更の背景には、知人の多さがあるのだろう。私自身もカンバラで調査のために歩き回っているうち、たくさんの人に声をかけられるようになり、気づけば自分の目的地に到着するまでの間に、多くの人と挨拶をし、立ち話をし、写真を撮ったり、ちょっと飲んだり食べたりして、時間が簡単に過ぎ去っていく経験を何度もした。一度、時間がもったいないと感じて、立ち話がしまろうとするのを無理やり切り上げて自分の行き先に向かおうとしたときに、知り合いになってしまったこともある。知り合いの数の多さ、そしてその場で出会ってしまった人たちになにか声をかけられれば、その誘いを受け、共に過ごしていくという姿勢。この状況では目的地に時間通りに行くことがどんなに至難の業であるのか、想像がつく。

しかし再度言おう、私が不安に襲われるのは、彼が「I am coming」と言ったきり、連絡をよこさずにいるからである。帰宅する予定時刻が変わったならそれを連絡してほしいというただその願

がなぜこんなに通じないのか。あるとき、連絡が途絶えたあと明け方近くに帰ってきた夫が、友人に誘われてクラブに行くと報告するので、「クラブに行ってもいいからとにかく連絡してくれ」と懇願すると、「父親としてクラブに行くなんてそんなことをするのは馬鹿なことだから、それを連絡することはできない」と返された。それを聞いた私は、もう相手を阿呆としか思えず、ただただ呆然とするしかなかった。



写真②ザンビア大学を散歩中、自撮りに夢中になる夫と子ども（2017年4月撮影）

アフリカ版の金庫

ある晩、「ほら、金庫 (safe box) を手に入れたんだ。ウガンダに戻るまでにできるだけ自分でお金貯めようと思って」と言って、夫は鉄板を溶接してつくられた箱を見せてくれた。前々から金庫

が必要だと言っていたので、自宅で働くメイドを警戒しているのか、などと考えていたのだが、簡単に持ち運べそうなその箱を見てわかった。彼は自分自身を警戒しているのだ。「これだとそう簡単に開けられないだろ」と彼は言った。私は笑った。

「おい、なんで笑うんだよ」と、言いながら彼も笑う。「な、わかる？これがアフリカ版の金庫なんだ。これを開けるためにはお金を払って開けてもらわなきゃいけないんだ。」そうか、彼は自分自身をコントロールできないことをわかっているのだ。彼が必要なのは、私が思う金庫とは異なるのだ。お金を使いたいときに、トンカチでえいっと割ることのできる貯金箱とも違う。他人の手を煩わせてお金を払わないと開けられない金庫。だからちょっとした出来心では開けられない。彼は知っている、自分の心が自分自身では止められないことを。



写真③こじ開けた後のアフリカ版の金庫とクワチャ（ザンビア通貨）の最高額紙幣（2018年9月撮影）

その時ふと、私は「I am coming」の謎も少しばかり解けた気がした。彼の帰宅途中になんらかの誘いが来たとき、彼は自分自身を止められないのだ。彼は、帰宅する気はある。ただ、友人たちから声がかかったときにそれを受ける身体は、彼が帰宅しようという意味とは別に走り出す。よって彼にとってこれは自分の予定を変更したから私に連絡する、という話ではない。彼にとっては帰ろうという気持ちはあり続けたままで、友人の誘いによってしまっているのである。よって私には「I am coming」以上の言葉を伝えられない。そして「I am coming」に付随する行動と、矛盾する行動をとっている自分の状況を、現在進行形で打ち明けることは、私が想像するよりもずっと心苦しいことになるのだろう。

はじめて、「I am coming」と連絡があったあとに、再度連絡を受けたのは、彼が親しくしていた友人がマラリアで亡くなったときだった。その友人とは、あるショッピングモールの駐車場で出会い、そのショッピングモールに行くたびに話し込み、時には自宅まで車で送ってもらうなどしていた仲だった。家にも訪ね家族にもよく会っていたとのことで、夫は友人宅へ赴き、そこから私に電話をしてきた。帰宅予定の時間は言及せず、「I am coming」ではなく「ごめん、ただ、今は、ここにいたい気分なんだ」と言った。その数日前にザンビア人の別の知人を交通事故で亡くしていた夫は、

続けざまのこの不幸に「I am coming」の意志が
き消されてしまうほどのショックがあったようだ
った。夫は、多くの人びとのかかわりあいのな
かで生かされている。もしかしたら、彼は阿呆で
はないのかもしれない。もしかしたら、予定を、
気持ちを、自分でコントロールできると考えてい
る私のほうがおかしいのかもしれない。異文化理
解への道は、少しだけ痛みをともない、笑ったり
泣いたりしどろもどろしながら続いていく。

「I am coming」

今日は帰り道にどんな出来事が夫に訪れ、その
出来事に彼はどれぐらい振り回されるのだろう。
早く帰宅してねと思いつつ、この頃そんなふうに
考えをめぐらせてみている。

大門碧（だいもんみどり）

赤ちゃん連れに優しい都市カンパラ

母子の大冒険

ウガンダへ行く。10ヶ月の息子、生まれて以来の大冒険だ。初めてウガンダを訪れてから9年が経ち渡航は7回を数える私も、子連れでの滞在は初めて。「こんなに小さいのに連れて行くの?」「病気にでもなったらどうするつもり?」周囲からは心配する声ばかりが聞こえた。当時、夫は仕事で首都カンパラに滞在していた。息子が生まれて初めての正月を家族3人一緒に迎えたいという気持ちも強かったし、近い未来の子連れフィールドワークに向けて、「息子とのウガンダ」を体験しておきたかった。

私と息子が暮らす富山を出発してから24時間。ビクトリア湖の脇、エンテベ空港に到着した時の息子の顔はなかなか面白かった。「一体俺はどこに連れてこられたんだ。」とでも言いたしそうな困惑した表情だ(写真①)。

ウガンダを訪れたのは2017年のクリスマス。真冬の富山は大雪に見舞われ、日の照らない寒く暗い毎日が続く。対して、ウガンダは乾季。赤道直下の太陽が照りつけ、ビクトリア湖を撫でる風が魚の匂いと湿気を運んでくる。五感の全てを働かせて、自分がこれまで暮らしていた場所との違い

を感じ取ったようだった。

カンパラ郊外にある友人宅。近所には野菜や鶏を売るローカルマーケットや日用品を揃える小さなスーパー。裏手にはスラムが広がり、バーからは大音量の音楽が夜中まで鳴り響く。ウガンダ人でさえも敬遠する地域に立つ一軒家が、今回の滞在先だ。



写真①エンテベ空港で父親に抱っこされながら困惑した表情を見せる息子。

一歩外に出れば目に飛び込んでくるものが新しい(写真②)。ベビーカーもでこぼこの穴だらけの道を走る。コンクリートで舗装された道しか知らない息子にとっては、伝わる振動でさえも新しかっただろう。そして、私にとっても新発見の連続だった。9年目のウガンダには、これまでとは全く違う景色が広がっていた。



写真②滞在初日にローカルマーケットにて

おっぱいとオムツ

ウガンダの人口増加率は世界でもトップクラス。とにかく子どもが多い国だ。小さな子どもですら、弟妹の面倒を見ているおかげか、赤ちゃんの抱っこ仕方を知っている。息子を連れて家を一步出れば、道を歩いている子どもたちが「ベイビー、ベイビー」と寄ってくる。日本ではなかなか見られない光景だ。

カンバラは想像以上に赤ちゃん連れに優しい。それは、授乳室が町のいたるところにあるとか、オムツ替えがスムーズにできるようトイレの設備が整っているとか、そういうことではない。むしろその逆で、3週間のカンバラ滞在中、授乳室もオムツ替え台も一度も目にすることがなかった。では、いつどこでおっぱいをやってどのようにオムツを替えるのか？答えは「いつでもどこで

も好きなように」だ。

ウガンダの母親たちを見ていると、いつでもどこでも臆することなくおっぱいを出し、授乳している。仕事中や乗り合いバスに乗車中、周りに誰がいようとお構いなしで赤ちゃんに食事を与えている。外出する際は、授乳シーンが人目につかないよう赤ちゃんごと覆う授乳ケープを必ず携帯する私も、今回の滞在中にケープを使ったのは初日だけ。「ちょっと恥ずかしい」という感覚を捨て、ウガンダの母親たちに倣い、人前でもケープを使わずに授乳してみた。これがとても良かった。息子をケープで覆うと、まず暑いので嫌がるのだが、ケープなしだとごくごくおっぱいを飲んでくれる。私にとってもケープを装着する手間がかからず、おっぱいを飲む息子の顔を愛おしく眺めながら、なんとも言えない解放感を味わった。そして私はケープを使わずに外で授乳することを「オープン授乳」と名付け、カンバラ滞在中は「オープン授乳」を心から楽しんだ。

また、外国人観光客も多く訪れるビクトリア湖脇のレストランへ行った時のこと。数日間便秘だった息子が、大人たちが食事をしている最中に大量のウンチを出した。息子も気持ちが悪くて泣くし、今すぐにでも替えないとウンチがオムツから漏れ出してしまうという大惨事一步手前。10ヶ月の息子はまだ自立できず、オムツ替えには寝かせる必要がある。新しくできたショッピングモールの中だったので、もしかしたらトイレにオムツ替え

台があるかもしれないと見に行くも、やはりない。どこでオムツを替えようかとオムツとお尻ふき片手に困っていたら、店員が近づいてきてくれた。そして一言、「ここで替えたらいいじゃないか。」と店内の長椅子を指差した。

私たち夫婦は困惑した。ここはレストラン。近くのテーブルには食事の客が大勢いる中、臭いを放つ息子のウンチオムツを替えて本当にいいのだろうか…。そんな困惑をよそに店員は客のオーダーを取るために去っていく。そして、私たちはその場でオムツを替えることにした。周りの目が心配だったが、客は皆各々の食事を楽しんでおり、オムツを替えている私たちのことを気にしている人は1人もいないようだった。

無事オムツを替え終わり、息子もすっきりとした表情を見せる。そこでまた驚いたことがあった。オムツをビニール袋に入れ、バッグにしまおうとしていると今度は別の店員が近づいてきて、「私が捨てておいてあげるわよ。」と言うのだ。オムツを片手に息子に微笑みかけてくれる店員に、驚きとともに “Thank you.” と伝えた。

日本とウガンダの子育て事情

カンパラ滞在中、レストラン内でオムツを替えたのは一度や二度ではない。一度は、テラス席のテーブルの上で替えた。それも店員が「ここでどうぞ。」と声をかけてくれたのだ。衛生面やマナ

ーなど、確かに気になることはある。しかし、オープン授乳にしてもオムツ替えにしても、カンパラで外出すると「赤ちゃん第一」なのがよく分かる。

日本のように設備が整っていることは、それはそれで素晴らしいと思う。自由に使える町中の授乳室や、当たり前のようにトイレに設置されているオムツ替え台は、とても便利で清潔。私も何度利用したことだろう。しかし、設備が整っている分、「おっぱいをあげたければ授乳室へ。」「オムツを替えたければトイレへ。」と、赤ちゃんの大切なアクティビティであるおっぱいと排泄は、どうしても人目から遠ざけられる。設備が整い個室を使うことが当たり前となりつつある社会だからこそ、レストランで授乳をしていれば「トイレにでも行けばいいのに。」と別の客に囁かれたり、電車内で赤ちゃんのウンチの臭いが漏れようものなら顔をしかめられたりするのだろう。

一方ウガンダでは、赤ちゃんへの授乳と排泄は、それぞれが「当たり前」として受け入れられている。赤ちゃんはいつだっておっぱいを飲みたいし、1日に何度も排泄する。言葉が喋れないため、それらの欲求を泣いて訴える。それを嫌な顔をするどころか、手伝おうと近づいてきてくれる。日本で赤ちゃんを連れて外出すると気を使うことが多く、「すみません。」と何度も口にすることに慣れている自分がある。カンパラで息子が大きな声で泣いていることを理由に “Sorry.”

“Excuse us.” とただの一度でも口にしたらどうか。「ランチ 赤ちゃん連れ」と、赤ちゃん連れに優しいレストランを検索する必要もない。赤ちゃんはそこにいて当たり前で、町行く人はいつだって優しい。

ウガンダで子育てをしている日本人の友人たちは、口を揃えて「子育てしやすい。」と言う。核家族での子育てが主流となり、「ワンオペ育児」という言葉さえ生まれる日本とは違い、町行く人たちの優しさからも見て取れるように、子どもはみんなで育てるものという意識が根底にあるのだろう。

おせっかいおばちゃんたち

出会った頃は 20 代だったウガンダの友人たちももう 30 代半ば。私も含めもう立派なおばちゃんだ。友人たちにはもう何人も子どもがいて、ウガンダを訪れるたびに「産んでないのはワキコだけだ。」と言われ続けてきた。私が赤ちゃんを連れてウガンダに来ることを心待ちにしていた友人たちは、待ち合わせ場所で私と息子を見つけるなり「キャーッ！」と奇声をあげながらものすごい勢いで駆け寄ってくる。その勢いに圧倒され、また、体格の大きい友人の赤ちゃんたちにももみくちゃにされ、最初の 1 週間、息子は泣いてばかりいた。

泣いてばかりの息子を世話する私を前に、友人

たちはおせっかいおばちゃんへと変貌する。授乳の仕方から寝かせ方まで、矢継ぎ早にウガンダの常識を伝えてくるのだ。勢いよく次々と飛んでくる言葉たちには正直辟易することもある。「好きにさせてよ！」と叫びたくなることもたまにはあった。それでも勢いのある言葉とは裏腹に、彼女たちの優しさは、もっと深いところでじわじわと伝わってくる。

そして、赤ちゃんを大切に想うその気持ちは息子にも伝わるのだろう。友人たちの、大きくなった友人の子どもたちの、そして見知らぬ人たちの抱っこに徐々に慣れていく息子。表情に変化が表れ、徐々に笑顔を見せるようになった。

まだ見ぬウガンダへ

たった 10 ヶ月の息子をウガンダへ連れて行くことに、私だって不安がなかったわけではない。滞在序盤、目に飛び込んでくるもの全てが新しく、大きな瞳をキョロキョロと動かしていた息子。好奇心よりも不安が色濃く表れていたその瞳を見て、3 週間の滞在は息子にとって長かったかなとさえ感じた。そんな不安はよそに、ウガンダ人から注ぎ込まれるたっぷりの愛情を受け、息子はぐんぐんと成長した。滞在の終盤で見せるようになったキラキラの笑顔は、私たち夫婦にとって宝物となった（写真③）。

そして、息子の成長を通して、何度も訪れてい

るウガンダの新たな魅力に気がつくことができた。「赤ちゃん第一」のお出かけ事情も、ウガンダの母親たちのおせっかいとも言える愛情表現も、その一つだ。

1年の産休・育休を経て、2018年4月より復学した。博士論文執筆に向けて、これからウガンダでのフィールドワークを重ねていくことになる。初めてウガンダを訪れた時は10ヶ月だった息子も、今や1歳半を迎える。そこら中を走り回るようになった息子は、今度は私に何を気づかせてくれるのだろうか、次回のウガンダ滞在を今から心待ちにしている自分がある。

大平和希子（おおひらわきこ）



写真③友人に抱っこされ笑顔を見せる息子

歯茎でウシが草を食む ーケニア西部ビクトリア湖岸のルオの村でー

皆さんはウシのことをどのくらいご存じでしょうか？日本の特に都会で暮らしていると生きているウシに出会う機会が少なく、ウシといえばせいぜいスーパーでスライスされた肉がパックに入って並んでいるところか、「焼き肉屋さん」でタンやハツなどいろいろな部位に分かれて出てくる肉に出会うくらいなのではないでしょうか？牛肉は高価だし、健康に必ずしも良いばかりではないので毎日と食べるという人は少ないのではないのでしょうか。しかし、ウシに関連した食品はほぼ毎日食べている人がほとんどだと思われます。たとえば、ヨーグルトやチーズ、生クリームがたっぷり塗られたケーキ、バターがたっぷり入った焼き菓子、プリン、アイスクリーム等々あらゆる乳製品を含めると多くの食品にウシを由来とした成分が含まれています。したがって、私たちはウシの存在に大きく支えられて日常生活を営んでいるといえるでしょう。にもかかわらず、生きている牛にほとんど接することのない生活を営んでいる多くの日本人にとって、この動物が一体どういう生態を持つ動物であるのなかなか知る機会は少ないのが現状でしょう。

ウシは哺乳綱鯨偶蹄目ウシ亜目ウシ科に分類される動物で、ウシ目の動物は、消化しにくい繊維分を消化するために、本来の胃（第4胃）のほかに、食道から第1～第3の胃を分化させ、計4つの胃をもっています。

ウシには上の前歯がなく、そのかわり歯茎が非常に丈夫にできており、草を食べるときは舌で草を巻き込むように引っ張って、上歯茎と下歯で噛み切ります。日本の大学の畜産学を学んだ私は、ウシが舌で巻き取れる長さに草を生育させることがウシの採食行動に適した草地の管理の仕方であると教えられました。



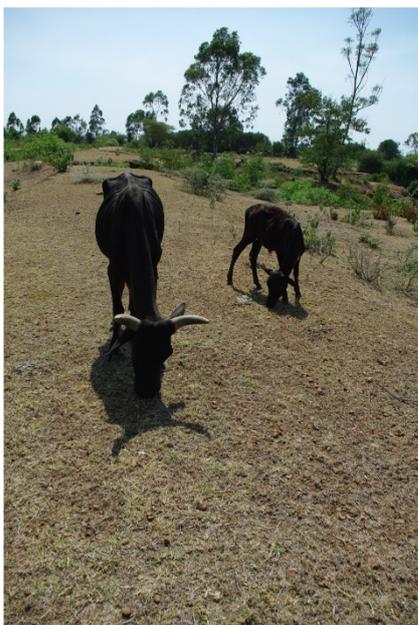
写真①歯茎で草を食むウシ

ケニア西部ビクトリア湖岸のルオの村

ビクトリア湖はアフリカ最大の湖で、ケニアの西部に位置し、ケニアの他にタンザニアやウガン

ダとも面しています。ビクトリア湖の東岸に広がる標高約 1000m ほどの平原はルオランドとも呼ばれ、ナイロト系の牧畜民を起源とするルオの人々の居住地になっており、人々は牧畜と漁労、トウモロコシなどを栽培する農耕を中心とした暮らしを営んでいます。

ルオの人々が飼っているウシは、ほとんど草が生育していない状態の草地で歯茎を使って草をおしり取って草を食べていました(写真①)。次の写真(写真②)は一見してすごく乾燥しているのが分かっていただけだと思います。乾季の終わりで緑の草がほとんどない時期のものです。厳しい乾季が2、3年に一度みられるのですが、そういった年は村のウシが次々と死んでいました。



写真②乾季末の牧草地

家畜が作り出す風景

雨季には草は緑になりますが(写真③)、草は一年を通じて短いままに保たれます。

この草はこの地域のどこでも見られるイネ科の草本ですが、ウシやヤギ、ヒツジなどの家畜が食べないと実は1m以上に伸びます(写真④)。

この草がこのような状態になるのは家畜が入り込めないよう囲われた一部の場所だけで、村の中はたとえ家屋の周りでも草は短く写真⑤のような風が広がっています。



写真③雨季の牧草地



写真④家畜が入れない場所の草

生きるために食べ続ける

ウシは成獣で一日に乾燥した重さで約 10 kg の草を食べるといわれています。この地域のウシはこの量を食べるのに日中ほぼ草を飲み続けます。朝、7 頃ごろ牛囲いから出されたウシは早速採食を始めます。その後、10 時頃まで家屋の周りの草を食むのですが、その後、放牧地に移動させられ、夕方 5 時から 6 時ごろまで放牧地で過ごします。



写真⑤ヒツジの放牧風景

その間、休憩をほとんどせず草を食べ続けます。日本の放牧地でのウシの行動を観察したことがあるのですが、十分な草がある場合ウシは昼過ぎにはひざを折り、座って反芻といわれる行動を一定時間とります。第一胃の草を吐き戻し、口を横に動かし草をすりつぶし、さらに消化しやすくしてから再び飲み込むのです。

でも、この調査地のウシは日中座り込んで反芻するという行動をほとんどとりませんでした。ウシは、牛囲いから出て戻されるまでの間、まさに、歯茎で草を飲み続け、できる限りの草を腹の中にいれようと努めていました。

そんな日常が続く中でも、メス牛はミルクをだし、子ウシに与え、我々人間はそのおこぼれに預かった牛乳で作ったミルクティーを毎朝いただく。この地域の人々にとっても砂糖たっぷりの紅茶に入れるミルクは貴重な栄養源の一つになっていたと思われる。

山根裕子（やまねゆうこ）

男しかいない街“不夜城”でフィールドワーク

「ここは、男しかいない街だ。この街で今、お前はただ一人の女だ」

これは、私がタンザニアでのフィールドワーク中に言われた言葉です。「えっ！タンザニアには男性しか住んでいない街があるのか」と驚かれたかもしれませんが、そういうわけではありません。そんな街に住みたいと思う男性も、まずほとんどいないでしょう。

タンザニアの代表的水産物ダガー

私の調査地はタンザニアのタンガニカ湖とインド洋島嶼地域ザンジバルで、調査対象はダガー漁という漁業です。ダガーとはスワヒリ語で「小魚・雑魚」を表す単語で、小さい魚の総称なので特定の魚種の名前ではありません。タンザニアにはビクトリア湖、タンガニカ湖、ニャサ湖（マラウイ湖）、インド洋と水域がたくさんあり、いずれの地域でも漁業・水産業が盛んです。上記の各水域ではいずれもダガーと呼ばれるけれど種類の異なる小魚が漁獲され、干物に加工されて国内外に流通しています。タンザニアや周辺国の人々

にとって、小魚の干物である乾燥ダガーは安価で重要なタンパク源となっています。



図①タンザニア概略図

ダガー漁は1ヶ月のうち、満月前後の10日ほどは行われず、月明かりの少ない暗い夜に集魚灯を用いて行われます。ダガーがどのように獲られ、どのように売られ、そしてどのように加工されて各地へ出荷されるのか、その一連の様子を知りたいと思った私は、まずは獲るところを見に行かねばと、夜のダガー漁船に乗せてもらう交渉をしました。断られるかと思いきや、タンガニカ湖でもザンジバルでも、漁師さんたちは快く乗船させてくれました。

男しかない街の出現

漁期になると夜のタンガニカ湖やインド洋上には、たくさんの集魚灯を灯した漁船が浮かんでおり、さながら1つの街を形成しているかのように見えます。どちらの水域でも、漁師さんたちは午後4時～5時頃に出港し、漁場まで船外機付きの木造ボートで行きます。漁場に着くのはだいたい午後8時頃。漁場に着くと、漁船は集魚灯を灯し、ダガーが光に集まってくるのを待ちます。集魚灯にはブレッシャーランプと呼ばれる灯油を用いた加圧式ランタンが長年用いられてきましたが、近年タンガニカ湖ではLED集魚灯が、インド洋ではメタルハライド灯と呼ばれる新しい集魚灯が導入されています。



写真①集魚灯を灯す漁師（タンガニカ湖）

集魚灯の種類は変われど、また、両地域で漁法の違いはあれど、夜の水面を明るく照らし、光に集まる習性のあるダガーを獲ることに変わりはありません。午後8時頃から集魚灯を灯し、人々が寝静まる深夜2時～3時頃までダガーが集まるのを待ちます。たくさんのいさり火が輝くその光景はまさに不夜城。夜にだけ現れる幻の街、しかも男しかない街なのです。

男しかない街での心配事

そんな男しかない不夜城ダガー漁船に乗船するにあたり、タンガニカ湖畔でもザンジバルでも女性達からとても心配されました。男ばかりの漁船に女一人で乗り込むなんて危険すぎる、何をされるかわからない。嵐が来て船が転覆したらどうするの？海の上では誰も助けてくれないよ。などなど様々な不安要素を列挙されましたが、私は大して心配していませんでした。女性達のそんな心配をよそに私が心配していたのは、夜の海は寒いだろうなあ、船酔いするだろうなあ、あるいは、もし漁船上でトイレに行きたくなったらどうしよう、そんな超現実的な問題でした。何しろ夕方5時頃の出港から、翌朝7時頃の漁村到着まで、12時間を超える長旅になるのですから。車ですら酔うこともあるほど乗り物酔いしやすい私にとっては、船酔いは当然備えるべき問題で、そ

もそもタンガニカ湖畔の調査地やダルエスサラームからザンジバルへの移動もボートやフェリーなので、酔い止めはいつでも携行しています。寒さ対策としては、水濡れ対策を兼ねて登山用ヤッケの上下を持ち、フリースや靴下もリュックに忍ばせておきました。

タンザニアは熱帯の国とはいえ、季節によっては夜には気温が下がり、海の上でなくとも長袖シャツやフリースが欲しくなる日もあります。特に日本では真夏の8月は、南半球のタンザニアでは寒い時期になりますので、8月の調査時には長袖は必須です。私がダガー漁船に乗船したのは3月で、比較的タンザニアでは暑い時期ではありましたが、夜間には昼間よりは気温が下がりますし、海の上では冷たい夜風に当たりっぱなしになるので、防寒対策は必須です。トイレに関しては本当にそういう事態になったらどうしよう、と思いつつも多分大丈夫だろうと楽観的に考えていました。幸い、実際にどちらの調査地でも漁船上でトイレに行きたくなる事態は発生しませんでした。夜の漁船上は寒いので喉はそんなに乾かないし、トイレに行きたくなったら困るので、水分は出来るだけ摂らないようにしていました。また、寒いとトイレに行きたくなるので、持って行ったフリースや登山用ヤッケ、靴下で寒さを感じないように、むしろ暑いくらいに着込んでいたのも功を奏したのでしょう。

不夜城が静かに消える時

午前2時半頃、集魚灯にダガーが集まってきたのを確かめると、漁師たちは水揚げの準備を始めます。ダガーを集めたいときには出来るだけ水面を明るく照らし、漁船から離れた場所からもたくさんダガーを集めようとはしますが、水揚げ準備に入る時には灯りを徐々に減らして暗くしていきます。それは船を取り囲むように集まってきていたダガーの群れの環を縮めるためです。大きな環で、分散している状態のダガーを、小さな灯りにすることで船の近くにキュッと集めるためです。



写真②集魚灯を灯した一人乗りの灯船とそれを操る漁師（ザンジバル）

1つずつランプにカバーをかけたたり、消灯したりして灯りを減らします。大きな母船から、集魚灯を灯してダガーを集めるための灯船が別に出され、離れたところで集魚するザンジバルの大型漁

船の漁法では、灯船を操作する漁師が灯りを減らして輪を小さくし、母船が近づいていって水揚げをします。こうして、漁の終盤にさしかかると、タンガニカ湖でもザンジバルの海でも夜にだけ現れる街の灯りは一つまた一つと消え始めます。



写真③タモを操り網から少しずつダガーを水揚げする（ザンジバル）



写真④母船へのダガーの水揚げの様子（ザンジバル）

機械化されている日本の漁業の水揚げとは違い、全てが人力です。小さくなった灯りの元、漁師たちは声をかけ合いながら網を引きます。私が乗船した日は、タンガニカ湖では残念ながら漁果は小さかったですが、ザンジバルではまずまずの漁果でした。

男しかない街からの帰還

水揚げと網や漁具の撤収が終わる頃には午前5時頃になり、少しずつ空が白んできます。日によってまちまちですが、だいたい午前7時~9時の間に水揚げ地の浜に到着し、そこで待ち受けている仲買人たちに水揚げされたダガーは次々と販売されていきます。

私が男しかない街から無事生還したのを見て、人々は一様に安堵の表情で迎えてくれました。無事帰り着いた後で漁師たちに、出港前に村の女性達から、男ばかりの漁船では何されるかわからないと心配されていたことを話すと、彼らは皆とても憤っていました。

「誰がそんな心配をしていたんだ。俺たちはそんな無法者じゃない！安全だっただろう？ 女たちに言ってやってくれ、俺たちは紳士的な漁師だと」

私はその言葉通り、実際にいかに漁師たちが親切だったか、彼らの漁の姿は勇ましかったかを、調査中に撮影した写真や動画も見せながら伝えました。



写真⑤20L バケツでダガーを漁船から運び出す(ザンジバル)



写真⑥大漁 (ザンジバル)

また、私は帰ってきた後で彼らに「本当は漁船上でトイレに行きたくなかったらどうしようって心配してたんだ」と話すと、「俺たちも一番それを心配してたんだ。それで、もしそういう事態になったらどこでどういう風に用を足してもらうか、色々考えてたんだよ」と明かしてくれました。やはりお互い心配しているのは同じことだったのです。男しかない街でのフィールドワークでは、なかなか言葉に出して相談しにくい問題もあるわけですが、気持ちは皆同じ、事故やトラブルなく、そしてお互いに気持ちよく過ごせるために色々と腐心していたのです。そして、私が彼らを信頼して乗船し、トラブルなく過ごせたことで、漁師たちとの信頼関係はさらに強固なものにすることができました。おかげで、その後、ザンジバルやタンガニイカ湖畔をフィールドワークで訪れるたびに「次はいつ一緒に漁に行く？今夜また一緒に行こうぜ！写真撮ってくれよ！」と声をかけてもらえるようになりました。

新しい集魚灯での操業の様子を見るために、もう一度男しかない街に出かけないといけないなあと考えています。

藤本麻里子 (ふじもとまりこ)

アフリカの果物のお話 ～マラウイ編～

果物の樹は自分たちの手で植えて、育てて、収穫した果実を食べるもの。私たち日本人はそう思いがちです。アフリカでは、果物は実のなる樹に登れば、いつでも自由に食べられる甘い「おやつ」。そして、伝統的に利用されてきたフリカ在来の果樹は、森の中に隠れています。アフリカの大地で大きく育った果樹の枝と葉は、乾燥した「風」から家を守り、地中深く伸びた樹の根は、畑の「土」を守ってくれる大事な存在です。さらに、アフリカの果物は、お金のなる樹で大事な換金作物であるのと同時に、アフリカの子どもたちの貴重な「おやつ」であり、不足しがちなビタミン類の欠乏を補っています。

アフリカ大陸に渡ってきた外国育ちの果物のタネは、生まれ育った土地から「人」の移動によって運ばれてきました。そして、アフリカの気候と風土に合ったものだけが生き残ることが出来たようです。

今回はその中から、私が国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊でボランティアとして2年間（2006年～2008年）過ごし、その後、博士論文の調査（2010年～2013年）を行ったアフリカ東南部に位置するマラウイのミカンとモモの2つの事例

をご紹介します。

事例1 ムワンザ県のミカン栽培

マラウイの南部州のムワンザ（Mwanza）県はミカンの産地として有名です。博士論文の調査地としてムワンザ県を選んだ理由は、2008年6月に初めて訪問した際に、庭先に植えられたミカンの本数の多さに驚いたからです。



写真①ムワンザ県の青空ミカン市場で価格交渉する仲買人たち

「どうしてムワンザ県だけで、こんなにミカン栽培が普及したのだろうか？」その謎を解きたくて、ミカン農家を対象に聞き取り調査を行いました。

庭先に植えられたミカンの樹にはそれぞれの持ち主と歴史があって面白いので、少し紹介します。



写真②ミカンを食べようとする子ども

切に育ててきた人。おばあちゃんの土地に植えられたミカンを果樹ごと相続したラッキーな人。奥さんのために南アフリカからの出稼ぎから戻ってきて、引っ越した新しい土地に一本ずつミカンを植え続けた優しい旦那さん。

ムワンザ県のミカンの樹には1本ずつにそれぞれのストーリーがあって、聞かたびに驚かされます。そんな歴史のあるミカンの樹に子どもたちは無邪気に登って、今日も美味しい「おやつ」を狙っているのです。



写真③ムワンザ県の青空市場に集まる輸出仲買人とミカン農家



写真④(左)1970年代初頭に植えられた樹齢約50年のミカンの樹の前で家族写真

教会の果樹園からもらってきたお気に入りのミカンの樹からタネを植えた人。タバコ農園の跡地にこっそり植えたミカン「神様の樹」として大



写真⑤（右）井戸の近くにある樹の前に集まるムワンザ県の子どもたち

事例2 デッサ県のモモ栽培

マラウイ中部州のデッサ(Dedza)県を中心とした山間部には、温帯果樹のモモが育つ冷涼な地域があります。私はJICAの青年海外協力隊として、マラウイ食糧安全保障省のデッサ県農業開発事務所(作物部門)に2年間(2006年～2008年)赴任し、果樹担当として農業普及員と一緒に果樹栽培の普及活動に携わりました。果樹農家やデッサ県でも深刻だったエイズで両親を亡くした孤児たちの支援グループなどを対象に活動したので、その一部をご紹介します。

マラウイで栽培されているモモは濃いピンク色の花が咲き、梅のような小さな果実が収穫できます。そして、マラウイに外国生まれのモモを持ち

込んだのは、キリスト教の宣教師であるヨーロッパ人と言われています。つまり、一世紀近く前に持ち込まれたこととなります。

そのため、村の中には古いモモの樹が村の広場を陣取っていることもあるくらいです。いつ誰が植えたのか、村人にも分からないくらい古いモモの樹もあって「きっとこのモモの樹は、村の歴史を全部知っているのだからな。」と古いモモの樹に出会う度に思っていました。

そして、デッサ県の子どもたちは、モモの果実が熟すのを「今か今か」と待っています。学校からの帰り道、甘くなるのを待ちきれなくて、カリカリと小梅のようにモモの実をかじりながら、歩く子たちを見かけたりして。



写真⑥大好きなモモに樹を植える前に、頑張って掘った穴に入って喜ぶ様子



写真⑦「モモのためなら水やりだって頑張っちゃうよ」と張り切る子どもたち



写真⑨1人2本ずつ準備が出来きて、嬉しそうにモモの苗を持ち帰る子どもたち



写真⑧植え付け準備万端にして、モモの接ぎ木苗を受け取りに来た村人と子どもたち

デッサ県の子どもたちは、モモの果実が大好きなので、私は同僚の農業普及員とエイズ孤児支援グループのメンバーと一緒に大切に育てた改良品種のモモの苗木をエイズ孤児につき、2本ずつ配布することにしました。

2007年にはまだ少女だった子が母親になって、「うちの子、モモが大好きなのよ。実がなる季節になると毎年あなたのことを思い出すわ。」こんな嬉しい言葉をもらえるのも、今まで苦労して、アフリカの大地で果樹を植えてきたから。

これからも私が植えた果樹に毎年たくさんの果実が実って、アフリカの子どもたちを笑顔に出来ますように。

福田聖子（ふくだせいこ）



写真⑩雨期後には予想以上に大きく成長していた
モモの樹



写真⑪さらに3年後、大人の背丈よりも成長し
たモモの樹



写真⑫若い母親にモモの果実をもらって泣き止ん
だ子ども

赤土の森で出会った孤高の巨木たち

赤い土と緑の葉っぱ

カメルーンは、アフリカ諸国の中では小さな国土の中に、ステップ気候、サバナ気候、熱帯雨林気候と、北から南にかけて幅広い気候帯をもつことから、「アフリカの縮図」という異名をもつ国である。国旗のトリコロールは、森（緑）、太陽（黄色）、統一（赤）の象徴だというのが、赤だけは意外だった。この国を訪れてまず目に飛び込んでくる鮮やかな赤は、大地の色だったからだ。

カメルーンの赤土は粘土質なのに柔らかいため、植物がしっかりと根を張りやすい。この根を通して、植物たちは成長に必要な養分のほとんどを土から受け取っている。しかし、カメルーンの赤土は養分がひどく乏しいため、植物たちは自ら吸い上げた養分をとてとても大事にする。彼らは、地表付近に細かい根を張り巡らせることで、一度は落葉・落枝（リター）として手放した養分を効率よく回収している。この“自給自足”とも言える養分サイクルの実態を詳しく知るために、赤土の森に、リター捕集装置（リタートラップ）と、土壌水中の養分をトラップするイオン吸着樹脂を仕掛けたのが、2009年1月のことだった。調査地は東

部州の南東部、中央アフリカ共和国およびコンゴとの国境付近にあり、この地域では、バントゥー系農耕民族バクエレと、狩猟採取民バカ・ピグミーが熱帯雨林資源を共有しながら、隣り合って暮らしていた。彼らの社会構造や生態系とのかかわり等を研究するために精力的に調査を行っていた、京都大学アフリカ研究センター（アフ研）の皆さまには、渡航準備から現地滞在まで大変お世話になった。



写真①カメルーンの赤土

いざ調査地へ

同年5月には捕集したリターを回収するため、再渡航を行った。初めての単独渡航だが、仏語堪能な戸田美佳子さんが現地合流してくれるのが心強い。当時アフリカの障がい者の生活基盤を研究するためにカメルーンに長期滞在していた。首都ヤウンデから目的地のNdongo村までの直線距離はおよそ700km。日本の高速道路であれば1日ですむ距離だが、4日を費やした。当時のカメルーンではアスファルトの舗装道路が珍しかった。ましてや、この時期のカメルーンは雨季の真っ只中。赤土がむき出しの道路は雨を吸うほど粘り気を増し、伐採木を運び去る大型トラックが走るほど無残に削られていく。やがて、赤い大きな水たまりが道のあちこちに出現し、これに足を取られた巨大な材木トラックが数台、派手に横転していた。『スピードだし過ぎるからだよ！』トラックに積まれていた直径100cmを超える巨木が道路上に横倒しになると、我々だけでは動かすことができない。周辺に住む村人10名ほどで車が通れるスペースを作ってくれたので、1000フラン（日本円で約200円）のお礼を渡す。通過後、何とは無く後ろを振り返ると、空けたはずのスペースを、よいしょよいしょと再び塞ぐ村人の姿。なるほど！臨時収入のチャンスを逃さぬたくましさに感心する。

運転手のパトリスは、この悪路にうまく対処してくれたが歩みは遅く、調査地の1つMondindim村に着いた頃には首都ヤウンデを出てから2日半経過していた。一旦この村を素通りし、もう1日半かけてさらに奥地にあるもう一つの調査地Ndongo村に向かう。リターの回収をお願いしているチャーリー氏宅に滞在させてもらう。彼はリターを月毎に回収し大切に保管してくれていた。僕がいない間も誠実に対応してくれているのが有難い。後はイオン交換樹脂を掘り起こせば万事OKだ。チャーリーの奥さんが作ってくれたクスクスを食べ、蚊帳付きのベッドで眠る。どうかハマダラ蚊に刺されませんように……。この奥地で熱帯熱マラリアに感染したら大変だ。

シロアリの恐怖

一泊し、翌朝樹脂回収に向かう。森の中にはバカ・ピグミーが仕掛けた罠や、マッシュルームのようなシロアリヅカなどがあり、見ている飽きない。1時間ほど歩いたところで調査地点に到着する。早速樹脂を掘り起こしてみると、おかしい、何かの動く気配が……。『オー、なんてこった！！』樹脂バッグの中にシロアリが侵入し、巣をつくっていた！！バッグに空いた穴から、わらわらとシロアリが湧き出してくる。『まさかMondindimも……？』焦る気持ちを抑えながらチャーリー

たちにお別れを告げ、来た道に戻る。Mondindim村に着くとすぐ調査地点に向かい、樹脂バッグを掘り起こすと、こちらでも見事なシロアリの巣が出来上がっていた。なるほど、バッグを埋めるために一度掘り返しているから、シロアリは移動しやすいのか。土が所々に硬化して黒くなっているのはシロアリが巣作りのために何か分泌しているのかな。観察してみるとなかなか面白いぞ・・・いや違う！そうじゃない！この研究はリターの情報と樹脂の情報の2つが揃って初めて意味のあるものになる。終わった・・・。

ケセラセラだよ人生は

Mondindim村で聞き取り調査を続ける戸田さんを村に残し、パトリスと2人首都ヤウンデに戻る。無事回収できたリターと、シロアリに食い破られた樹脂の残骸を持って。心も体も疲れ果て何もする気が起きないが、腹は減る。ホテルの近くで一番美味しい中華料理屋に行き、麻婆豆腐とカシューナッツ炒めでお腹を満足させたあと、ふと今後の人生に思いを馳せる。・・・指導教官がポストドクとして雇ってくれている間に、新しい職を見つけなければ・・・。



写真②シロアリが巣作りした樹脂バッグの残骸

そのためにはカメルーンの研究で成果を出さねば・・・。それなのに、実験の肝である樹脂は全滅・・・。将来への不安が急に押し寄せてきた。

そんな時、絶妙なタイミングで、「Que sera, sera
～♪Whatever will be, will be～♪（なるよにならわよ。だから心配しないで）」とドリス・デイの美しい歌声が店内に響いた。日本で聴いた時には特に感情が動かなかつたが、その時は魂が震えるほど感動した。心に力が戻ってくるのを実感する。そうだ、実験が失敗したということは、ある意味僕は自由だ！帰国までにカメルーンでできることを思いっきり楽しもう。



写真③回収したリター。右端が“天狗の団扇”

ホテルに戻り、まずは回収した葉っぱをベランダに並べ観察してみる。1月、2月、3月・・・細長い葉、丸くて大きな葉、みんな違ってみんな良いではないか。一通り観察する中で、ひととき特徴的な葉の存在に気付く。鞍馬天狗が持つ団扇のような形をしたその葉は、ほぼ全ての回収袋に入

っていて、枚数も明らかに一番多かった。『この葉はどんな木から落ちてきたんだろう・・・？』これまでは、集めた葉を実験室で溶かして養分量を調べることだけを考えていたが、段々と森の木そのものに興味が湧いてきた。

その日の夜、ヤウンデ大学で植物学を学ぶエバリスト氏とアポを取り、回収した葉っぱを見てもらう。すると、「これ（天狗の団扇）はアヨウスの葉だよ。カメルーンの熱帯雨林では割と一般的。他の葉は～」とほぼ全ての樹木を言い当ててくれるではないか。アヨウスとはどんな木なのか、彼と森に入り、植生調査をすると面白そうだぞ。その場の勢いに任せて誘ってみると、何と快くOKしてくれた。よし行くぞ～！

再び赤土の森へ！

再び2日半かけて Mondindim 村に戻る。村で調査を続けていた戸田さんには「何で戻ってきたの！？」と驚かれた。この村でリター回収をお願いしているアブドゥル氏宅に泊めてもらった翌日、さっそく調査地周辺で、植生調査を開始する。GPSで位置を確認しながら40メートル×40メートルの正方形の内側にある樹木の名前と胸の高さの直径（胸高直径）を調べていく。エバリスト氏は、「この木は幹の内側が赤い、この木は樹液が白くて粘性が高い、だから～」と、樹木の見分け方も

教えてくれるので勉強になる。調査の結果、40メートル×40メートルの内側にあった樹木の本数は全部で82本。胸高直径は平均で29.6±31.6cm、最小7cmから最大200cmまで実に幅広い。まず驚いたのは、その種類の豊富さだ。植物種は全40種類（分類不明の3本含む）で、1本だけの植物が16種もあった。今更ながら熱帯雨林の多様性を実感する。

この40種の中で、特に印象に残ったのは2つの樹種であった。1つ目は、本数が8本と最も多かったマカランガ（別名パラソルツリー）だ。マカランガは、パイオニア種の一つで、倒木などで生じた林間ギャップで固まって急成長し、樹冠を広げるスペースを確保する。急成長の代償として木質が柔らかいため、20年ほどで倒伏してしまう。そのせいか、マカランガの胸高直径は平均20cmとかなり小さめだった。ウサギとカメの童謡でいえば、この木はウサギだな……。もう1つは、本数は3本と少なめだが、他の樹種と比べて飛び抜けて大きい。人の背丈を超える板根が発達しているため、胸高直径はもはや実測不能、目視でおよそ200cmと検討を付けた。これが、天狗の団扇の持ち主、アヨウスだった。巨木とはいえ、たった3本！？落ち葉の数は木の本数を表さない。高木層を形成する巨木たちが森の養分循環を支える大きな柱となっているのか！土ばかり見ていた不器用な人間が、回りくどい方法で熱帯雨林の階層構

造を実感した瞬間だった。アヨウスもパイオニア種に分類されるため、かつては複数が固まって成長したはずだ。しかし、50年以上は生きているだろう3本のアヨウスたちは、赤土の森で孤高の存在感を放っていた。

孤高の巨木が訴えるもの

今、アヨウスは絶滅の危機にある。輸出用材木として好まれ、伐採圧が加速しているのだ。思えばあの横転したトラックがぶちまけた巨木たちも、アヨウスだったのかもしれない。救いは、村人がアヨウスの伐採を望まないことだ。商品作物カカオが必要とする日陰を作るために貴重なため、焼畑の際にも敢えて伐り残している。しかし、日陰を必要としない新品種のカカオ栽培が東部州の州都ベルトゥアでは普及しつつあり、これが村まで波及すると、もはや伐り残すインセンティブも無くなってしまう。そうなれば、アヨウスの伐採は更に加速するだろう。この木を守りたい。いつか、アヨウスが生態系にとってどれだけ重要なのか、それを明らかにするような研究がしたいと強く思った。この思いを忘れぬよう、現職に就く際にメールアドレスにアヨウスの学名 *triplochiton* を刻んだ。不必要に長いメールアドレスと不評を買いながらも、使い続けている。

中尾淳（なかおあつし）

ヤロさんとギレさんの仕立店と常連客マルティン

ブルキナファソでは、お客さんが布を仕立屋の店に持ち込み服をあつらえるということが日常的に行われている。まちを歩けば容易に仕立屋の店を見つけることができる。2006年から2007年に南西部の都市ボボジュラソで行った衣服の生産に関するフィールドワーク中に、挨拶だけを含めれば、200軒ほどの店を訪ねた。多くは親方と徒弟数名という小さな店で、客が布をもって来店したら、希望のデザインを聞き、寸法を測って衣服を制作するという営業形態だった。

一部の店には看板が美しく掲げられ、中にはショーウィンドウがあるところもあり、店の主人がつくった服が飾られていたりしていたが、多くの店はとてもシンプルだった。看板はないか、あっても色あせていたりして目立たないものが多く、店の外に出されたアイロンなどが仕立屋であることの目印になる。でも、看板が色あせているからといってその店の商売が廃れているということでもない。30軒ほどの店には繰り返し通ったが、外から見て何の店かわからなくても、中を覗くと裁断を待つ布が山と積まれているところもある。人通りの少ない目立たない場所にあっても、中に入ると活気に満ち、お客さんが次々やってくる。

仕立屋さんたちに話を聞くと、人目に付きやすい場所で営業すればお客さんがたくさん来る、と言いつつ、そのくせ看板など目立つためのツールは必ずしも重視されていない様子だった。広告を打つなども一般的ではなく、では何が大事かといえば、何より人と人とのつながりであるという。一度注文したお客が家族や友人を連れてきたり、あるいは仕立てた服を見た誰かが興味をもって、服の作り手である仕立屋の店で注文したりする。この積み重ねが、店の繁盛のために大事なのだそう。

ヤロさんとギレさんの店

独立11年目のヤロさんとギレさんという友人同士の2人の男性が営む店も、ボボジュラソの一般的な仕立屋さんという雰囲気だ。親方2人のほかに徒弟が4人働く、女性用の衣服が専門の店。彼らの店は大きな通りに面しているが、看板もなく、通りすがりの人には仕立屋だとはわからない。看板がない理由を尋ねてみたが、「お金がかかるから」ということだった。入り口から中をのぞくと、2つの作業台の前にそれぞれヤロさんとギレさんが立ち、裁断やアイロンがけなどの作業に忙しい。2人の作業台と板で仕切られた奥に縫製用ミシンが5台置かれていて、徒弟たちが作業をしている。2007年の年が明けてから約40日間に、ヤ

ロさんとギレさんの店には16人のお客が来店し、40点の衣服を注文した。この期間は、クリスマス（2006年12月25日）、犠牲祭（12月31日）、大晦日（12月31日）といった、人々が服を新調する機会が続いた直後で、受注は少な目だ。

16人のうちの1人の客Aさんは、この期間中に初めて彼らの店で注文した。彼女に店を教えたのは、数年来彼らのところで注文している友人Bさんだ。ヤロさんとギレさんは店をこれまでに2度移転し、現在3つ目の仕事場だが、このBさんは、2軒目の店から通っている。このBさんも、また別の女性の紹介でヤロさんたちを知ったそうだ。Bさんの家族の中では4～5人が、ヤロさん、ギレさんの店に通っている。

別の客Cさんは、1軒目の店からの客だ。Cさんの妹Dさんがこの客で、Dさんに連れられてやってきたのがきっかけだった。妹Dさんは、ある女性組合に入っており、そこの友人の紹介でやってきたそうだ。この組合には20人ほどの女性が参加していて、彼女たちが結婚式などのためおそろいの服を仕立てるとき、こぞってヤロさんたちに注文していた時期もあった。妹Dさんはヤロさんたちと親しくなったこともあり（一時期はヤロさんと恋人同士になったようだが、のちにそれぞれ別の人と結婚した）、当時たくさん客を紹介してくれたという。Dさんは今も注文してくれる常

連客だ。

市内のほかの仕立屋さんから聞いた話と同様、ヤロさんとギレさんの店のお客も、知り合い、そのまた知り合いと、彼らや彼らの仕事を知る人に紹介されて店にやってきた人たちだ。16人のお客が最初に来店したきっかけをまとめると、家族や友人からの紹介が12人、本人が、近所づきあいなどでヤロさん、ギレさんいずれかと知り合い、客になった人が3人ということだった（1名は不明）。このようなお客さんたちが、彼らの仕事を気に入ればその後も続けて通ってくれるし、家族や友人、知り合いに店を紹介してくれることもある。ヤロさんとギレさんは、過去2度店を移転した際、お客さんが次の店にも来てくれるよう、十分気を付けたと話していた。いずれの移転の際にも、まずギレさんが新しい店に移り、ヤロさんは1年近く元の店にとどまって、客に移転先を知らせたそうだ。このようにして、せっかく自分たちの仕事を気に入ってくれたお客さんが、自分たちの店を見失ってしまわないようにしたのだという。

常連客マルティン

この16人のお客の中に、とびきりたくさん注文したお客がいた。受注総数40点のうち、なんと16点を注文したマルティンだ。記録期間中、4回も来店していた。ヤロさん、ギレさんも、「彼

女はとっても親切な商人」という。お客側からも話が聞きたくて、ヤロさんとギレさんの許可を得て、マルティンに連絡を取ってみることにした。

マルティンは、ヤロさんとギレさんの1軒目の店からの客だ。調査当時40代半ばで、2001年に夫を亡くし、娘3人と暮らしていた。友人の着ている服を見て気に入り、その服を仕立てた店を紹介してもらったところ、それがヤロさんとギレさんの店だった。以来現在まで、自分の服はすべて彼らの店で仕立てている。マルティンの自宅から、現在のヤロさんとギレさんの店は遠く、タクシーを使わなければならないが、彼らの仕事をとても気に入っている彼女は、「同じ服を頼んでも、うまくできない仕立屋もいるし、もっとかわいくする仕立屋もいる。どこか別のところで気に入った服をみつけても、必ず彼らのところで注文するわ」と断言する。

調査当時マルティンは、プリント更紗「パーニュ」やアクセサリーの販売で生計を立てていた。ボボジュラソの中央市場でパーニュ等を仕入れ、近隣の小さな村の定期市で販売する。出かけているのは、ボボジュラソから15km離れた故郷のY村と、その近隣の3村S、W、Gである。日曜、月曜は泊りがけでS村とW村へ、水曜はG村、金曜はY村へ、それぞれ週に1回開催される市場の日に合わせて日帰りで行く。それぞれの村の市場で、自作の小屋で品物を販売する。パーニュ

は、1m×2m程度の大きさで1枚と数えられ、3枚組で販売されるが、ボボジュラソで3枚あたり3,500CFAフラン(約700円)で購入し、これを3枚4,000CFAフラン(約800円)、客の購入量が多ければ3枚3,750CFAフラン(約750円)で売る。Y村、S村、W村は市場が比較的大きく、一日に20万~25万CFAフラン(約4万~5万円)売り上げることもある。G村の市場は規模が小さいので、10万CFAフラン(約2万円)売上があればいいほうだ。結婚式などの行事のため、グループでおそろいの服を仕立てたいお客がパーニュを買ってくれば、売り上げが上がる。その時には、お客の選んだ絵柄のパーニュをボボジュラソで必要分仕入れる。

商売をする中で時々、パーニュを買ったお客から「いい仕立屋を知らない？」と聞かれることがある。村には腕のいい仕立屋がいないのだそう。すると彼女はパーニュを預かり、ボボジュラソに持ち帰ってヤロさんとギレさんの店に持って行く。店で値段を聞いて客に伝え、お金を準備してもらうこともあるし、客から仕立代の予算を聞いておき、その範囲内で仕立ててもらうこともある。寸法は、お客の服を預かって店で測ってもらったり、自分の体格と比べて特徴を伝え測ってもらったりする。既に持っている服と同じデザインがほしいと言われれば、その服を預かってヤロさんたちに見せるし、あるいは客のためにデザインを選んで

あげることもある。ちなみにこれはお客へのサービスであり、手数料などは取っていない。

彼女にはまた、親しい女性商人の友人が4人いる。彼女を含めた5人組は、扱う商品は塩やジュースなど様々だが、いつも連絡を取り合い、頻繁におそろいの服を仕立てて親交を深めている。おそろいの服を作るときは、布の絵柄だけをそろえることもあれば、服のデザインまでおそろいにすることもある。デザインもおそろいにするときは、友人たちもヤロさんとギレさんの店で注文することがある。これまで通っていた仕立屋から、ヤロさんたちの店に乗り換えた人もいる。

マルティンが商売や友人との関係を大事にする中で、彼女のお客や友人も、ヤロさんとギレさんの店で服を仕立てているのだ。今回の記録期間中の16点についていえば、10点はお客さんのもので、1点はY村で暮らす妹のもの、1点だけがマルティン自身の衣服だった（2点は不明）。

仕立屋と常連客の信頼関係

マルティンに話を聞いた日、彼女はこれからヤロさんとギレさんの店に5点の服を取りに行くと言った。5点の服が今日仕上がる予定なのだ。ただ、黙って約束の日に取りに行っても服が仕上がっていないことも多いそうで、彼女はまた家を出るかなり前に電話をし、「今そっちに向かっているわよ！」と予告する。タクシーを拾う前にも電話

をし、「今タクシーで向かっているから」と伝える。こうして、彼らがもしマルティンの服に取り掛かっていなくても、店に着くまでに間に合わせるよう仕向けているのだ。そんなことを「いつもこうなんだから」とあきれたように言いながら、その実たいして気にも留めていない様子でころころと笑うマルティンの姿には、彼女とヤロさんとギレさんがこれまで築いてきた関係が映し出されているようだ。

マルティンの信頼を勝ち得たヤロさんとギレさんは、そのおかげでもっと多くの人から仕事を受けられる。これは逆も言えることで、マルティンにとっても、信頼できる仕立屋との出会いのおかげで、服を安心して注文できるし、友人やお客さんを喜ばせることができている。ヤロさんとギレさんとマルティンの関係は、彼らだけの個人的なものだ。けれど、彼らが築いているような仕立屋とお客さんの信頼関係は、ポボジュラソのあちこちの仕立屋さんで、築かれているのだろう。

遠藤聡子（えんどうさとこ）



写真①おそろいの服で結婚式に参加する

マルティンたち（中央）

編者と執筆者の紹介

田中 樹（たなか うえる）

総合地球環境学研究所・客員教授、ベトナム・フエ大学名誉教授。専門は、環境農学、土壌学、地域開発論。アフリカやアジアの在来知に学び、人びとの暮らしと資源・生態環境の保全が両立するような技術や生業を創り出す研究に取り組んでいます。

宮寄 英寿（みやぎき ひでとし）

国立民族学博物館・外来研究員、一般財団法人地球環境人間フォーラム・フェロー。専門は、境界農学、環境土壌学。アジアやアフリカにおいて家畜糞尿を介した牧農共存のあり方に関する研究、国内外において雑穀研究、生業活性化に関する研究に取り組んでいます。

石本 雄大（いしもと ゆうだい）

青森公立大学・地域連携センター・専任研究員。専門は、生態人類学、アフリカ地域研究。アフリカ半乾燥地や日本の過疎地域において生業（なりわい）と食の研究に取り組んでいます。

關野 伸之（せきの のぶゆき）

日本学術振興会特別研究員（東京大学）。専門は、環境社会学、アフリカ地域研究。西アフリカの水産資源管理や北海道東部におけるラッコと漁業の共存などを研究しています。

飯塚 明子（いづか あきこ）

宇都宮大学留学生・国際交流センター・助教。専門は防災、災害復興、国際協力学、地域開発論。国内外の災害被災地における復興や地域開発の研究に取り組んでいます。

真貝 理香（しんかい りか）

総合地球環境学研究所・外来研究員。専門は、動物考古学、生態人類学。食を切り口として、縄文時代の狩猟採集活動、山間地域の伝統的生業を研究してきました。現在は、人とミツバチとの関わりから、環境問題の解決をさぐっています。

村山 修二郎（むらやま しゅうじろう）

秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻・准教授、美術家。専門は、絵画、コミュニケーションアート、幼少造形教育。植物に内在する初源的な力を抽出した作品制作、社会地域活動、教育に取り組んでいます。

渡邊 芳倫（わたなべ よしのり）

福島大学食農学類準備室・准教授。専門は、環境保全型農業論、土壌学。山から水田までの農地環境から保全的で持続的に利益を得るにはどうしたらよいか？をテーマに、里山や田畑の環境とその管理方法を研究しています。

記事への謝辞：この記事を書くにあたり、川口由一さん、赤目自然農塾のスタッフの皆様、ナミビア大学のワークショップ職員の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。

大谷 通高（おおたに みちたか）

総合地球環境学研究所・技術補佐員。専門は、社会学、男性学、ジェンダー論。ジェンダーの視点から、人と自然との関わり方や、人の生き方について考えることに興味をもちています。

高木 佳子（たかぎ よしこ）

2007年3月から青年海外協力隊としてベトナム社会主義共和国で活動したことをきっかけに、同国トゥアティエン・フエ省で社会的弱者支援に取り組んでいます。2018年 京都大学地球環境学舎修士課程修了。

岡本 侑樹（おかもと ゆうき）

京都大学大学院地球環境学堂・特定助教。専門は、アジア地域研究、海洋環境学、水産資源保全論。水産・漁業による生態環境負荷の低減と所得安定に向けた身近な技術や、陸域で実施されているプランテーション農業がもたらす沿岸域への影響、水産資源との関係性について研究しています。

寺田 匡宏（てらだ まさひろ）

総合地球環境学研究所・客員准教授。専門は、環境学、歴史学。語り（ナラティブ）の視点から、「わたし（意識を持った人間という存在）」が「世界（自分以外の外部の世界）」と関わる関わり方として「環境」をとらえたいと思っています。また、アンソロポシーンや環境の未来の語りに関心を持っています。

砂野 唯（すなの ゆい）

名古屋大学大学院生命農学研究科・特任助教。専門は、生態人類学、地域研究。アフリカとアジアにおいて、どのように地酒が誕生し、飲酒と食文化が成立していったのか調査しています。

庄子 元（しょうじ げん）

青森中央学院大学・経営法学部・助教。専門は、人文地理学（農業・農村分野）。日本国内やア

ジア、アフリカにおいて食料の生産と流通の組織化を、関係者の利害関係の調整という視点から研究しています。

記事への謝辞：この記事は、JSPS 科研費（16H05685）の成果の一部です。調査に協力して下さったモンゴルの方々に感謝いたします。

関根 良平（せきね りょうへい）

東北大学大学院・環境科学研究科・助教。専門は、環境地理学、経済地理学。日本やアジア農村の就業の変容やそのあり方、地域資源との関係、東日本大震災からの就業の復旧プロセスなどについて研究しています。

記事への謝辞：同上

風戸 真理（かざと まり）

北星学園大学短期大学部・専任講師。専門は人類学。東北アジア地域の越境森林草原火災の研究、モンゴル国と中国内モンゴルとをつなぐ畜糞燃料とその香りをめぐる民族アイデンティティの研究、モンゴルと日本での動物飼育・食習慣・身体装飾に関する比較文化研究に取り組んでいます。

石山 俊（いしやま しゅん）

国立民族学博物館・プロジェクト研究員。専門は、文化人類学、環境人類学、アフリカ、アジアの乾燥地の農村で、農業、農民、文化とその変容の研究をしています。4年間の日本の農村生活をきっかけに、地域活性化のキーパーソンとなる「篤農家」の研究もおこなうようになりました。

大門 碧（だいもん みどり）

北海道大学・国際連携機構・特任助教。専門は、地域研究、都市人類学。アフリカ都市の暮らしに、エンターテインメントをつくりだす様子からアプローチする研究に取り組んできました。調査地はウガンダの首都カンパラですが、現在は生活拠点であるザンビアの首都ルサカからフィールドのことを考えています。

大平 和希子（おおひら わきこ）

東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム博士後期課程。専門は、アフリカ地域研究、政治学。アフリカ農村部に暮らす人々にとって、また、国家にとって「伝統的権威」とはどのような存在なのか。その関係性に興味があり、ウガンダ西部ブニョロキタラ王国の研究に取り組んでいます。

山根 裕子（やまね ゆうこ）

日本学術振興会特別研究員。専門は地域研究、熱帯農学。アフリカの農村での住み込み型の調査を通じ地域の人々の暮らしや農業の仕組みを明らかにする研究に取り組んでいます。最近、途上国の農業への適切な技術支援の在り方について考えることをテーマとした研究に取り組んでいます。

藤本 麻里子（ふじもと まりこ）

京都大学・アフリカ地域研究資料センター・研究員。専門は、アフリカ地域研究。アフリカや日本の漁村・漁業立地地域において、小魚・雑魚漁と加工産業に関する社会・経済的研究を行っています。

記事への謝辞：この記事は、総合地球環境学研究所「砂漠化をめぐる風と土と人」プロジェクト、および科研費（12J04503、17K15330）の成果の一部です。

福田 聖子（ふくだ せいこ）

日本大学生物資源科学部・国際地域開発学科・国際協力研究室・助教。JICA青年海外協力隊、研究員を経て、現在もアフリカの果樹栽培普及に関する研究に取り組んでいる。

中尾 淳（なかお あつし）

京都府立大学・准教授。専門は、土壌化学。環境を支える土の役割や土がつくられるしくみ、土と大気や水とのかかわりについて研究しています。

記事への謝辞：この記事は、科研費（20248034）の成果の一部です。

遠藤 聡子（えんどう さとこ）

内閣府大臣官房企画調整課野口英世アフリカ賞担当室・主査。専門はアフリカ地域研究。アフリカのプリント更紗「パーニュ」を用いた衣服とそれを作る仕立屋のように、アフリカの文化と、それを支える人の仕事に関心があります。

フィールドで出会う風と人と土4

編 者 田中樹 宮寄英寿 石本雄大

デザイン 田中樹

発 行 総合地球環境学研究所
京都市北区上賀茂本山457 番地4

発行日 2019 年3 月31 日

© 2018 田中樹、宮寄英寿、石本雄大

ISBN 978-4-906888-58-0

